福岡南バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)

第　2　集

1 9 7 5

福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡南バイパス関係

埋蔵文化財調査報告

筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)

第　2　集

序

この報告書は、福岡県教育委員会が九州地方建設局の委託を受けて、昭和46年度から49年度にかけて実施した、一般国道3号線福岡南バイパス建設路線内の埋蔵文化財発掘調査の記録の一部であります。

今回の報告は、筑紫郡太宰府町所在の御笠川南条坊遺跡についてのもので『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集に続くものであります。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、本報告書を通して文化財に対する関心を深める方が一人でも増えれば、望外の喜びとするものであります。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位のご援助とご配慮により本書を発刊するはこびになりましたので、心からの感謝を申し上げます。

昭和50年3月31日

福岡県教育委員会

教育長　森田　實

例　　言

1．本書は、国道３号線福岡南バイパス建設事業に関連して、昭和48年度に実施した御笠川南条坊遺跡の第５次発掘調査の概要報告である。

2．調査は九州地方建設局福岡国道工事事務所の委託を受けて、福岡県教育委員会が実施した。

3．本書の執筆分担は次のとおりである。

一……新　原　正　典
二……新　原　正　典
三……新　原　正　典
四……前　川　威　洋
五……新　原　正　典
六　1～11……前　川　威　洋
　　12～21……新　原　正　典
七……新　原　正　典
付……浜　田　信　也

4．掲載写真の撮影、実測図の作成および製図は各執筆担当者が行なった。

5．付編として昭和46年度に行なわれた水城跡発掘調査概報を収録した。

6．本書の編集は前川威洋、新原正典が担当した。

本　文　目　次

頁
一、はじめに……1
二、位置と環境……2
三、調査経過……5
四、層位……6
五、遺構……6
1．建物・柱穴……7
2．溝……7
3．土坑……8
4．井戸……10
六、遺物……14
1．須恵器・土師器……14
2．ＳＫ546土坑出土土器……17
3．下層土師器・Ⅰ類……17
4．上層土師器・Ⅱ類……19
5．土鍋……31
6．片口……31
7．火鉢・土釜……33
8．磁器……33
9．雑器……40
10．常滑陶器……44
11．瓦……47
12．墨書礫……48
13．石製品……48
14．土製品……49
15．ガラス・金属製品……51
16．軽石製品・砥石……52
17．石鍋……53
18．銅銭……54
19．木製品……55
20．下駄……59
21．履物状木製品……66
七、おわりに……72
付　水城地区（水城跡）の調査……73

図　版　目　次

本文対照頁

図版1．1．遺跡付近航空写真（東から）…… 2
　　2．遺跡全景航空写真…… 6
　2．1．上層遺構全景（西から）…… 6
　　2．上層遺構全景（東から）…… 6
　3．1．東区下層遺構全景（南から）…… 6
　　2．ＳＤ501 溝南壁土層（北から）…… 7
　4．1．建物遺構（東から）…… 7
　　2．ＳＫ501 土坑土師器出土状態…… 8
　5．1．ＳＫ513 土坑土師器出土状態…… 8
　　2．ＳＫ520 土坑土師器出土状態…… 8
　6．1．土坑出土状態…… 8
　　2．井戸出土状態…… 10
　7．1．ＳＥ508 井戸…… 10
　　2．ＳＥ504 井戸…… 10
　8．1．ＳＥ503 井戸…… 10
　　2．ＳＥ501 井戸…… 12
　9．1．ＳＥ510 井戸…… 12
　　2．ＳＥ506 井戸…… 12
　10．1．ＳＥ509 井戸…… 12
　　2．ＳＥ514 井戸…… 12
　11．1．ＳＥ512 井戸…… 12
　　2．ＳＥ505 井戸…… 12
　12．土師器・瓦器…… 19
　13．土師器…… 19
　14．1．須恵器壺…… 17
　　2．火鉢…… 33
　15．1．片口(1)…… 31
　　2．片口(2)…… 31

本文対照頁
図版16. 1．完形青磁椀…… 37
2．青磁Ⅰ類…… 33
17. 1．白磁(1)…… 33
2．白磁(2)…… 33
18. 1．白磁(3)…… 33
2．白磁６類…… 33
19. 1．青磁７類(1)…… 37
2．青磁７類(2)…… 37
20. 1．青磁…… 37
2．高麗青磁…… 40
21. 1．青磁９類(1)…… 37
2．青磁９類(2)…… 37
22. 1．雑器１類…… 40
2．雑器７類…… 42
23. 1．墨書礫…… 48
2．墨書木札…… 56
24. 1．滑石製品・硯…… 48
2．石鍋…… 53
25. 1．ガラス・金属製品…… 51
2．銅銭…… 54
26. 1．木製品…… 55
2．木偶…… 55
27. 1．箸…… 56
2．動・植物性遺物（ＳＫ501 土坑出土）…… 8
28. 下駄(1)…… 59
29. 下駄(2)…… 59
30. 1．下駄(3)…… 59
2．下駄歯…… 59
31. 履物状木製品…… 66
32. 1．水城跡発掘状況…… 73
2．調査区土層…… 73

挿　図　目　次

頁

1図　位置図…… 3
2図　遺跡全図…… 4
3図　上層遺構図……折込み 6～7
4図　下層遺構図……折込み 6～7
5図　ＳＤ501 溝断面図（南壁）…… 7
6図　井戸実測図(1)…… 10
7図　井戸実測図(2)…… 11
8図　井戸実測図(3)…… 12
9図　井戸実測図(4)…… 13
10図　須恵器・土師器実測図…… 15
11図　ＳＫ546 土坑出土土器，土鍋実測図…… 16
12図　下層土師器・瓦器実測図…… 17
13図　土師器実測図（ＳＫ520 土拡出土）…… 27
14図　土師器実測図（ＳＥ514 井戸出土）…… 28
15図　土師器実測図（ＳＥ505 井戸出土）…… 28
16図　土師器実測図（ＳＫ501 土坑出土）…… 29
17図　土師器実測図（ＳＥ516 井戸出土）…… 30
18図　片口実測図…… 32
19図　火鉢・土釜拓影…… 34
20図　白磁実測図…… 35
21図　青磁・天目・白磁・青白磁実測図…… 36
22図　青磁実測図…… 38
23図　青磁・高麗青磁実測図…… 39
24図　雑器実測図(1)…… 41
25図　雑器実測図(2)…… 43
26図　雑器実測図(3)…… 44
27図　常滑陶器実測図・押印拓影…… 45
28図　瓦拓影…… 46

頁
29図　文字瓦拓影……47
30図　石製品実測図……49
31図　土製品・ガラス製品・金属製品実測図……50
32図　軽石製品・砥石実測図……52
33図　石鍋実測図……53
34図　銅銭拓影……54
35図　木製品実測図(1)……55
36図　木製品実測図(2)……57
37図　木製品実測図(3)……58
38図　下駄実測図(1)……60
39図　下駄実測図(2)……61
40図　下駄実測図(3)……62
41図　下駄実測図(4)……63
42図　下駄実測図(5)……64
43図　下駄実測図(6)……65
44図　履物状木製品実測図……67
45図　水城跡発堀調査地点……73

表　目　次

頁

1表　発掘調査工程表……1

2表　ＳＫ520 土坑出土土師器の法量……18

3表　ＳＥ514 井戸出土土師器の法量……19

4表　ＳＥ505 井戸出土土師器の法量……20

5表　ＳＫ520 土坑出土土師器計測表……20

6表　ＳＫ501 土坑出土土師器の法量……21

7表　ＳＥ514 井戸出土土師器計測表……21

8表　ＳＫ513 土坑出土土師器の法量……22

9表　ＳＥ505 井戸出土土師器計測表……22

10表　ＳＥ516 井戸出土土師器の法量……23

11表　ＳＤ502 溝出土土師器の法量……24

12表　ＳＫ501 土坑出土土師器計測表……25

13表　ＳＥ516 井戸出土土師器計測表……26

14表　履物状木製品計測表……66

15表　井戸一覧表……68

16表　銅銭一覧表……69

17表　下駄一覧表……70

18表　土坑一覧表……71

一、 はじめに

福岡南バイパスは大宰府町内において大宰府条坊内を北西から南東へと斜めに横断する。路線は条坊内の北部においては、西方へと貫流する御笠川の氾濫原を通過するが、御笠川を南へ渡った西鉄太宰府線沿いの五条付近では、氾濫原とともにきわめて低い台地部を通過する。この地域は周辺より一段高い所にあり、台地裾野部に位置するところから遺跡の包蔵地であることが予想され、昭和46年２月から約２ケ月にわたって遺跡の範囲と性格を確認するための予備調査が実施された。

その結果，杭列や条坊の側溝と考えられる溝などが検出され，遺跡の範囲も広範囲にわたって存在することがわかり，遺構の保存も良好であることが確認された。

この予備調査の結果に基づき、福岡県教育委員会は昭和46年度より本調査を開始し、昭和49年度の第６次調査をもって御笠川南条坊遺跡の発掘調査を終了した。

４年間、６次に及ぶ発掘調査の実施期間等は下記の表のとおりである。

1表　発掘調査工程表

調査次	調査地区	調査面積	調査期間
第１次	6AYECK	2,000㎡	昭和46年10月11日～昭和47年３月20日 昭和47年８月18日～昭和47年９月12日
第２次	6AYECL	1,000㎡	昭和47年９月13日～昭和48年３月17日
第３次	6AYEBM	1,000㎡	昭和48年２月10日～昭和48年６月19日
第４次	6AYEBM	700㎡	昭和48年９月10日～昭和49年１月10日
第５次	6AYEBL	1,400㎡	昭和48年11月22日～昭和49年３月20日
第６次	6AYEBM	1,050㎡	昭和49年４月８日～昭和49年８月24日

なお今回の報告は昭和48年度に実施した第５次調査分のもので、他の調査次のものは改めて報告する予定である

発掘調査関係者

調査担当者	福岡県教育庁管理部文化課技師	前川威洋
	同	新原正典
庶務担当者	福岡県教育庁管理部文化課主査	師岡満
調査補助員	九州大学文学部考古学研究室	赤崎敏男
	同	緒方悦子

また、この調査には下記の学生諸氏、および地元の方々の協力を得た。

別府大学学生　土居隆臣　原田保則

地元協力者

井上健太　市川大助　別府文明　山口英輔
井上ヒサコ　白水正枝　日永田貞子　日永田シゲコ
長谷とし子　小島カネ子　後藤ユクノ　光島キリエ
北川正子　園田ミツコ　高田スミ子　松田せつ子
平山和子

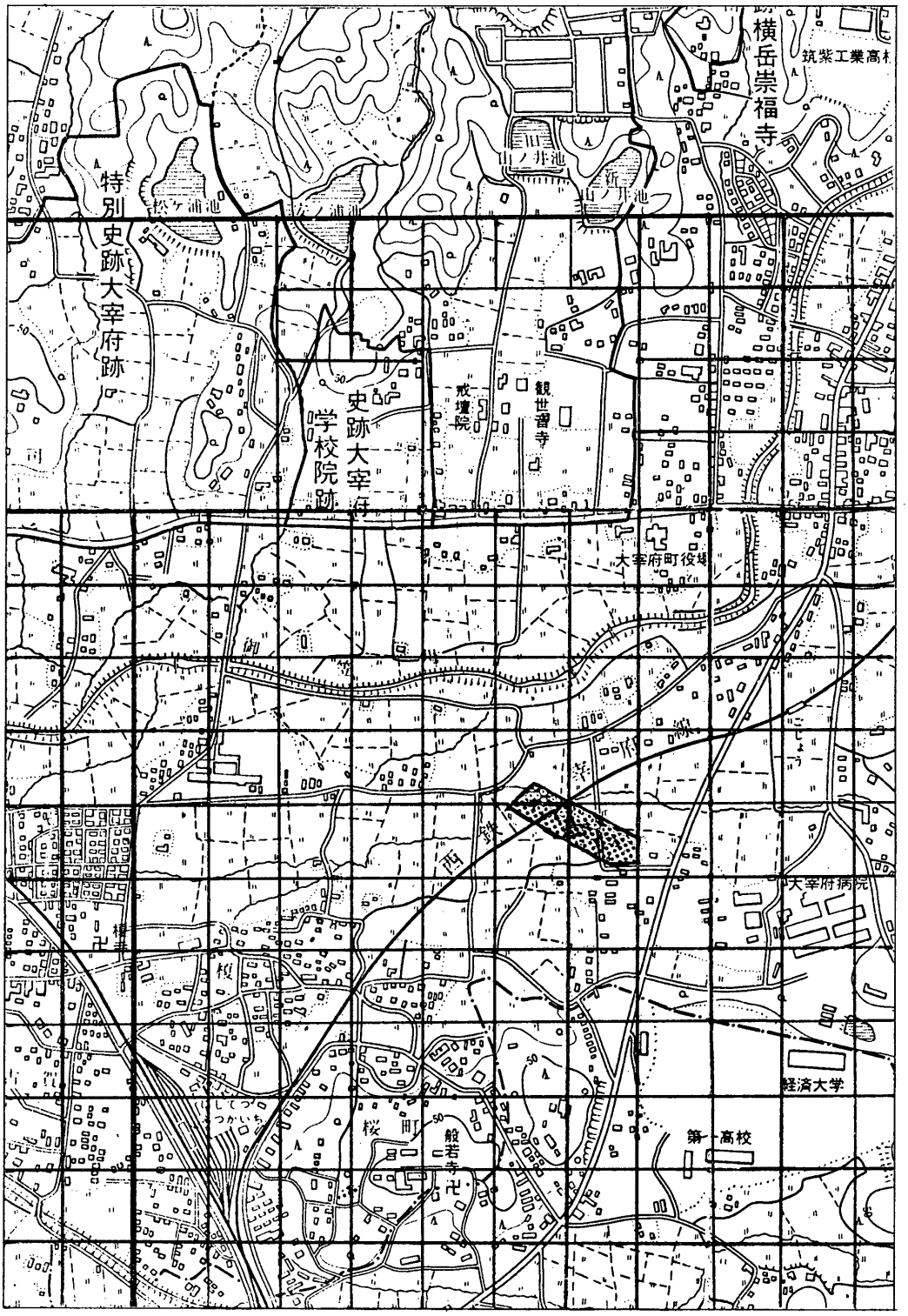
二、位置と環境

「遠の朝廷」と呼ばれ，古代九州において９国３島を統轄し，併せて大陸に対する門戸の役割りを果たした「大宰府」，今でも多くの礎石が整然と並び往時をしのばせてくれるのがその大宰府の中心部，政庁跡（都府楼）である。

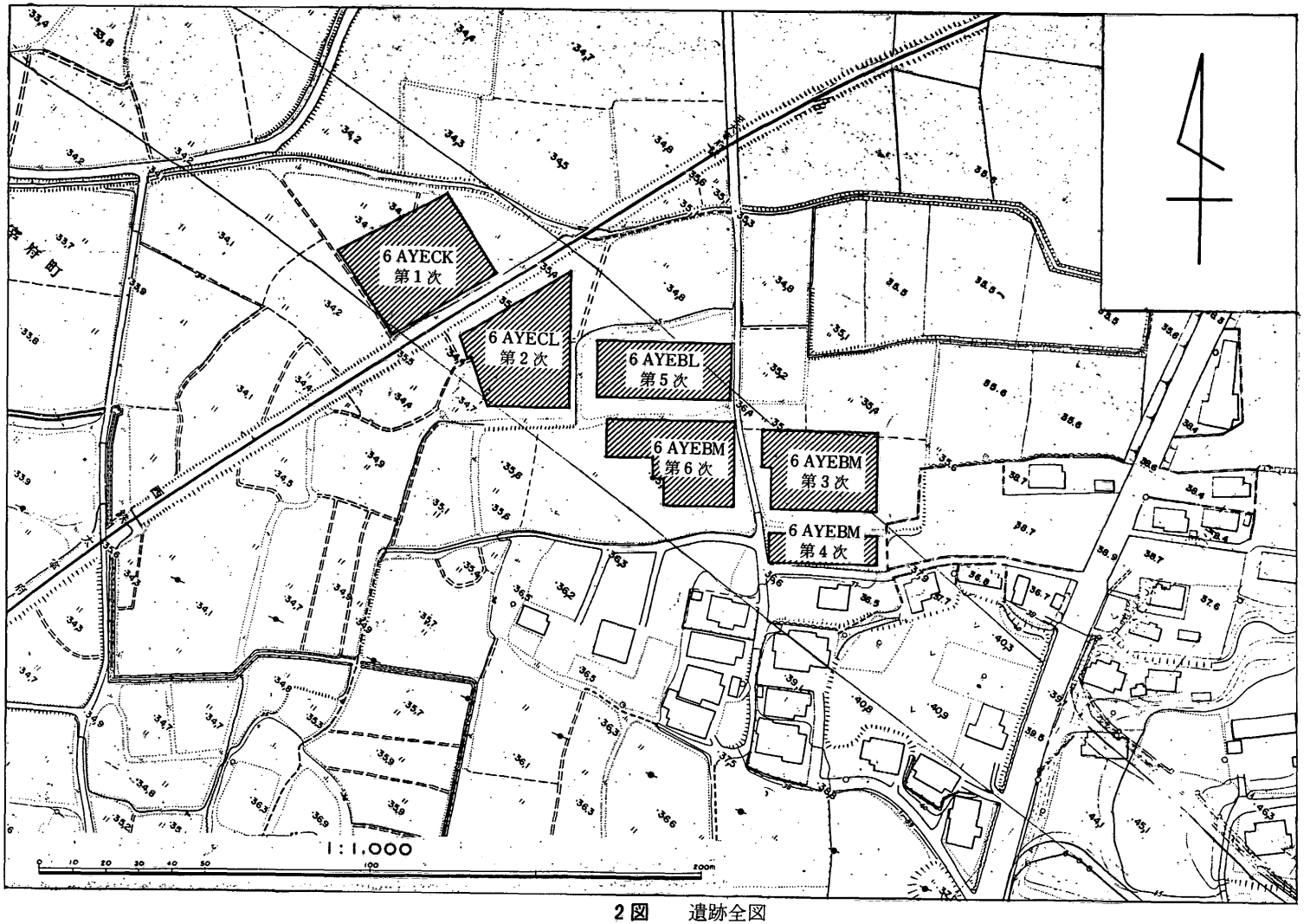
この政庁を中心として大宰府の条坊がしかれ，政庁からまっすぐ南へのびる中央の大路を中心として左右両郭に分かれ東西おのおの12坊，南北22条に区画されていたと考えられている。

それによると政庁跡の前面を東西に走る県道吉木一関屋線が五条路に比定されている以外は不明な点が多く，今回の調査地点は左郭の六・七坊八・九条の地域にあたると推定される所である。

遺跡は福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字平野及び字泉水に所在し，行政上では五条区に属している。古来筑前の惣鎮守として信仰をあつめた宝満山（ 868m ）は太宰府町の北西部に鎮座し，そこから南へのびる丘陵の一端は太宰府町の南部にて高雄山（151m ）となり，さらにそこから東へ派生した丘陵は御笠川との間にきわめて低い台地をつくる。一方，宝満山から流れ出す御笠川は太宰府町近くにて谷あいを抜け，五条付近にて広い氾濫原をつくる。この氾濫原と南からの低い台地とにわたって遺跡が所在し，二日市と太宰府町を結ぶ西鉄太宰府線が奈良時代のものとされる般若寺址の台地下を抜けて，五条駅にかかる約１km手前の両側に広がる水田が今回の調査地域で，線路が遺跡を２分したかたちとなっている。



1図　遺跡位置図（$\frac{1}{10,000}$）


6 AYECK
第1次
6 AYECL
第2次
6 AYEBL
第5次
6 AYEBM
第6次
6 AYEBM
第3次
6 AYEBM
第4次
佐賀町
1:1,000

2図　遺跡全図

三、 調 査 経 過

第５次調査は６ＡＹＥＢＬ区について行ない，昭和48年11月22日より昭和49年３月20日までの約４ケ月間にわたって実施した。これに先立つ９月10日より第４次調査として６ＡＹＥＢＭ区の発掘を始めており，昭和49年の１月までは両地区平行したかたちで調査を行った。

６ＡＹＥＢＬ区は遺跡のほぼ中間部に所在する水田（標高 35.10m ）で，昭和46年の予備調査においてＣトレンチが設定された地区であり，柱穴等が多数検出されている。また水田の東端にはほぼ南北方向にのびる農道が接しており，予備調査や第３次調査においてこの農道の両側にやはり南北にのびる溝が検出されているところから，東端を農道に接して東西40m，南北18m の調査区を設定した。

なお，当遺跡は数年次にわたる調査と，同じ条坊内に所在する他の遺跡との関連から，調査地区の地区割り等については九州歴史資料館による大宰府史跡の地区割り基準によって地区割りと基準方眼を調査対象地区に設定した。

遺構の標示についてもそれを踏襲し，一部改変して遺構番号はすべて３桁の数字で表わすことにした。すなわち遺構記号のアルファベットの後の１桁目の数字は調査次数を表わし，下２桁が遺構の番号を示すものである。例えば５次調査で発見された12番目の井戸はＳＥ 512 と標示される。

発掘調査は旧トレンチ内の埋土除去からはじめ，12月10日には早くも東区において南北方向にのびる溝の上面を検出し，予備調査のＤトレンチで確認されている南北溝の続きであることが明確となった。

１月11日からは西区（中央アゼより西）の遺構検出にかかり，多数の柱穴とともに井戸，土坑，屈曲する溝を検出し，16日より遺構の掘り下げを行った。25日には西区の全景写真及び部分写真の撮影を行ない実測を開始した。また前日の24日からは東区の遺構を掘り下げ，井戸などを検出した。

２月16日より西区下層を発掘し，遺構は部分的にしかみられないが遺物を多数出土した土坑もみつかっている。18日より東区の実測を開始する。

３月10日より東区下層の発掘を行ない，南北方向の溝３条検出。調査も最終段階に近づき，14日よりＬＤ２区付近にて検出されている建物遺構の規模確認のため西側に拡張，根石が３個確認され，２間×２間の建物址であることがわかる。下層発掘後に開始していた井戸の掘り上げは３月19日までにすべて終了し，３月20日，細部の検討を行なって第５次調査を終えた。

四、 層　　位

土層はほぼ水平で，大きな変化はみられず，その包含層は北で厚く，南でやや薄くなっていて，地表からおよそ60～100cmの厚さである。

土層を上から順に説明すると，

1層は耕土で，約10cmの厚さがある。**2層**は床土で，茶褐色土であるが，一部山土をもってきた黄色土もある。鉄分を含み，約20cmの厚さである。**3層**は灰褐色砂質土で，厚さ20～30cm程度で，遺物も含むが破片が多い。**4層**は礫混黒褐色砂質土で，遺物を含み，北東部で厚く20cm程度であるが，他の地区では，薄いか，あるいは見られないところもある。**5層**は黒褐色土で遺物を多く含み，完形土器も多い。**6層**は暗灰色礫混砂泥層で，一部北西端部においてみられるが，ほとんどは下層の溝の部分として残っているだけである。**7層**は鉄分を含む褐色土層で，西区の南端近くに，一部みられるだけで，須恵器，土師器を含んでいる。**8層**は黄灰色荒砂層で，部分的に点在する程度で，須恵器などを出す。

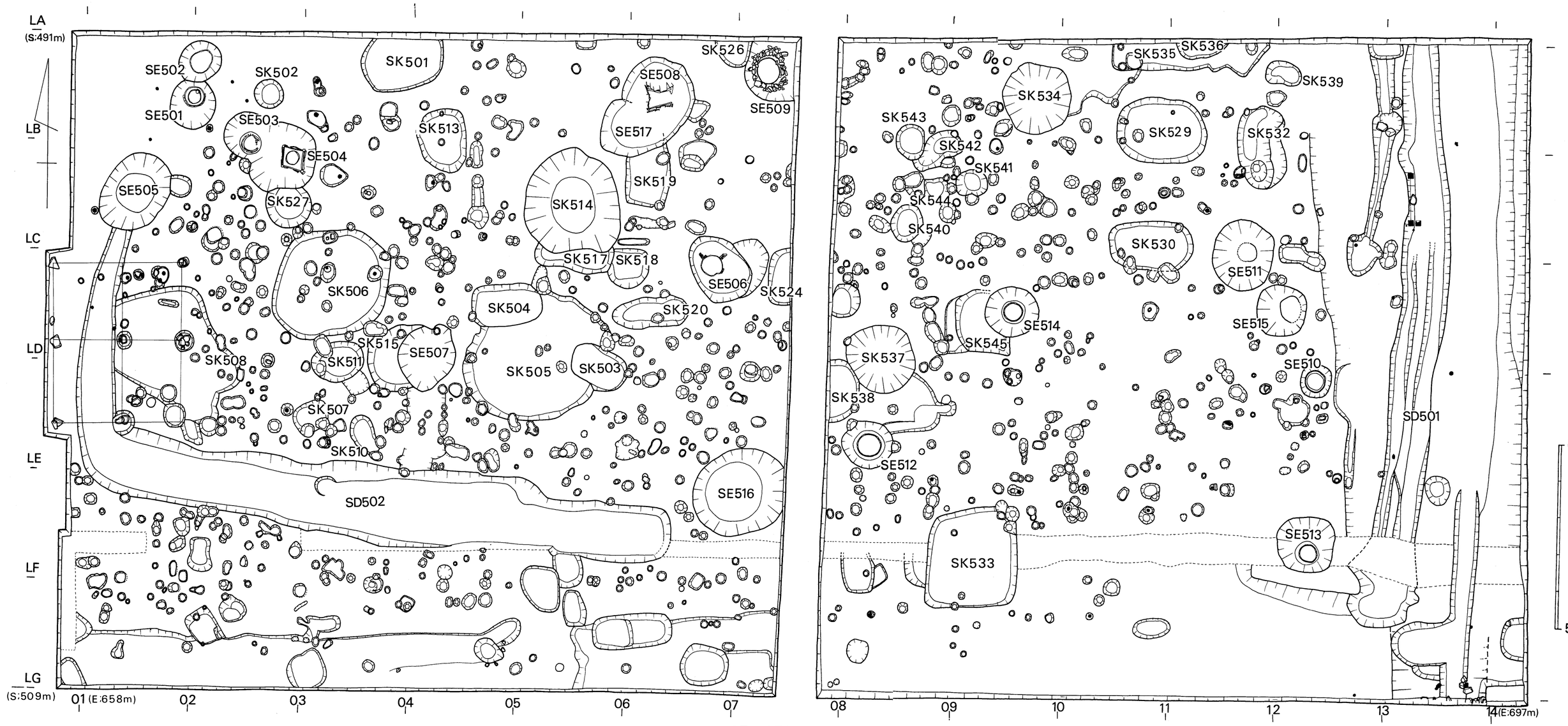
各層の出土遺物は1～2層までは近世の陶磁器を含み荒らされていて，確実な包含層は3層からである。3～5層は鎌倉時代の糸切底の土師器である遺物を最も多く含み，すべてこの層を掘った段階で多くの柱穴や土坑，溝，井戸などの遺構が発見されている。6層は平安時代のヘラ切底の土師器や瓦器椀が出土している。7層からは，奈良時代の土師器，須恵器がみつかり，8層からは古墳時代の須恵器，土師器のみが出土している。その下は砂層や，細砂質の地山で，遺物を含んでいない。これらの土層のうち，その主たるものは3～5層と6層で，前者を**上層**，後者を**下層**とよんでもさしつかえないであろう。

五、 遺　　構

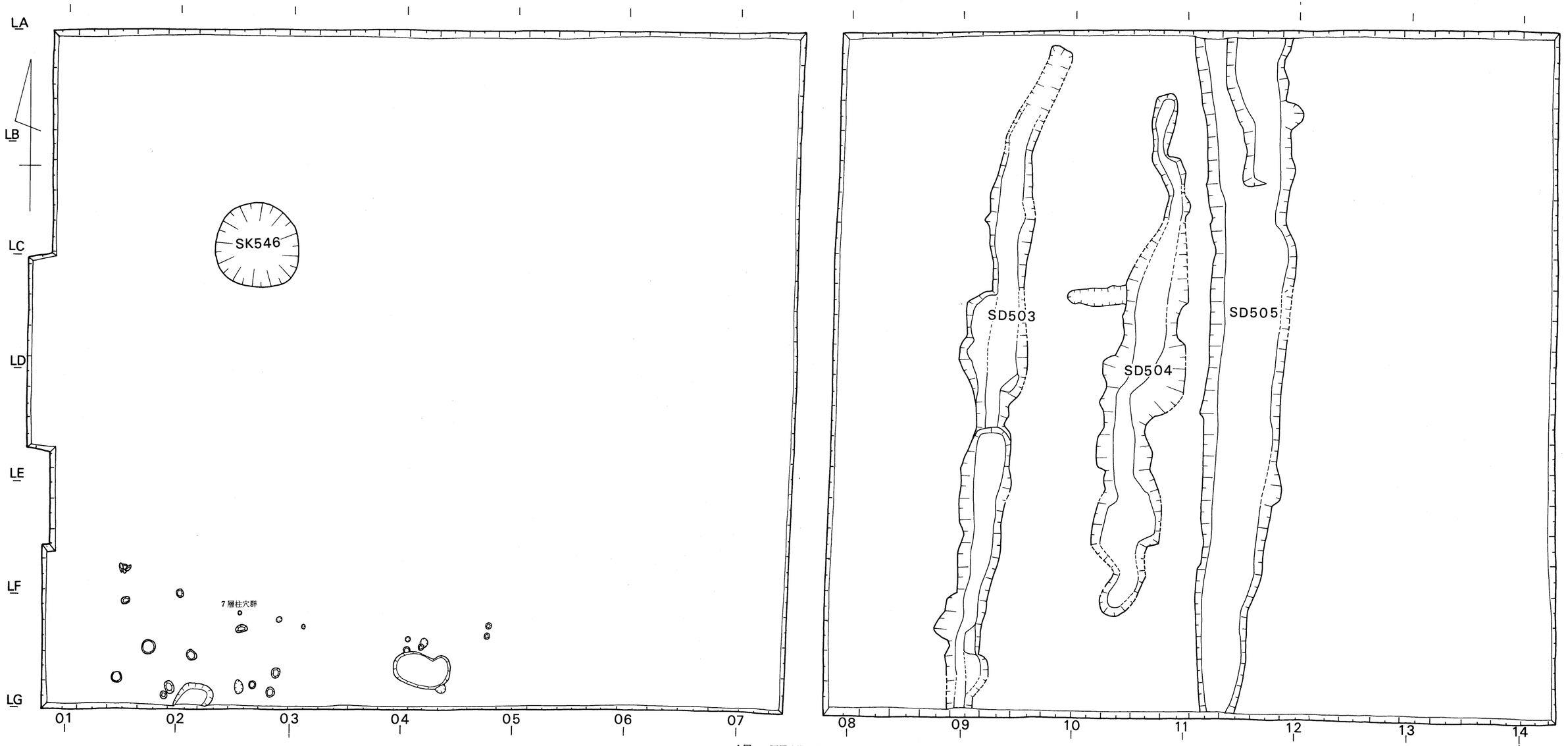
第5次，6AYEBL区の調査では上・下2層にわたって遺構面が確認された。上層は3～5層の暗茶褐色土及び黒褐色土下に掘り込まれているもので，柱穴，溝，土坑，井戸などが検出されている。

下層は地山面に掘り込まれていて，柱穴，溝，土坑を検出したが調査区全域にわたってはみられない。7層は南側の低台地裾野部にかたよっているようである。ここからは奈良時代の土師器，須恵器などが出土している。

以下これら検出遺構についてのべる。



3図　上層遺構配置図（1/80）



4図　下層遺構配置図（1/80）

1．建物・柱穴

建物の柱穴と考えられるピットは多数みつかり調査区全域において800余りが検出されている。大きさは20～40cmのものが多く深さも一定していないが概して20～50cm内に納まるものが多く，深いものでは湧水するものもある。埋土は炭分を含んだ暗茶褐色土がつまつており，ほとんどが土器片を含み，なかには銅銭や石鍋，下駄歯などが混入しているものもある。

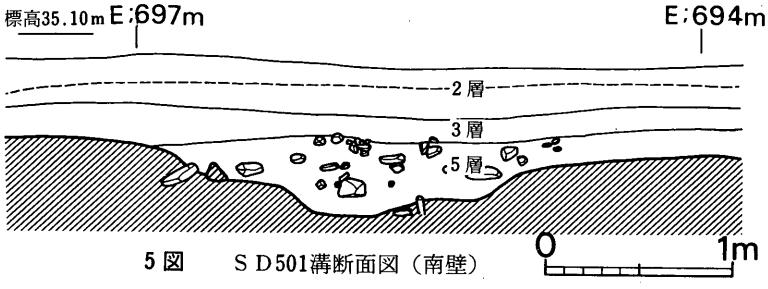
また柱穴内に根石や柱根を残したものもあり，根石は1個だけのものから4～5個つめ込んだものまである。柱根は不規則な多面体で，下端も尖ったものや丸味を帯びたものが多く，平担なものは少ない。

このように多数の柱穴が存在するが，建物としてまとまるのは少なく，ただＬＤ２区付近にて東西，南北ともに2間の根石をもった柱穴群は建物としてまとまるものである。それぞれの柱穴間は一定しておらず，南北2.2m，東西1.8mをはかる。

またＳＤ501溝のＬＢ13区肩部付近にて四方を面取りした角柱が3本並んだ状態で発見されている。北側にあるものは14.5cm四方でその南のものは10.3×14.5cm，東側のものは一辺10.3cmの寸法で下端小口部も平担面をつくる。南北間の距離は角柱間で1.30mをはかり，東西は，0.2ｍの間隔である。更に詳しい検討についてはつぎの機会にゆずることにする。

2．　溝

ＳＤ501　調査区東端において検出し，ほぼ南北方向にのびる大溝である。溝幅は北側へいくに従がって広がり乱れていて，肩部もはっきりしないが，約5.5mをはかる。深さも浅く0.3mほどである。また南側において平面では，肩部の立ち上がりがはっきりしないが，南壁にあらわれている断面では，ゆるやかな「Ｖ」字状をなし，幅約2m深さ0.4mである。溝底面は青灰色砂層まで掘り込まれていて，大きく２条にわかれていてつながらず，くい違っている。中央のものは東側にあるものよりも幅が広いが南端において行き止っている。また東側のものは北端にて肩部がなくなり，底面は西側溝の肩部と同一レベルとなるが，約2ｍの間隔をおいて一



5図　ＳＤ501溝断面図（南壁）

部平行に掘り込まれている。これら溝底面のくい違いは，流路の時間的な変化によるのか，あるいは意識的な掘り込みによるものかはっきりしないが，大きくみて一条の大溝として扱ってもさしつかえないものである。

また南側南壁付近においては両肩部付近に杭が打たれている。護岸用のものであろうか。溝内は礫混黒褐色土が堆積し土師器や青磁などの各種土器や下駄などの木製品が出土している。

このＳＤ501溝は調査区の東側に接した南北方向の農道とほぼ平行して走っており，更にこの農道の東側においても南北方向の溝が確認されていることから，この側溝間が道路敷とも考えられ，条坊の一部をなすものではないかと思われるが，更に詳しい検討を要するものである。

ＳＤ502　この溝は，中央部から西側にかけて検出，Ｌ22区付近にて北へと屈曲する「Ｌ」字状の溝である。溝幅は一定しておらず広いところで2.1m，狭い所で0.6mと，北の方が狭くなる。深さも一定しておらず北の方へ傾斜している。両溝はともに行き溜まった状態で，のべ24mほどの長さであるが，溝よりも堀というべき性格のものであろう。各種土師器，青磁，下駄などが出土している。

ＳＤ503,ＳＤ504,ＳＤ505 は，下層にて検出された溝でともに南北方向へ延びるものであるが，ＳＤ503，ＳＤ504溝は北端にて終り，ＳＤ505溝のみが続いている。ＳＤ505溝は２mの幅をもつものであるが，他の２条は１mほどの小さいものでいずれも浅い。灰色粘質土が堆積しており，ヘラ切り土師器，瓦器椀，黒色土器などの古い時期のものが出土している。

3．土　坑

土坑は各種の形態・大きさのものが検出されているが，基本的には円形と方形のものに大別される。以下代表的なものを例にとって類別してみよう。

ＳＫ501　調査区北壁に接して検出され，長径2.35m，短径1.7m，深さ0.37mをはかる楕円形の土坑である。暗灰色土や有機質土がつまっていて，中からは杯・小皿などの完形土師器，箸や曲物薄板などの木製品，桃や梅の種子のような植物性遺物，魚骨，鳥骨などの動物性遺物や政和通宝，咸平元宝の銅銭も共伴して出土している。とくに土師器完形品は約364枚，箸は約200本まとまって出土している。（図版27の２）

ＳＫ513　長径1.58m，短径1.29m，深さ0.16mの楕円形をなす。これもＳＫ501と同様に多量の土師器類を出土している。

ＳＫ520　長径2.11m，幅0.8m，深さ0.23mの細長土坑で，土師器・瓦器・青磁・白磁などが一括出土している

ＳＫ505　長径4.0m，短径3.4m，深さ0.24mの楕円形をしたもので，ＳＫ503,504土坑に切られている。

ＳＫ508　径2.7m，深さ0.18mの隅丸方形の土坑で，**ＳＫ506**も3.16m×2.86m，深さ0.15mの

楕円形を呈し，いずれも３ｍをこえる大形のもので内部には黒色粘質土が堆積し，底面からは柱穴もみつかっている。出土遺物も土師器，青磁などが出土しているが，概して少ない。

ＳＫ 503　長径1.58m，短径1.08m，深さ0.21mの長方形をなすもので，土師器，須恵器，青磁などが出土。

ＳＫ 504　長径1.92m，短径 1.0m，深さ0.14mの長方形プランでＳＫ503と同様にＳＫ505を切っており，ともに床面に張り付いて土師器が出土している。

ＳＫ 514　長径2.8m，短径2.6m，深さ0.72mの円形をなすもので，土師器，ヘラ切り土師器，青磁，白磁などが出土。

ＳＫ 534　径1.94mの円形で深さ 0.5mをはかる。ヘラ切りの土師器が多く出土し，黒色土器や白磁，文字瓦などが出土。

ＳＫ 537　径1.79m，深さ0.71mをはかり，これもヘラ切り土師器が多く，他に青磁，白磁，瓦などが出土している。

以上代表的なものだけに限ってみてきたが，今回の調査分では４種に大別される。

Ａは，ＳＫ501，513にみられるように円形ないしは楕円形のプランをなし，土師器杯・皿などを多量に包蔵するものと，Ｂは，ＳＫ505,506,508のように3mを越える大形のプランをもつもので，深さは浅いもの，Ｃは，ＳＫ503,504,530 といった長方形のプランをなす一群であり，Ｄは，ＳＫ514,534,537などのように，径1mほどの円形を呈し，深さも深く湧水層の砂層にまで掘り込んでいるもの，の４種である。

Ａについては草戸千軒町遺跡でも同様なものが検出されていて，住居に伴なう遺構―台所の一部とされているが，今回の調査においても多数の土師器類とともに箸や食物性遺物が出土しており，それを裏付けるものであろう。Ｂ，Ｃのグループについてはよく分らないが，Ｃについては長軸を東西方向にとるものが多いようである。墓坑的な性格をもつものであろうか。Ｄについては湧水層まで掘り込まれていて井戸とも考えられるが，井戸側となるような部材が検出されておらず，素掘りの井戸と考えられる。これらはともにヘラ切り土師器も出土しており，時期的には少し遡るものであろう。

下層からはＬＣ３区において**ＳＫ 546**土坑を一基検出した。径2.2ｍのほぼ円形プランをとり，青灰色砂層に掘り込まれている。内部からは平安時代のものと思われる土師器甕，須恵器壺，瓦などが出土している。

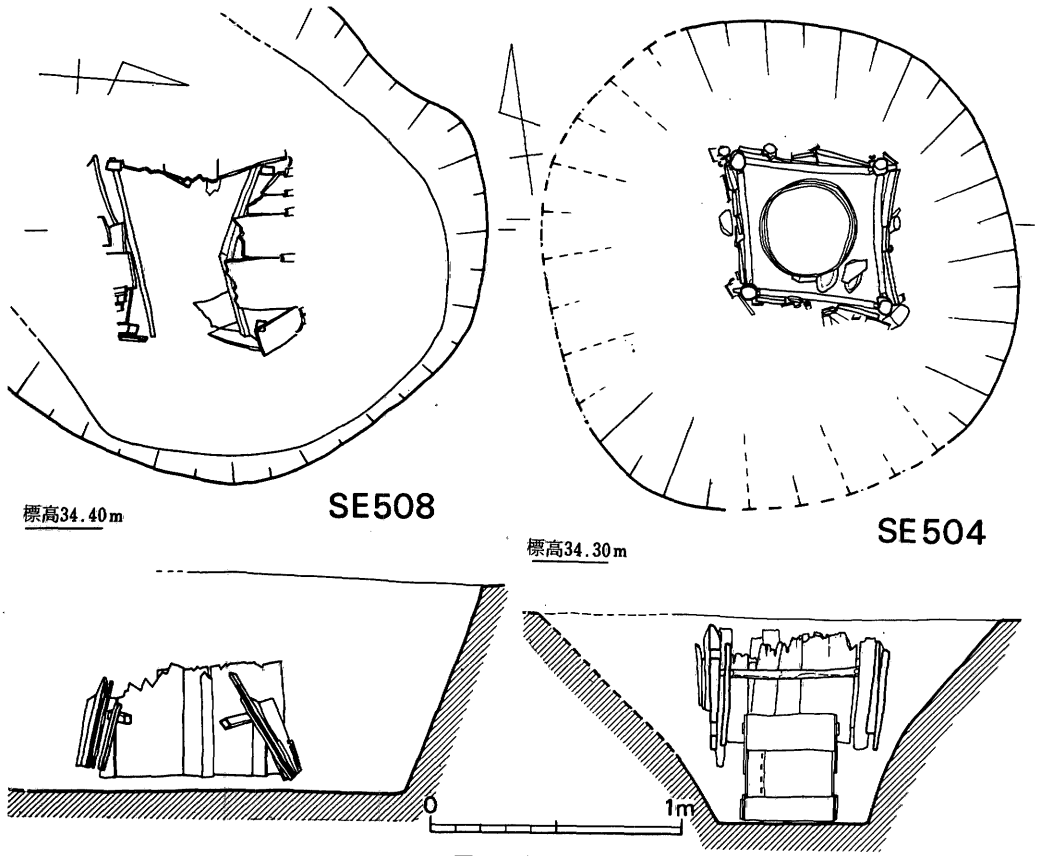
4．井　戸

井戸は今回の調査では17基検出された。以下個々の井戸について略述してみよう。

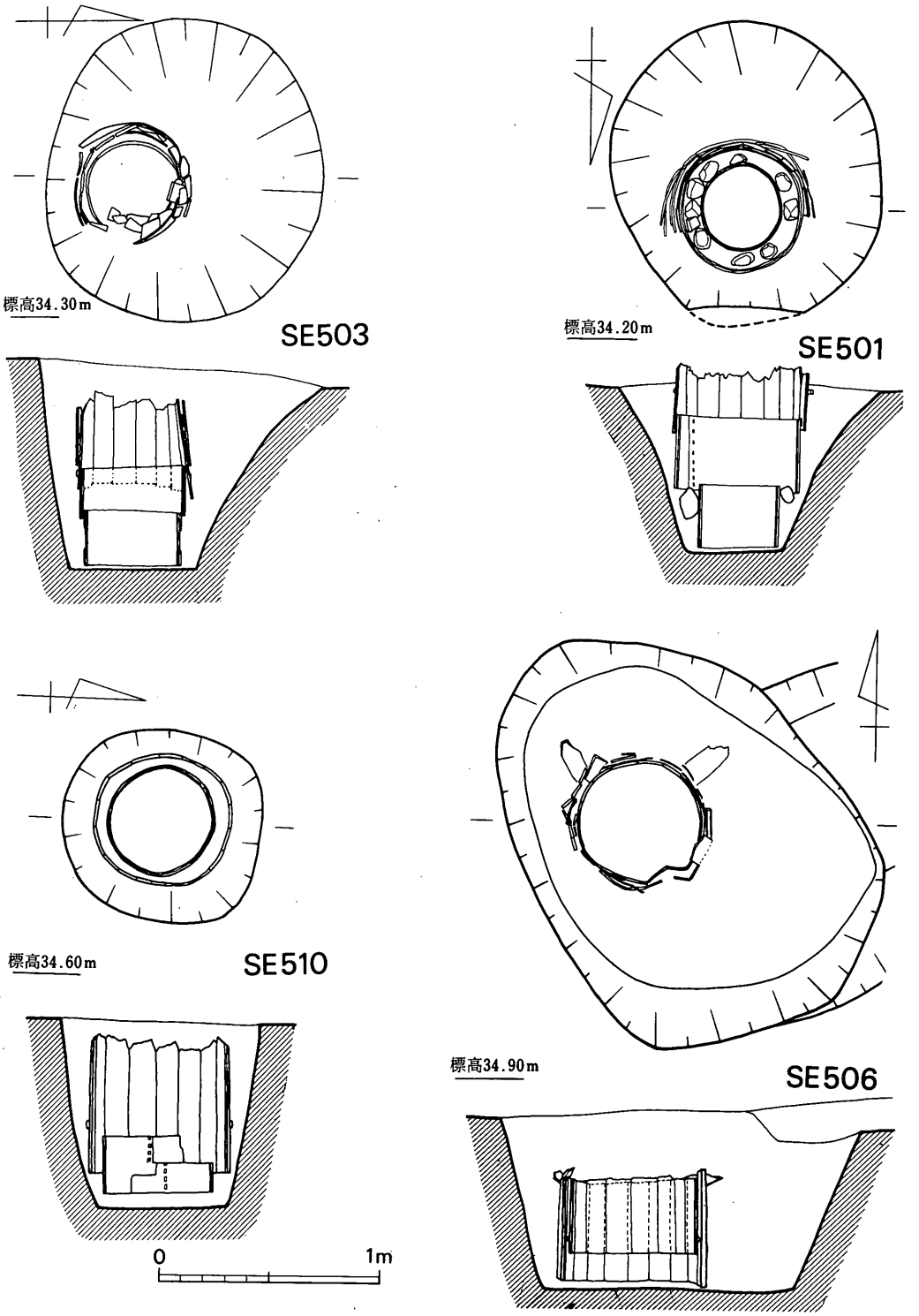
SE508 東側部分を欠損するがほぞ穴をあけた角材の四隅を立て，それに凸に造り出した横桟をわたして枠組みとし，幅15～30cmの縦板を用いて四方を囲み側板としている。縦板の接合部には外側から半截竹管をあてて水もれの防止としている。

SE504 上・下二段にわたる構築で、上段のものはSE508と同じ構造であるが四隅は丸柱状のものを，横桟も丸木を使用し，縦板は３cmの厚いものである。下段は曲物を３段に組み合わせて１つの井筒とし，１段目のものは中位よりやや上に幅５cmの曲物をまいて二重にしている。３段目のものは１個体の曲物ではなく，別個体のものを５枚組合わせて一つの曲物としている。底面側部には一部石が詰込まれている。

SE503 上段桶側，下段曲物を組み合わせたもので，桶側は一部重複する所があり更に1段上に桶側様のものが据えられた可能性もある。外側は曲物片で囲っている。下段は曲物を２段に据



6図　井戸実測図 (1)


標高34.30m
SE503
標高34.20m
SE501
標高34.60m
SE510
標高34.90m
SE506
0
1m

7図　井戸実測図 (2)

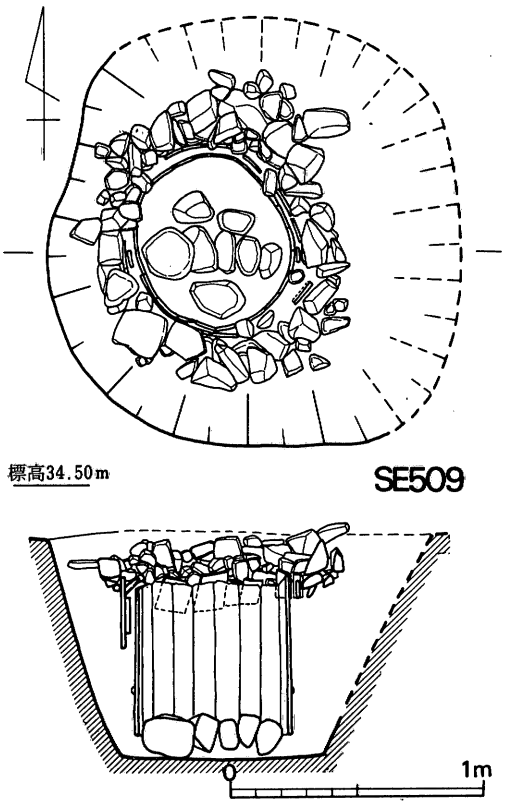
え，1段目のものは二重で，幅6～8cmの縦長薄板が重なった部分に3ケ所挿入してある。内外面の曲物を固定するためのものであろう。2段目は3枚で一組の曲物としている。

SE501　上段桶側，下段曲物で，1段目と2段目の曲物の隙間にはこぶし大の石を詰めて固定している。

SE510　SE503，SE501と同様に上段に桶側，下段に曲物を置くもので，曲物は3枚で一組の曲物としている。

SE506　桶側を2段に据えたもので，内側のものは下部の方の内法が狭くなっている。

SE509　桶側を2段に据えたもので，上段の桶側は下端の一部を残すのみで，そのうちの一枚には長方形の穿孔がみられる。外側は10cmほどのグリ石を25cmほどの高さに積み上げて周囲を囲っている。底面には20cm大の大石が並べられた状態で発見されているが，廃棄に際しての捨て石とは考えられない。



8図　井戸実測図 (3)

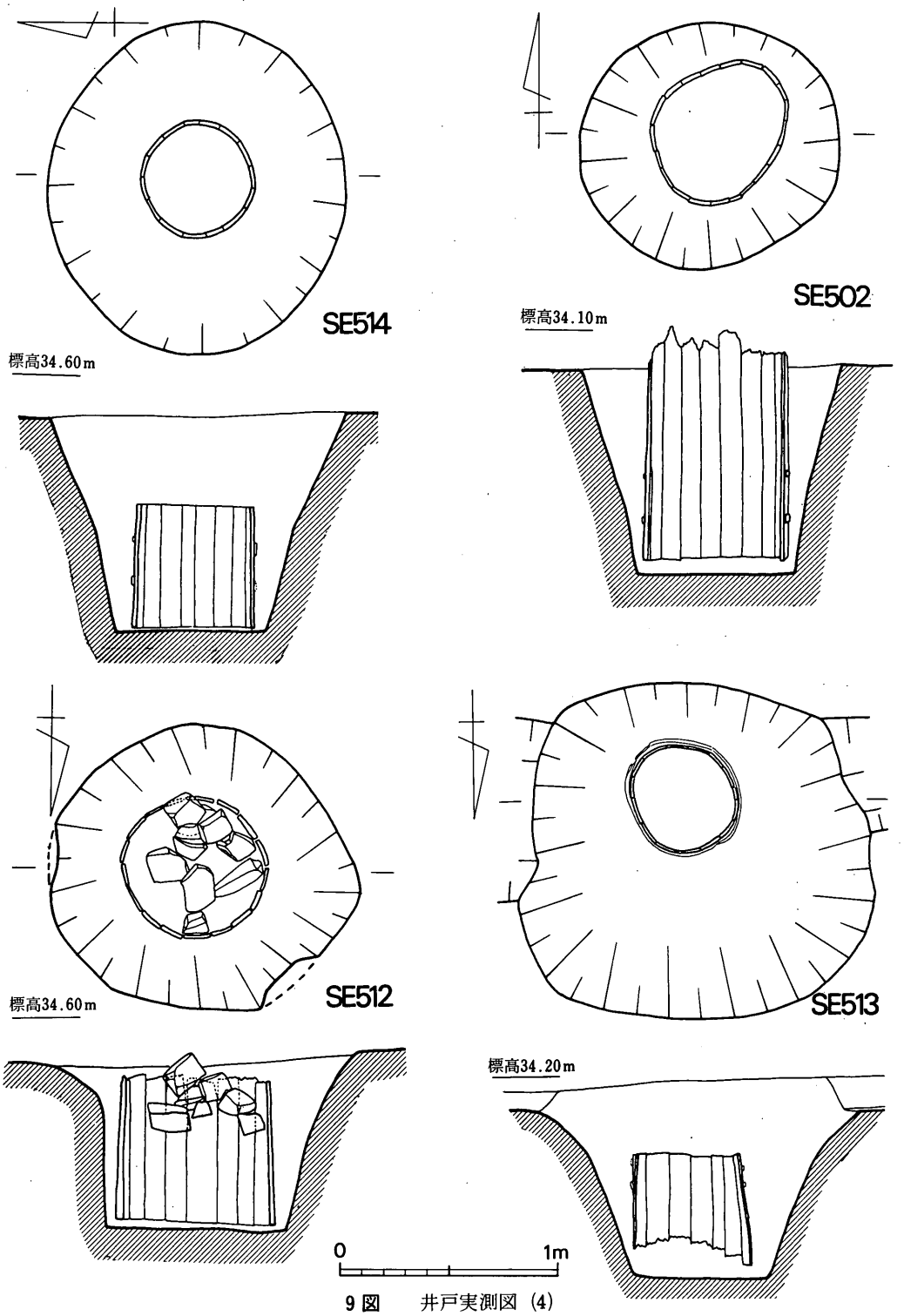
SE514　桶側1段のもので，掘り方の深度などからみて更にもう1段ほど桶側様のものを構築したものと考えられる。

SE502　高さ1mを越える桶側を設置したもので，今次の調査のなかでは最も大きい井戸である。SE501井戸を切って構築され，下半部2ケ所に竹タガによる緊縛がみられる。桶板20枚のうち3枚については下端部近くに5×6cmほどの長方形の孔が両面より穿孔されている。

SE512　桶側1段のもので，廃棄に際して上部に石を投棄している。桶板は3～4cmの厚手の部材で，チョウナ痕が明瞭に残る。

SE513　桶側1段で，上端部に2ケ所緊縛がみられる。下半部の桶板は厚さが半分ほど腐蝕して薄くなり，下端は欠損している。

その他SE505(図版11の2)，SE507，SE511，SE515，SE516，SE517のように，堀り方内で井戸側は検出されていないが，いずれも竹タガや桶板片が底面近くから出土しており，なかにはSE511，SE515井戸のようにタガが円形のまま残存していて，明らかに桶板が抜かれ


SE514
標高34.60m
SE502
標高34.10m
SE512
標高34.60m
SE513
標高34.20m
0
1m

9図　井戸実測図（4）

たものと思われるものもある。

以上個々の井戸について簡単にみてきたが，井戸側の組み合わせにより４種に大別される。Aは方形の井戸側だけのものでＳＥ508 がこれにあたる。Bは方形井戸側と下段に曲物を据えた組み合わせのもので，ＳＥ504 にあたる。CはＳＥ503, ＳＥ501, ＳＥ510 にみられるように上段に桶側，下段に曲物を据えたもので，下段の曲物は１段だけのものから３段におよぶものまである。DはＳＥ509, ＳＥ514, ＳＥ502 などのように桶側だけを使用したもので，現存するものでは１段だけのものが多いが，２段のものもある。

以上井戸側の組み合わせによりA～Dまでの４種に大別したが，井戸内や掘り方から出土する遺物の出土状態や土器の編年が詳しく分類されるならば，井戸の変遷も明らかにされるであろう。大宰府史跡の発掘によれば，方形プランから円形プランへの移行が考えられている。

六、遺　物

１．須恵器・土師器（10図）

杯蓋（２～９・16・17） いずれも天井は，たいらにヘラ削りしてあり，宝珠つまみのつくものとつかないものがある。２は径13.5cmで宝珠つまみがつく，**４～６**は径11cm前後のもので天井はたいらであり宝珠つまみはつかない。**16**は土師器である。

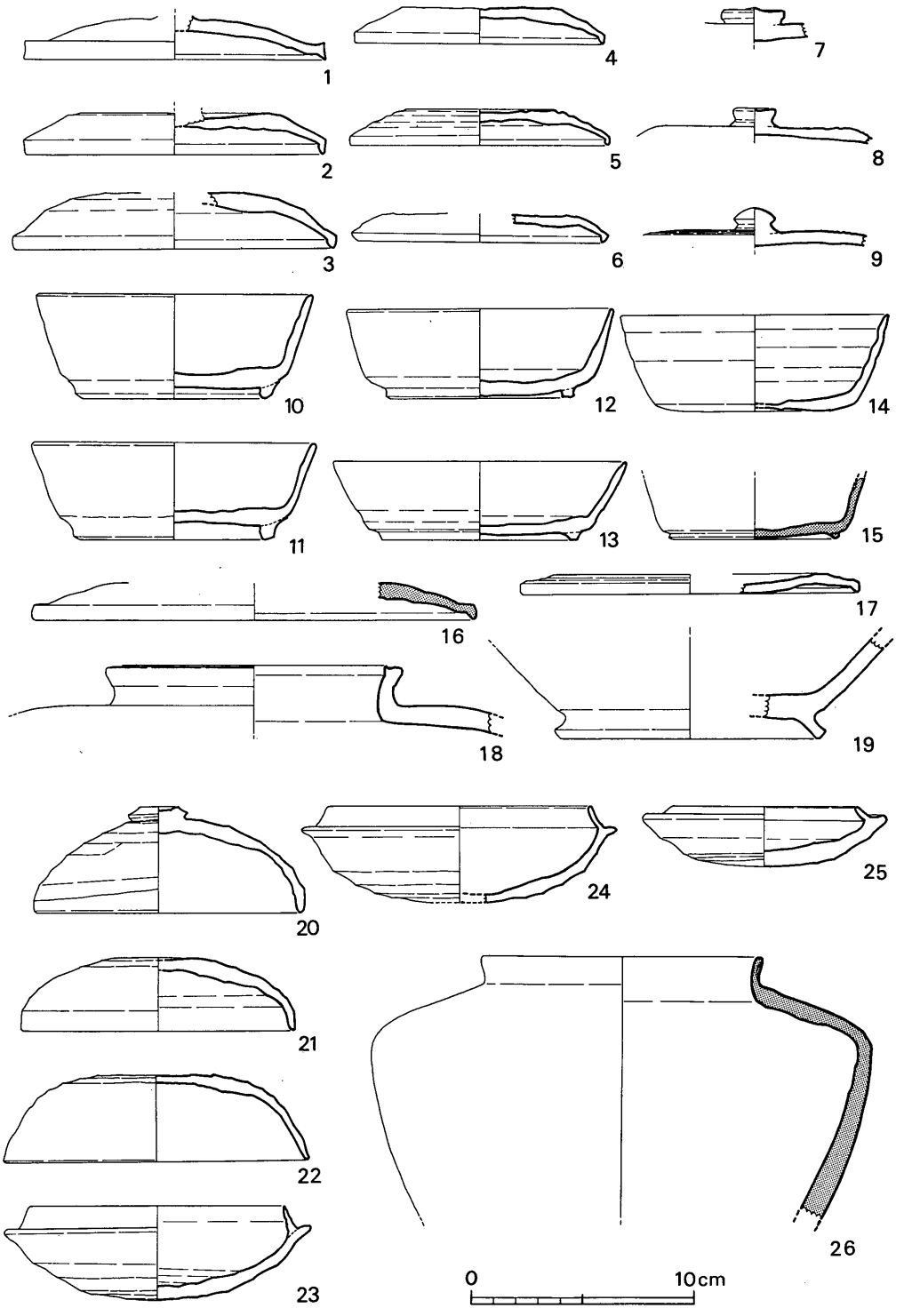
杯身（10～15） いずれも器壁は直線的に外側に開き底部はヘラ切りである。**14**を除き高台がつくものである。**15**は土師器で黄褐色を呈し，焼成はもろい。

杯蓋（20～27） **20・21**は全体的に丸みを帯び，口縁部はわずかであるが垂直に立ちあがり肩に稜を有す，**20**にはつまみがつく。**22**は天井部はたいらであり台形を呈す。いずれも径13cm前後を測り，天井部はヘラ削りを行なっていて暗灰色を呈す。

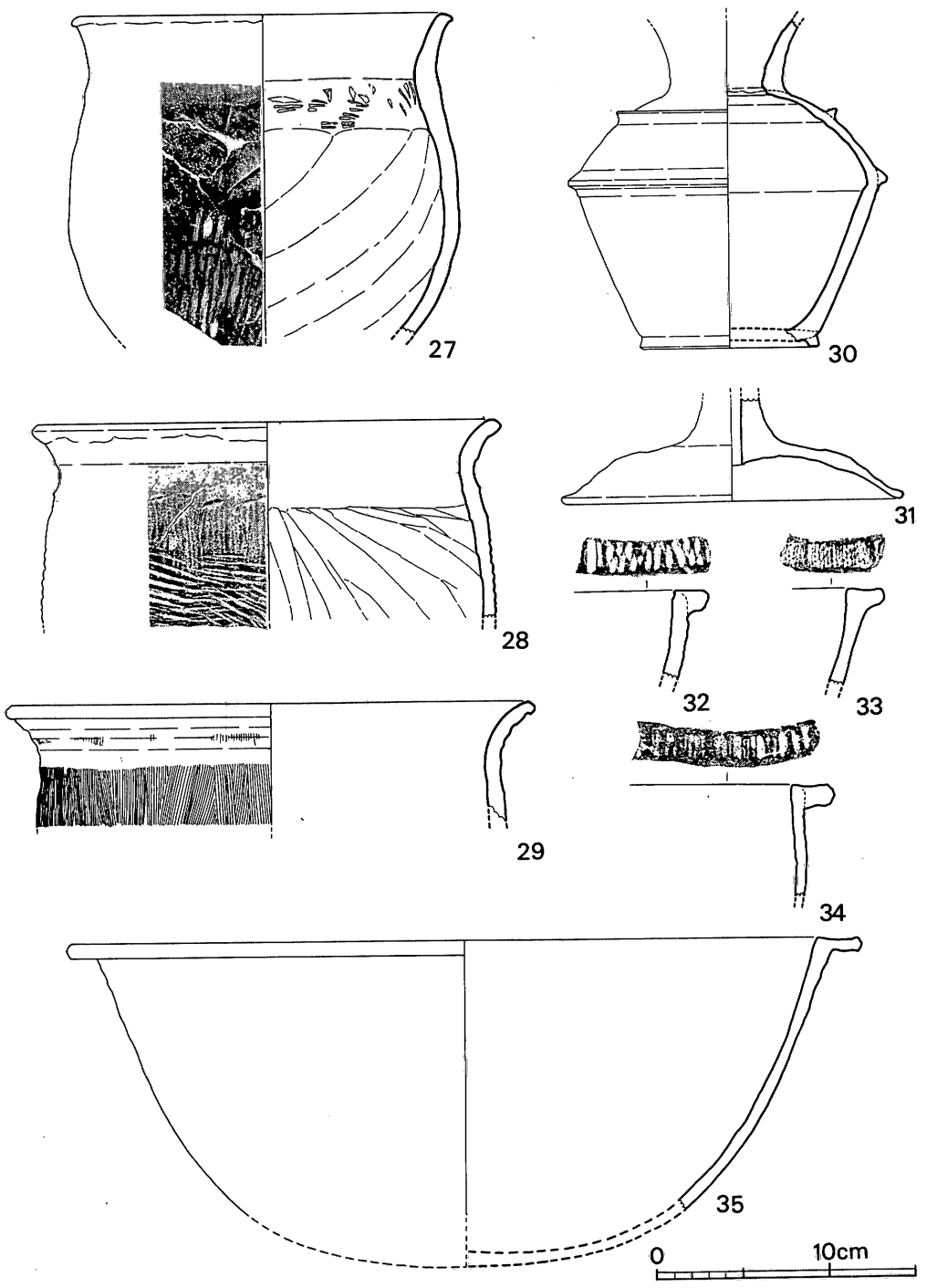
杯身（23～25） **23**は径13.5cmを測り，蓋受けは急な立ちあがりとなるが短いものである。**24・25**は蓋受けは短く内傾する。**24**は径14cm，**25**は11cmを測る。いずれも口径に対し浅いもので底はヘラ削りである。

18は甕の口縁で短くやや外反するもので，肩部外面はタタキ目・内面は同心円タタキ目にて整形する。**19**は高台のつくもので，内部はタテナデ，底部ヨコナデ，外面はヘラ削りのあとナデ調整を行なっている。長頸壺の底であろうか。**26**は土師器壺で，口縁は短くほぼ垂直につき，肩部で径22.5cmを測り最大となる。褐色で肌があれているため研磨されているかどうかは不明である。胎土は精選されている。

３・６・10・11・15・16・18・20は７層からの一括出土である。なお**20～25**は６世紀後半代である。**18・19**はやや古い形態を，**４～６**はやや新しい形態を示すが，いずれも奈良時代に比定できよう。なお**１**は上面に灰釉が厚くかかり，平安時代の灰釉陶器と思われる。（土居隆臣）



10図　須恵器・土師器実測図（15、16、26—土師器）



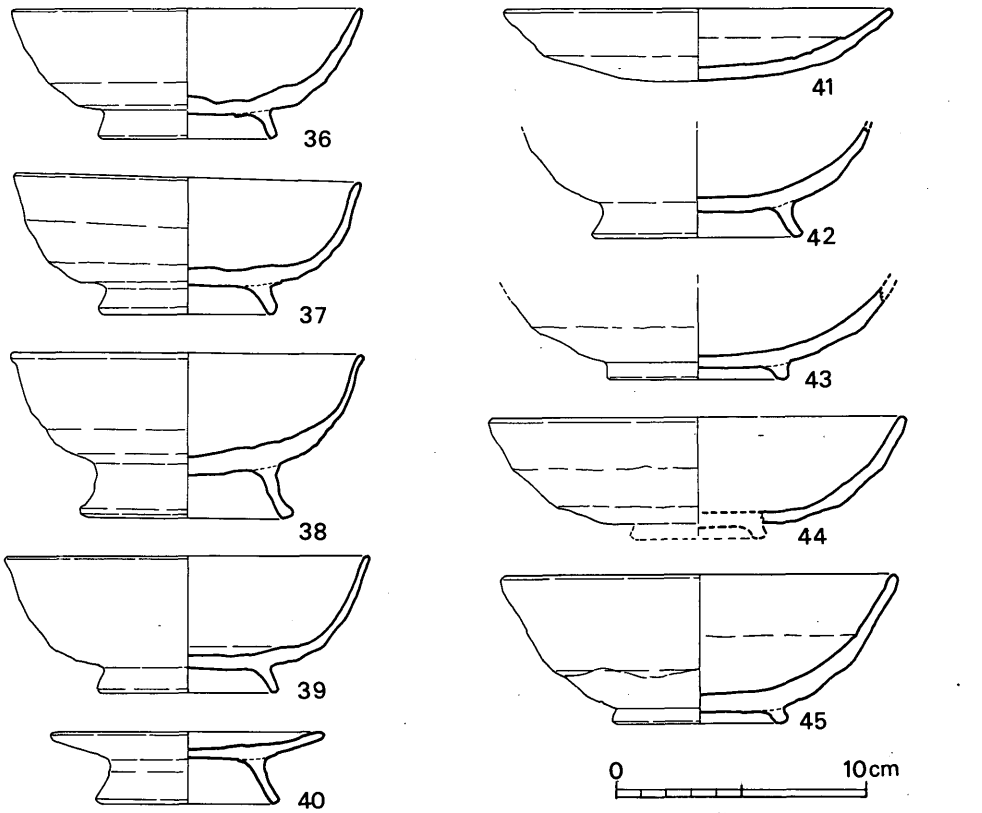
11図　　ＳＫ546土坑出土土器、土鍋実測図（27～30はＳＫ546出土、32～35は上層出土）

2．ＳＫ546 土坑出土土器（11図27～30）

下層の落ち込みから，斜格子目瓦の大形破片数個とともに土師器甕の大形破片が４～５個体分出土し，口縁と底部の一部を欠くが，ほぼ完形品の須恵壺も共伴した。そのほかには杯・皿などの小形品は出土していない。**27～29**は土師甕で，口縁部内外面には横ナデがある。**27**の胴部には縦方向の太いタタキ目がみられ，内面はヘラ削りが施してある。**28**は胴部に荒い刷毛目の下に横方向のタタキ目があり，内側はヘラ削りが行なわれてる。**29**は胴部に細い刷毛目がつけられている。**30**は高台付の須恵壺で，口縁部を欠くが，頸部がしまり，肩部がなだらかに張り，胴部は直線的で，低い高台付の底部につづいている。肩部および胴との境目にそれぞれ１本の突帯がついている。これら一括遺物は瓦も含めて平安時代のものであろう。

3．下層土師器・Ⅰ類（12図36～42）

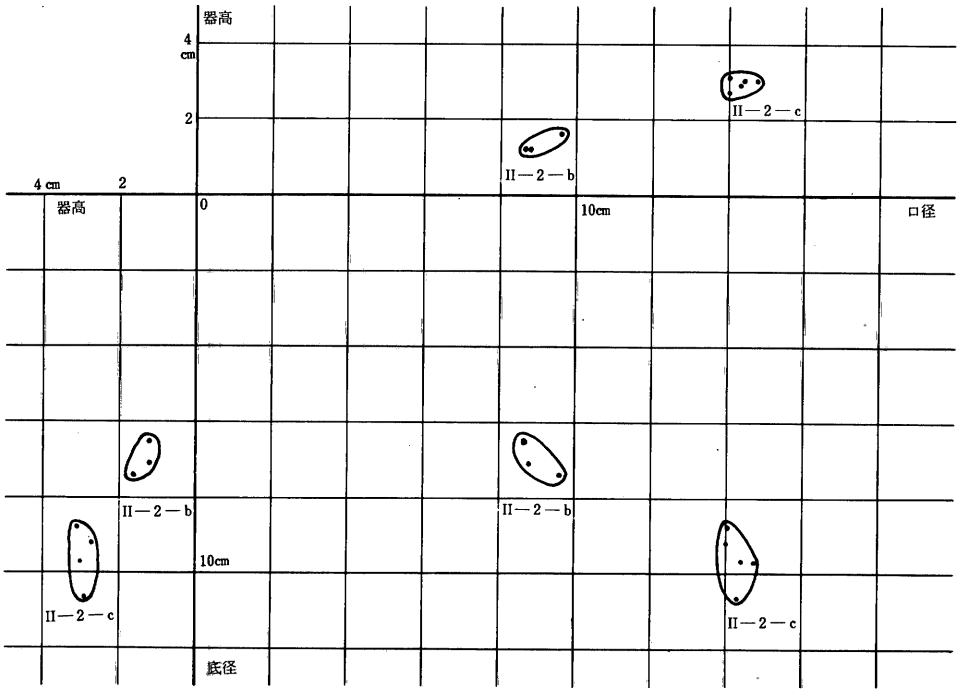
下層である６層から出土したヘラ切り離し底（以下ヘラ切り底）の土師器を総称しているが，第５次調査では，６層の包含層はあまりなく，そのほとんどが溝であり，出土遺物も少ない。



12図　下層土師器・瓦器実測図

（36～40　ＬＤ13区　６層落込み）
（41—ＳＤ501溝　42—ＳＤ504溝　43～45—ＳＤ505）

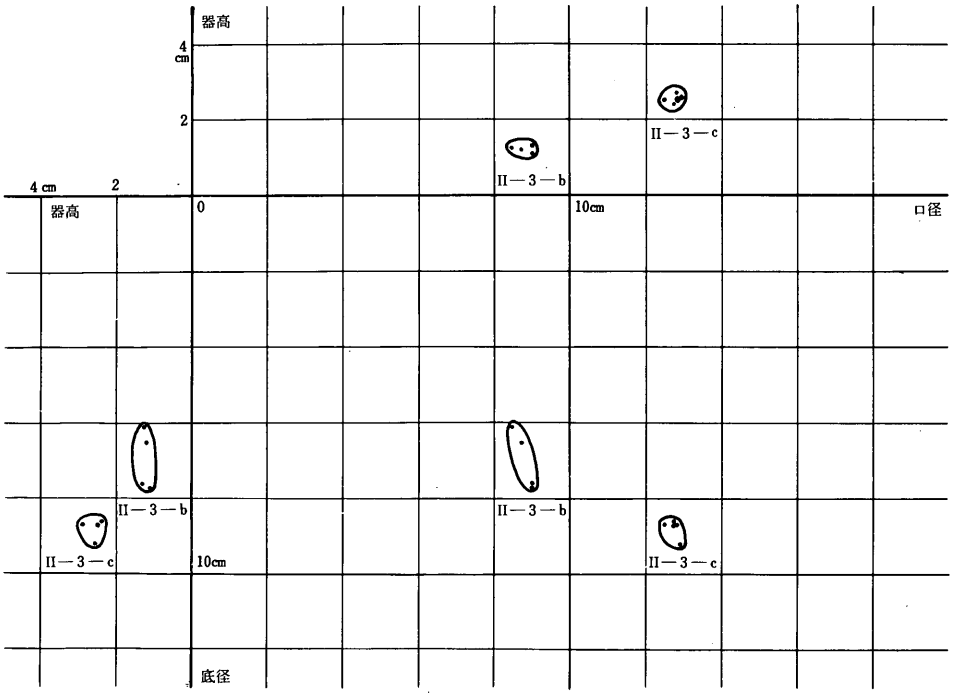
2表　SK520土坑出土土師器の法量



36～**40**はＬＤ13区６層落ち込みから一括して出土したものである。**36**～**39**は高台付椀で，器面（体部内外両面）には横ナデが，内底（底部内面）にはナデがみられる。底面（底部下面）にはヘラ切り痕と板目（簾状圧痕）がつき，高台のたたみつきの部分にも板目が残っているものもある。**38**の高台はとくに高い。口径は13.9～14.6cmで，黄白色ないし淡褐色を呈し，胎土にはあまり砂粒を含まない。**40**は高台付小皿で，器面には横ナデが施されている。口径11.0cmで黄褐色を呈し，胎土に含まれる砂粒は少ない。**41**は上層のＳＤ501 溝出土の土師器であるが，あきらかにヘラ切り底で丸味を帯びている。**42**は下層のＳＤ504 溝出土の高台付椀で，36～39と作りは同じである。

瓦器椀（43～45）　下層のＳＤ505 溝から出土したもので，共伴の土師器は少片のみである。**43**は口縁部を欠くが，内外面とも研磨され，その後高台が付けられている。焼成は良く黒色を呈し，部分的に光沢をもっている。**44**は口径16.7cmで，内面は明灰色で，ていねいな研磨が施されている。外面の上半部は横方向の研磨が施され，黒色を呈し光沢をもち，下半部は明灰色で，底面に板目がついている。**45**は口径15.8cmで，内面はていねいな研磨が施され，外面はやや荒い研磨が全面に施されている。体部下半に継ぎ目と思われる段が認められ，高台は器面の研磨後つけられている。

3表　ＳＥ514井戸出土土師器の法量



11図**31**は下層柱穴内から出土したもので，高杯などの脚と考えられ，中央に孔が貫通している。以上の土師器，瓦器椀は平安時代のものであろう。

4．上層土師器・Ⅱ類（13～17図・2～13表）

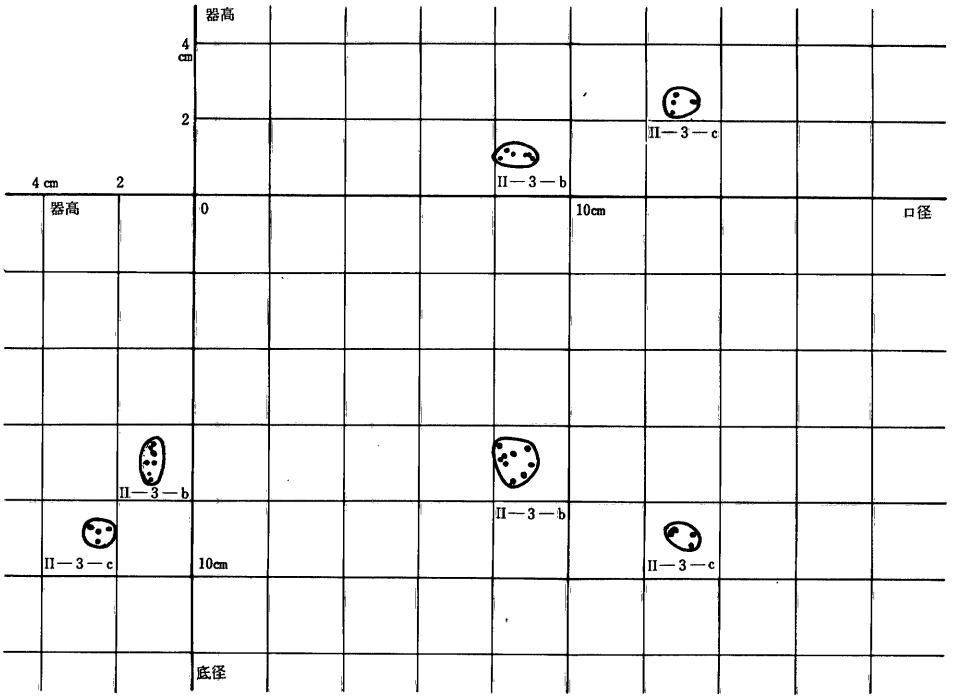
上層である3～5層から出土した糸切り底の土師器を総称しているが，小皿，杯類がほとんどである。この中でも土師器類はいくつかのタイプに分かれるが，包含層では部分的にかたまって出土する所もあるが，確実に分離することは難しかった。それで，井戸内や土坑，溝から一括して共伴出土した土師器を一つの単位として，代表例をあげて考えてみたい。さらにそれぞれの相違点を知るうえで，個々の土師器の法量が重要であるので，その計測値をも示した。なお他の地点からは，第5次調査区出土のものよりも古いと考えられる糸切り底をもつ土師器群があるので〔**2**〕からはじめることにする。

〔**2**〕　（13図・2表）

ＳＫ520 土坑から一括して出土した土師器群で，他に青磁，瓦器椀が出土している。土師器は底面に糸切り痕と板目がついている。器形は杯と小皿がある。

b．小皿（Ⅱ－**2**－**b**）（46～49）　口径8.65～ 9.6cm，底径6.5～7.4cm，器高1.2～1.6cmで，

4表　SE505井戸出土土師器の法量



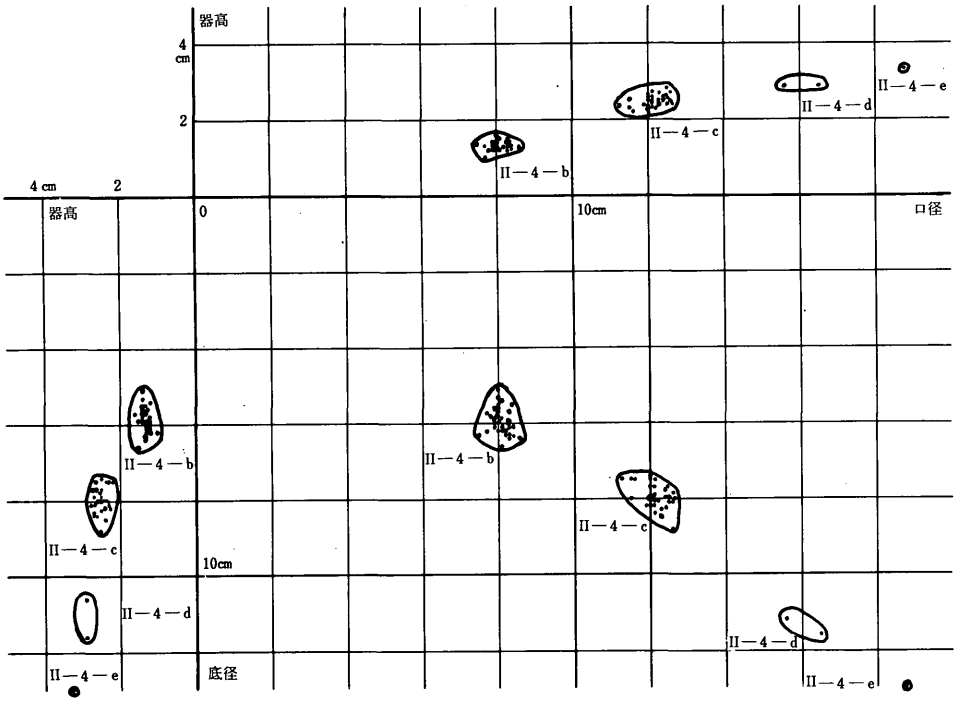
灰褐色ないし淡褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。**46**の外側には沈線状のものが二条めぐっている。**49**は底の厚い小皿である。

c．杯（Ⅱ－**2**－c）（51～58）　口径14.0～14.75cm,底径8.8～10.65cm,器高2.7～3.1cmで，黄褐色ないし淡褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面に横ナデ，内底にナデがみられ，底面には糸切り痕と板目がみられる。なお**58**の口径は復元ではあるが15.3cm，底径11.2cm，高さ 3.0 cmである。

5表　SK520 土坑出土土師器計測表

小　皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	9.6	7.4	1.6	1	14.3	10.65	2.9	4	14.4	9.7	3.0
2	8.8	7.1	1.2	2	14.75	9.7	3.0	5	14.0	8.8	3.1
3	8.65	6.5	1.2	3	14.0	9.2	2.7				

6表　SK501土坑出土土師器の法量



青磁（50）　同様のものが2個出土していて，内外両面に暗緑色の釉がかかり，見込みの部分に草花文がある。

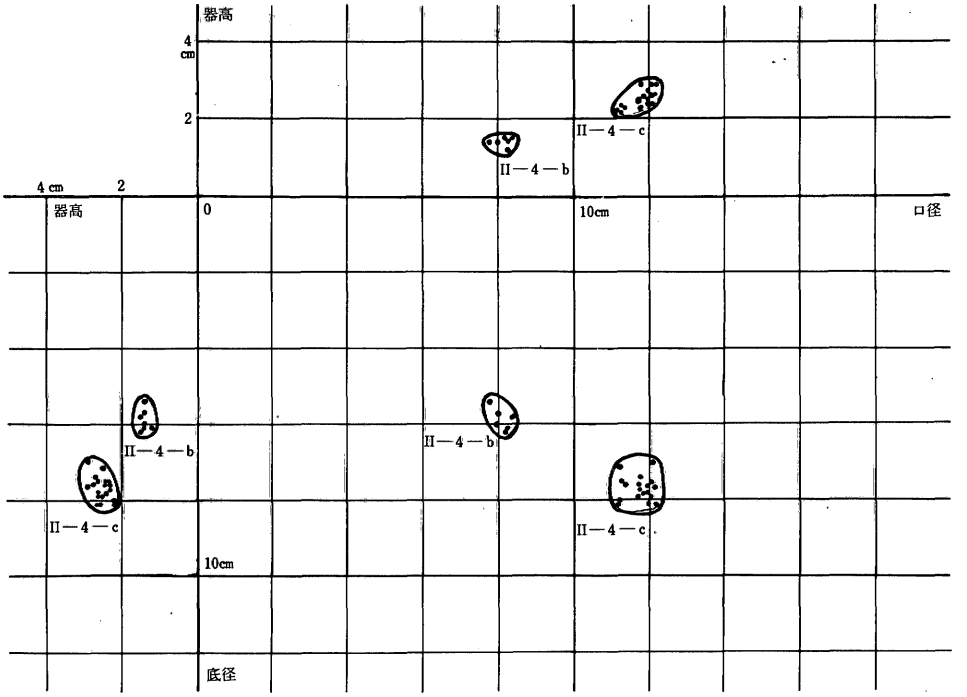
瓦器椀（59）　口径19.0cmで，器形はやや丸味を帯び，高台がついている。内面全体にジグザグの大きな荒い研磨がみられ，外面上半にも荒い横方向の研磨がみられる。内面の口縁に近い部分と外面の口縁よりやや下の部分は灰白色で，他の部分は灰黒色で，焼成はあまりよくない。外面の体部下半に胎土の継ぎ目がみとめられるが，顕著ではない。胎土に細砂を含む。

なおこのⅡ－2類はSK503 土坑でも出土している。

7表　SE514 井戸出土土師器計測表

小　皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	9.0	7.6	1.3	1	12.75	8.6	2.4	5	12.5	8.7	2.5
2	9.0	7.7	1.1	2	12.85	8.7	2.5	6	14.5	9.2	3.65
3	8.45	6.1	1.25	3	12.9	9.2	2.55				
4	8.7	6.5	1.2	4	12.8	8.7	2.7				

8表　SK513土坑出土土師器の法量



〔3〕　(14・15図，3・4表)

SE514 井戸内およびSE505 井戸内から一括して出土した土師器群である。器形は小皿，杯のほか高台付小皿がある。

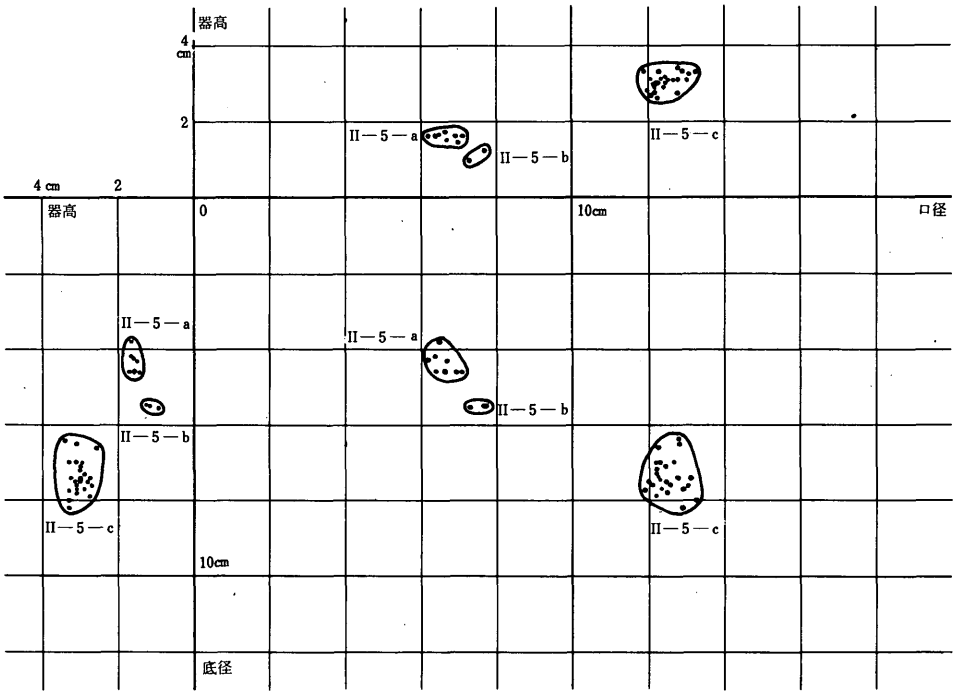
SE514 井戸（14図，3表）

b．小皿（Ⅱ－3－b）（60～63）　口径8.45～9.0cm，底径6.1～7.7cm，器高1.1～1.3cmで，黄褐色ないし茶褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。

9表　SE505 井戸出土土師器計測表

小皿				小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	8.5	7.45	1.1	6	8.9	6.6	1.1	1	12.75	8.75	2.2
2	9.0	7.0	1.0	7	8.15	6.5	1.0	2	12.75	8.8	2.5
3	8.3	7.0	1.2					3	13.3	8.85	2.5
4	8.5	6.75	1.0					4	13.25	9.1	2.5
5	8.8	7.3	1.1					5	12.8	8.7	2.7

10表　ＳＥ516井戸出土土師器の法量



底面には糸切り痕と板目がついている。

c．杯（Ⅱ－3－c）（66～70）　口径12.5～12.9cm，底径6.1～7.7cm，器高1.1～1.3cmで，灰黄色ないし灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には糸切り痕と板目がついている。65は口径14.5cm，底径9.2cm，高さ3.65cmで，前述のⅡ－2類に相当するものである。

f．高台付小皿（Ⅱ－3－f）（64）　口径10.4cmで，小皿よりやや大きい。高台は底の中央部にていねいにつくられ，外側に向ってやや丸味を帯びている。他は小皿と作りは同じである。

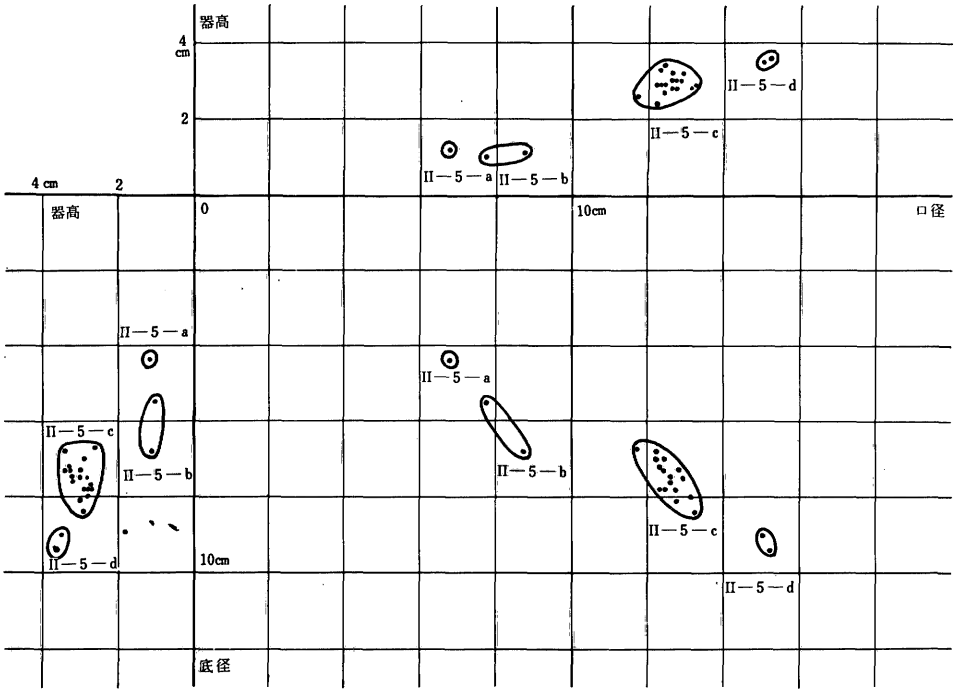
ＳＥ505井戸（15図，4表）

b．小皿（Ⅱ－3－b）（71～78）　口径8.15～9.0cm，底径6.5～7.45cm，器高1.0～1.2cmで，灰黄色ないし褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目が残っている。

c．杯（Ⅱ－3－c）（84～89）　口径12.75 ～13.3cm，底径8.7～9.1cm，器高2.2～2.7cmで、黄灰色ないし淡灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

f．高台付小皿（Ⅱ－3－f）（79～83）　口径8.5～9.8cmで，小皿とほぼ同じである。糸切り痕と板目をもつ小皿に高台をつけたものであるが，その高台は粘土紐を輪にして，小皿の底

11表　ＳＤ502溝出土土師器の法量



面にはりつけたような簡単なもので，底面の中央にはなくて，やや片方へずれているものが多い。高台自体はやや外反している。

このようにＳＥ514 井戸とＳＥ505 井戸から出土する小皿，杯はほぼ同じであるにもかかわらず，高台付小皿にかなりの違いをみせている。この高台付小皿に二つのタイプがあることは，第５次の調査分だけでなく，他の地区にもみられるので，今後の整理で注目したい。

このⅡ－３類土師器はＳＥ501 井戸，ＳＥ504 井戸，ＳＥ509 井戸，ＳＫ538 土坑からも出土している。

〔4〕　(16図，６表)

ＳＫ501 土坑から一括出土した多量の土師器群で，器形には小皿，杯，大杯，特大杯の四種がある。

b．小皿（Ⅱ－4－b）（90～102）　口径7.5～8.4cm，底径5.1～6.6cm，器高1.0～1.6cmで，灰褐色～灰黄色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

c．杯（Ⅱ－4－c）（103～116）　口径11.25～12.65cm，底径7.4～8.8cm，器高2.2～2.8cmで，灰黄色ないし灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

12表　S K501 土坑出土土師器計測表

小皿				小皿				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	8.25	5.9	1.4	28	7.9	5.9	1.3	13	12.0	7.5	2.65
2	8.1	6.1	1.25	29	8.0	5.6	1.25	14	12.0	8.0	2.6
3	8.0	6.2	1.25	30	8.3	6.0	1.3	15	12.0	8.0	2.6
4	8.1	5.85	1.2	31	8.0	5.8	1.4	16	12.0	8.0	2.5
5	8.2	6.3	1.3	32	7.5	6.3	1.35	17	12.1	8.2	2.4
6	8.4	6.35	1.3	33	8.0	5.3	1.4	18	12.0	8.0	2.5
7	8.0	5.5	1.3	34	8.35	5.5	1.4	19	12.4	7.8	2.55
8	8.1	6.2	1.2	35	8.4	6.1	1.07	20	12.1	8.1	2.75
9	8.1	5.4	1.2	36	8.3	6.4	1.3	21	12.6	7.9	2.7
10	8.3	5.9	1.5	37	8.4	6.5	1.2	22	12.2	8.1	2.3
11	7.9	6.0	1.25	38	7.9	6.1	1.25	23	12.4	7.8	3
12	8.0	5.8	1.4	39	8.1	6.6	1.5	24	11.9	8.2	2.4
13	8.1	6.1	1.2	40	7.9	5.6	1.4	25	12.0	7.4	2.5
14	8.2	6.2	1.3	杯				26	12.1	7.5	2.3
15	7.7	5.7	1.3		口径	底径	器高	27	12.45	7.7	2.65
16	7.9	5.9	1.2	1	12.0	7.5	2.2	28	12.5	8.1	2.8
17	8.6	6.4	1.3	2	11.5	7.5	2.3	29	12.3	8.5	2.5
18	8.3	6.1	1.2	3	11.6	7.5	2.2	30	12.3	8.3	2.7
19	8.0	6.0	1.3	4	11.5	8.0	2.5	31	12.1	8.4	2.6
20	8.3	6.4	1.3	5	12.0	8.0	2.35	32	12.6	8.1	2.7
21	8.4	6.1	1.25	6	11.25	7.5	2.35	大杯			
22	7.8	5.8	1.2	7	12.5	8.0	2.4		口径	底径	器高
23	8.0	5.1	1.4	8	12.25	8.5	2.4	1	16.5	11.6	2.9
24	7.7	6.2	1.0	9	12.0	8.2	2.25	2	15.6	11.2	2.9
25	8.3	5.7	1.4	10	12.4	8.0	2.5	特大杯			
26	8.0	5.7	1.3	11	12.1	7.7	2.75		口径	底径	器高
27	8.0	5.7	1.6	12	12.4	8.0	2.5	1	18.75	13.0	3.3

13表　ＳＥ516 井戸出土土師器計測表

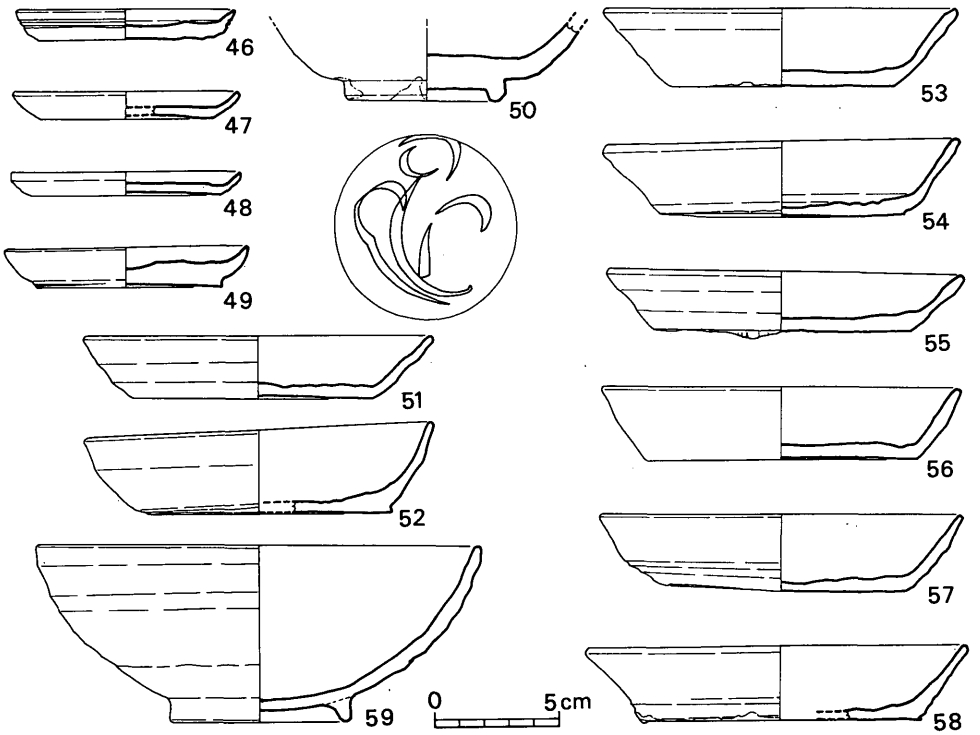
特　小　皿				杯				杯			
	口径	底径	器高		口径	底径	器高		口径	底径	器高
1	6.65	4.6	1.7	1	12.25	7.4	3.0	15	12.25	6.6	2.6
2	6.4	4.2	1.65	2	12.15	7.0	2.95	16	12.4	7.7	2.9
3	6.2	4.25	1.6	3	12.9	8.2	3.3	17	12.8	6.4	3.4
4	(6.4)	4.6	1.6	4	12.45	7.1	3.0	18	12.1	7.6	2.7
5	6.95	4.6	1.6	5	12.45	7.5	3.15	19	12.2	7.9	2.75
6	6.7	4.3	1.5	6	12.35	7.7	3.1	20	12.0	7.5	2.8
7	6.5	3.8	1.65	7	11.9	7.75	3.3	21	12.2	7.3	2.9
8	7.0	4.6	1.45	8	12.1	7.6	3.1	22	12.8	7.4	2.75
9	7.1	4.6	1.6	9	12.2	7.2	3.0	23	12.5	7.8	3.1
小　皿				10	12.7	7.0	3.1	24	13.1	7.4	3.25
	口径	底径	器高	11	12.8	6.5	3.1	25	13.25	8.0	3.3
1	7.75	5.5	1.25	12	12.5	7.5	3.0	26	13.55	7.6	3.1
2	(7.3)	5.55	0.95	13	13.05	7.6	3.1	27	12.03	7.0	3.3
3	7.7	5.5	1.2	14	12.3	7.45	3.0				

d．大杯（Ⅱ－**4**－**d**）（117，118）　口径15.6～16.5cm，底径11.2～11.6cm，器高2.9cmのもので，灰黄色ないし灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。量は多くない。

e．特大杯（Ⅱ－**4**－**e**）（119）口径18.75cm，底径13.0cm，器高3.3cmで，作りは大杯と同様で，数はこれ１個のみである。

以上のように器形は４種あるが，口径のそれぞれの間隔は３～４cmとほぼ同じである。またこのＳＫ501 土坑は，一回の祭祀に使用された土師器を，穴を掘って一括して埋めたものと考えられるが，小皿の数約 169個，杯の数195個，大杯約10個前後，特大杯１個であり，ハシの数は約 181本（91組）であることから，大杯，特大杯を除くと，小皿２枚，杯２個，ハシ２本（１組）というセットが約 100セットぐらいあったことになり，その祭祀に参加した人びとの数も推定される。

このⅡ－４類と同一の土師器を出土する遺構としてはＳＫ513 土坑（８表），ＳＥ503 井戸があり，ＬＣ５区４層の浅いくぼみからも多量に出土している。また上層包含層の主体を占め，ＳＤ501 溝ではⅡ－３類とともに出土している。



13図　土師器実測図（ＳＫ520土坑出土）　（50—青磁、59—瓦器椀）

〔5〕　(17図, 10表)

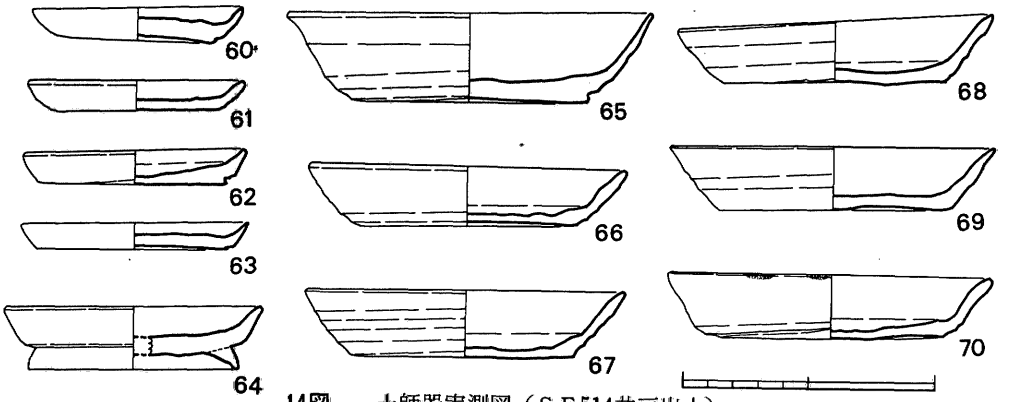
ＳＥ516 井戸内から出土した土師器群で，器形には次の３種がある。

a．特小皿（Ⅱ－5－a)(120～124)　一般の小皿にくらべて口径6.2～7.1cm，底径3.8～4.6cmと小さいが，器高は1.45～1.7cmと高く「酒杯」に近い形である。淡灰褐色を呈し，胎土には少し砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがあり，底面には糸切り痕と板目がついている。このⅡ－５類に特長的な器形である。量は小皿より多い。

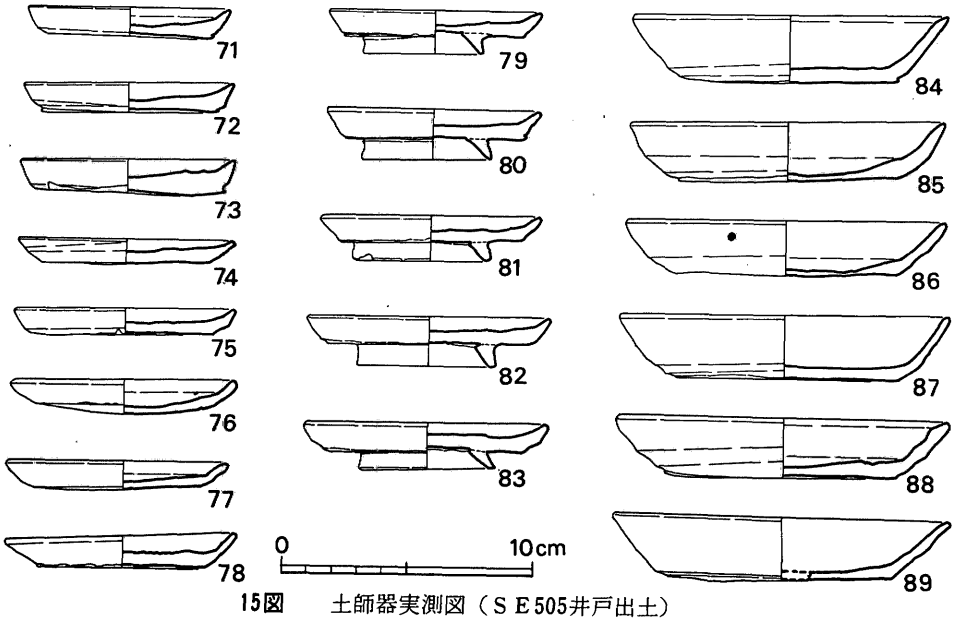
b．小皿（Ⅱ－5－b）（ 125～ 127) 口径7.3～7.75cm，底径5.5cm，器高0.95～1.25cmの皿形の土師器で，灰褐色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。器面には横ナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。量は少ない。

c．杯（Ⅱ－5－c）（ 128～ 141）口径11.9cm～13.25cm，底径6.4～8.2cm，器高2.6～3.4 3.4cmで，Ⅱ－４類にくらべて口径，器高が大きいが，底径が小さくなっている。灰褐色ないし淡褐色を呈し，胎土に砂粒を含んでいる。やや薄手になっている。体部外面下半には 132～134のようにヘラ削り状の整形痕が残っているものもある。器面には，横ナデがみられ，内面にナデがある。底面には糸切り痕と板目がついている。

d．大杯（Ⅱ－5－d）（ 142）　当ＳＥ516 井戸内からは出土していないが，同類土師器を



14図　土師器実測図（ＳＥ514井戸出土）



15図　土師器実測図（ＳＥ505井戸出土）

出土するＳＤ502 溝（11表）にみられた。口径15.0cm，底径8.5cm，器高3.3cmで，淡褐色を呈し，胎土に砂粒を含む。器面にはヨコナデが，内底にはナデがみられる。底面には糸切り痕と板目がついている。

小結

以上のように第５次調査地区（６ＡＹＥＢＬ）出土の糸切り底土師器を次の４類に分類した。

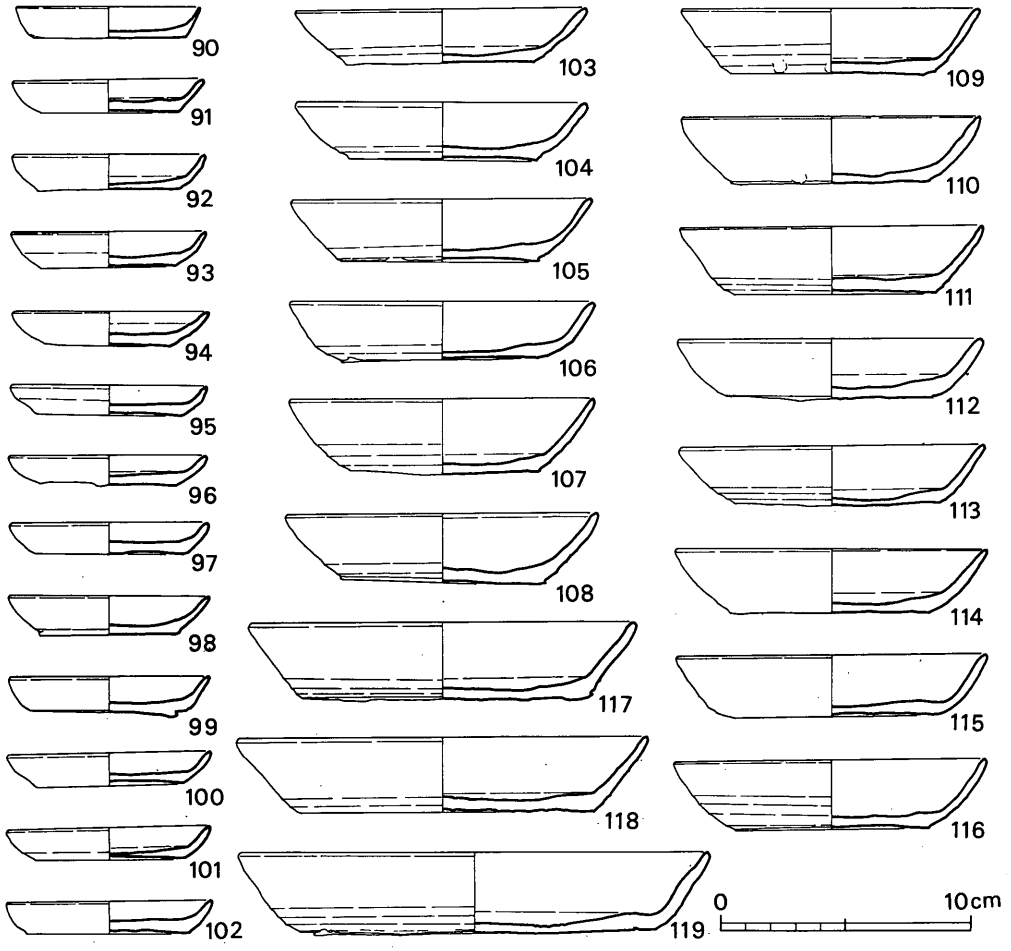
Ⅱ－２類

Ⅱ－３類

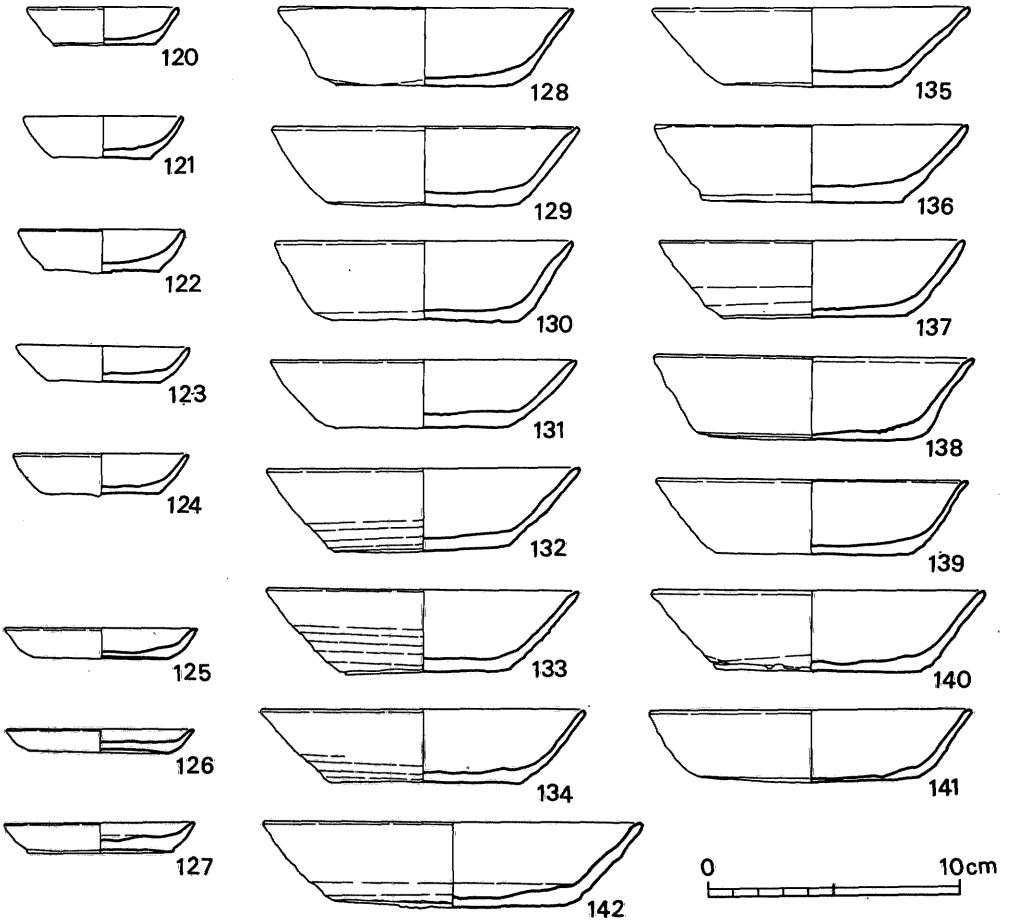
Ⅱ－４類

Ⅱ－５類

これらは土層や器形，口径などの法量，および整形手法などからして，このまま古い順であると思われる。すなわち，古いものほど器形は大きく，また厚手のものが多い。新しくなるにしたがって小形化し，薄手のものになっていく。このことは杯の口径に最もよくあらわれる。



16図　土師器実測図（ＳＫ501土坑出土）



17図　土師器実測図（ＳＥ516井戸出土）

Ⅱ－２類は14.0～14.75cm，Ⅱ－３類は12.5～13.3cm，Ⅱ－４類は11.25～12.65cmと小さくなり，Ⅱ－５類では再び11.9～13.25cmと大きくなるが，底径ではⅡ－４類は7.4～8.8cmに対し，Ⅱ－５類では6.4～8.2cmと小さくなっている。　器高はⅡ－２類からⅡ－４類までは低くなるが，Ⅱ－５類では再び高くなっている。また杯の体部に残るロクロ痕あるいはヘラケズリ痕は，Ⅱ－４類には底部近くに少量みられるが，Ⅱ－５類ではかなり量もまし，体部の下半分にまでついているものもある。室町時代の土師器杯と思われるものには，全面に残っているものが多い。各類にはそれぞれ特長づける土師器も共伴している。すなわちⅡ－３類には高台付小皿がともない，Ⅱ－５類には特小皿が出現している。なお，各類の時期について言及するのは時期尚早かもしれないが，一つの目安として考えると，最近太宰府町五条の西鉄五条駅の東側の調査[(1)]で，東大溝の最下層の４層から「貞応三年十一月日」（1224年）銘の木札が発掘された。そ

の層からは，ここでいうⅡ－２類とⅡ－３類の土師器がほぼ等量出土していることから，Ⅱ－２類からⅡ－３類への移行期ないしⅡ－３類の初頭がちょうど木札の時期ということができよう。またⅡ－５類と室町時代の土師器とはまだ直接には結びつかず，少なくともあと２形式はあるものと推測されることから，各類の時期を次のように考えてみた。

Ⅱ－２類	鎌倉時代前期前半	浦城Ⅱ－１類 貞応三年銘木札（1224年）
Ⅱ－３類	鎌倉時代前期後半	
Ⅱ－４類	鎌倉時代中期前半	浦城Ⅱ－２類
Ⅱ－５類	鎌倉時代中期後半	

これはあくまでも一つの目安としたものであって，確実な資料に裏付けされたものではない。将来確実な資料で修正されるべきである。

なおすでに報告されている太宰府町浦ノ城跡[(2)]出土の糸切り底土師器のうち，浦城Ⅱ－１類は当遺跡のⅡ－２類に，浦城Ⅱ－２類は当遺跡のⅡ－４類に相当するものであろう。

注

（１）横田賢次郎，高橋　章，石丸　洋「大宰府条坊の調査」考古学雑誌60－３　昭和49年12月

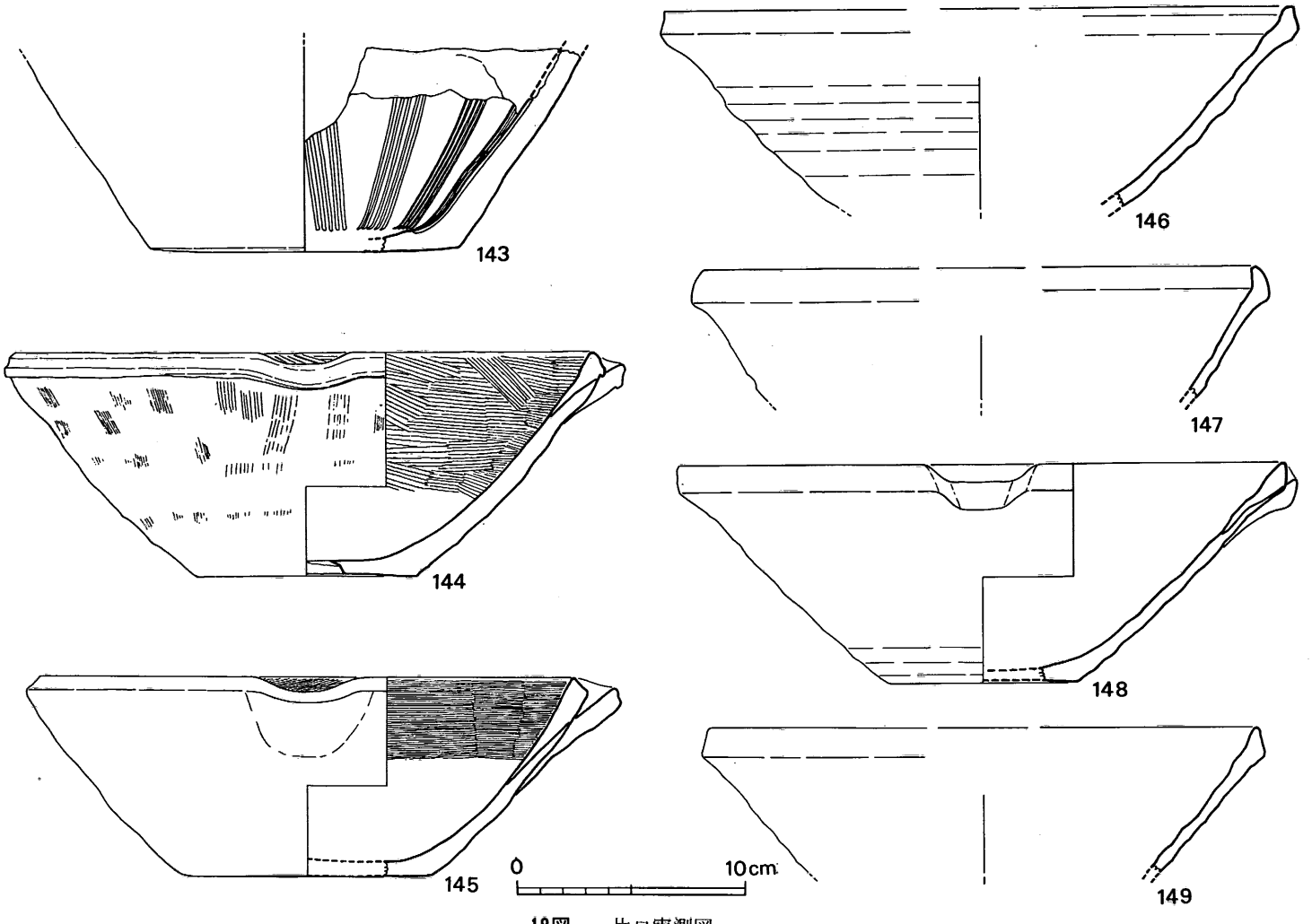
（２）福岡県教育委員会「浦城跡」福岡県文化財調査報告書第45集　昭和45年３月

５．土　鍋（11図32～35）

外に折れた口縁部をもち，その幅広い口縁上に縄目やその擦痕がついたもので，底は丸底である。内外面に細かな刷毛目がつくものもある。火にかけたものであるため，ススがよく付着している。胎土には砂粒を含む。

６．片　口（18図）

上層から出土する片口の量はかなり多い方で，その整形・焼成もかなり変化に富んでいる。すなわち土師質のものから，瓦器質のもの，須恵質のものまである。その口縁も土師質や瓦器質のものは断面が方形に近く，須恵質のものは断面が三角形に近くなり，やや内傾するものもある。また土師質や瓦器質のものは，内面や外面に刷毛目のついたものもあるが，須恵質のものにはみられない。**143**は瓦器より焼がよわい土師質のもので，口縁を欠くが，内面に５本１組の沈線がはしり，摺鉢となっている。茶色味をおびた灰黄色を呈している。**144**はＳＤ502溝出土のもので，瓦器質で断面でみると両面に近い所は灰白色で，中央のしんの部分は黒色である。表面には縦方向の刷毛目が部分的に残り，内面上半には横方向に刷毛目がついている。灰色ないし白色を呈している。**145**も瓦器質で，表面はナデてあり，内側上半には細かな刷毛目が横方向についている。灰白色を呈している。**146**は片口部と底部を欠く。須恵質としては焼成が悪い方であるが，瓦器質より堅く，外面にはヨコナデがみられ，口縁は黒色で，他は淡



18図　片口実測図

灰色である。**147**は口縁がやや内傾し，黒色で光沢を有する。須恵質で灰色を呈している。**148**は須恵質で，口縁は暗灰色で光沢はない。器面上部は横ナデが，それ以下はナデが認められ，灰色を呈し，胎土に砂粒を含む。**149**は焼成がよく，硬質の須恵質で，口縁は黒色で光沢を有し，器面は灰黒色である。

7．火　鉢・土　釜（19図）

上層から出土したものであまり大きな破片はない。土師質ないし瓦器質のもので，巴文・梅花文・菊花文・その他幾何学文などの押印文がつけられている。**162**～**164**は土釜の一部である。

8．磁　器（20～23図）

青磁・白磁・青白磁を含めて，磁器類の出土は非常に多く，それも高級品としてではなく，日常生活用具として使用されていたことがうかがえるが，それらがすべて中国や朝鮮からの輸入品であることから，当時の貿易量の多かったことを示すものであろう。

1類（21図182～185）　深緑色ないし褐味灰緑色の釉が薄くかかった青磁で，**182**や**184**のように低い高台がつくものと，**183**や**185**のようにややあげ底のものとがあり，あげ底のものは底の部分には釉がかかっていない。たたみつきと見込みの部分に目跡が残っている。胎土は灰色を呈している。越州窯製とよばれているものである。

3類（20図166，172）　白磁で，口縁部がやや外へ張り出し，細く高い高台をもつ椀で，口縁内側に細い沈線と見込みの部分に沈線がみられる。また**172**のように内側に櫛描文をもつものもある。**166**は内側と，外側上半に黄味灰白色の釉がかかり，胎土は灰白色である。

4類（167，168，173）　見込みの部分に，焼成前に蛇の目状に釉をかきとった部分がある白磁で，**167**のように3類と同じ器形のものもある。底部には釉はかからない。

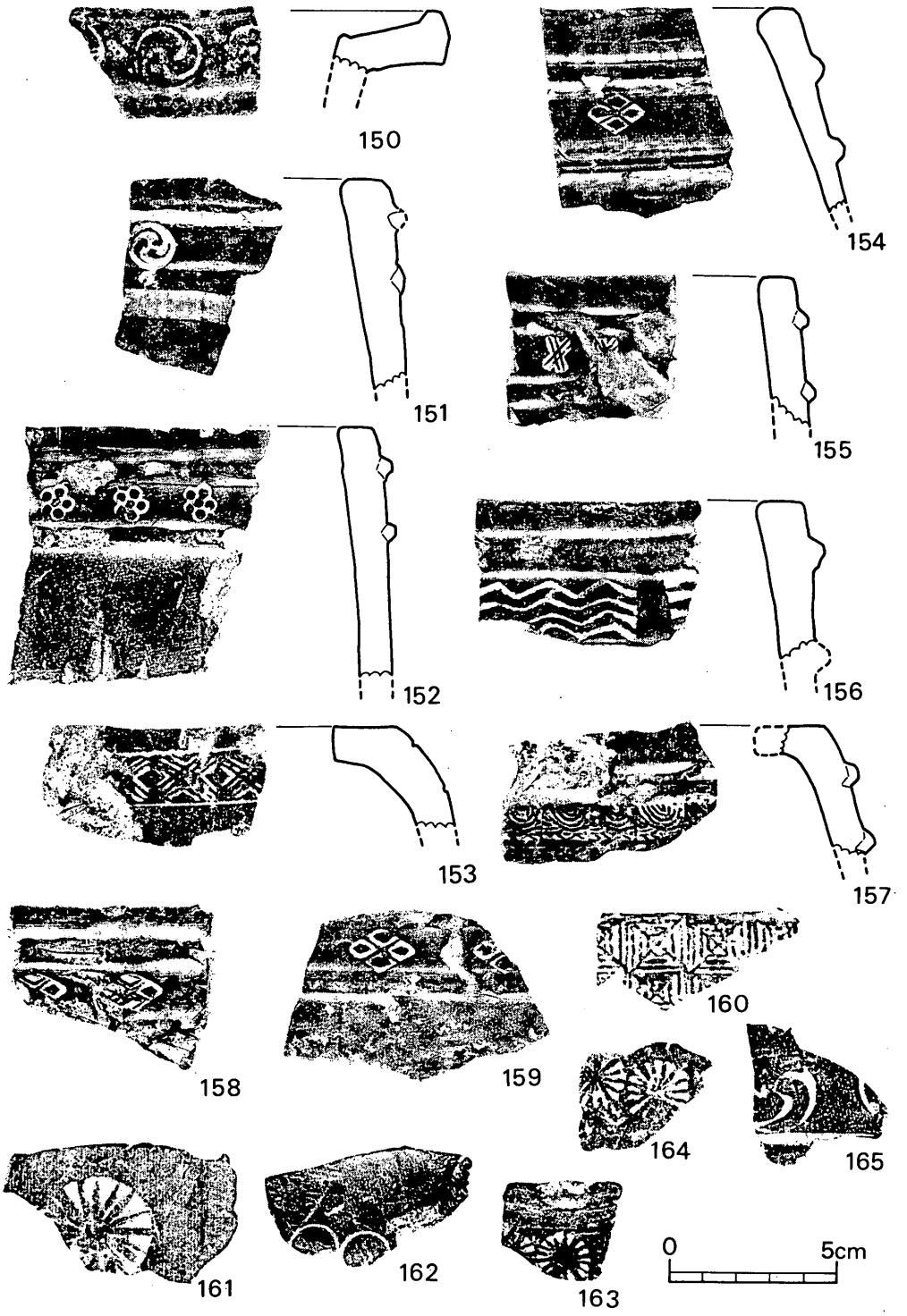
5類（169～171）　口縁が折りまげたようになって，玉縁をもつ白磁で，見込みの部分に沈線が1本まわっている。底部には釉がかけられていない。

6類（21図193～202）　いわゆる口禿の白磁で，椀形と高台付皿形，皿形などの器形がある。口縁部の先端部分は釉が焼成前に削りとられ，椀形のものには，体部内側と見込みの部分に沈線がはいっている。

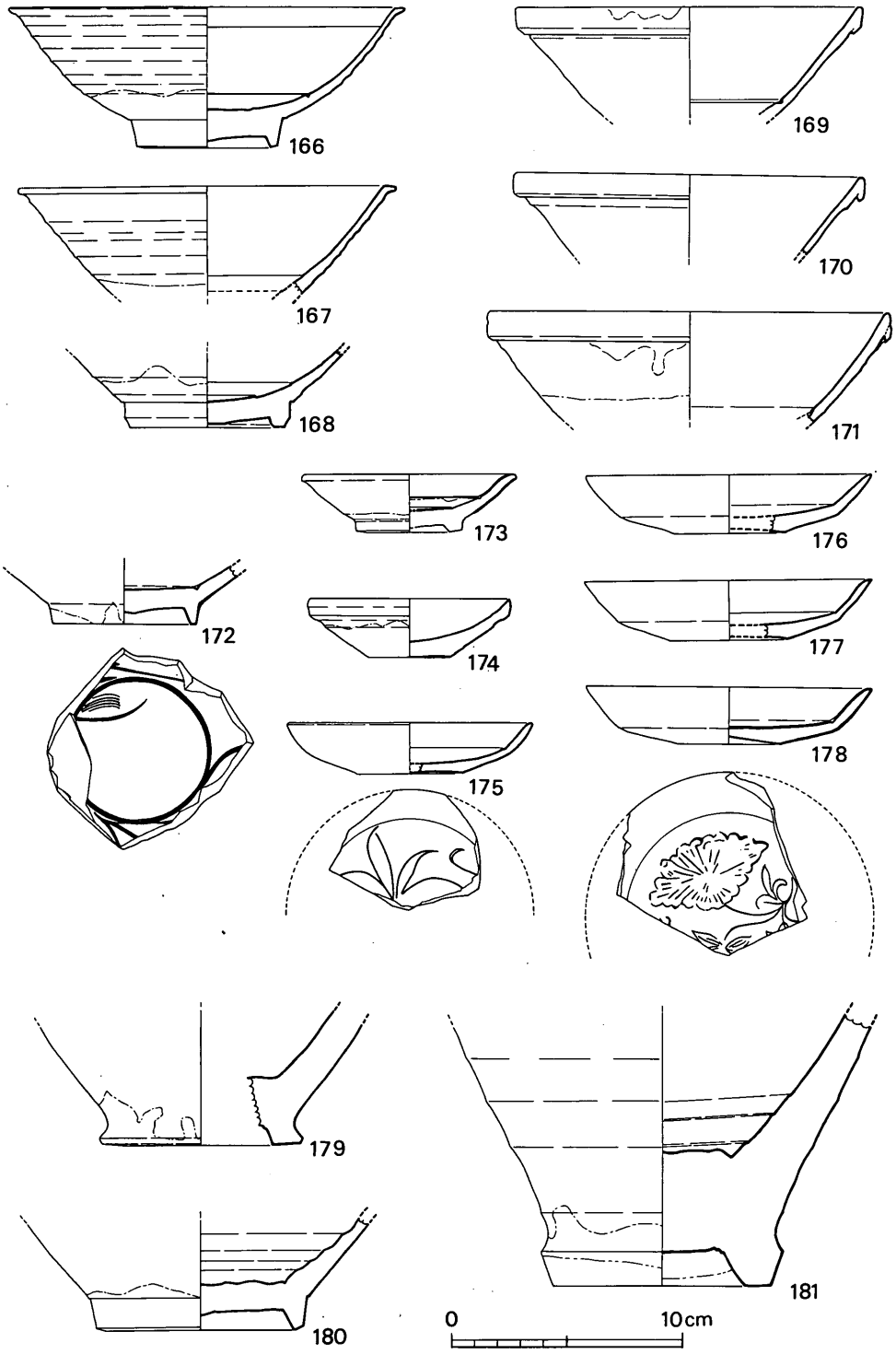
そのほか白磁には小皿と壺がある。

a（174）　削り出しで玉縁状の口縁をつくった白磁小皿で，薄い青味をおびた灰白色を呈している。底部には釉はかからない。

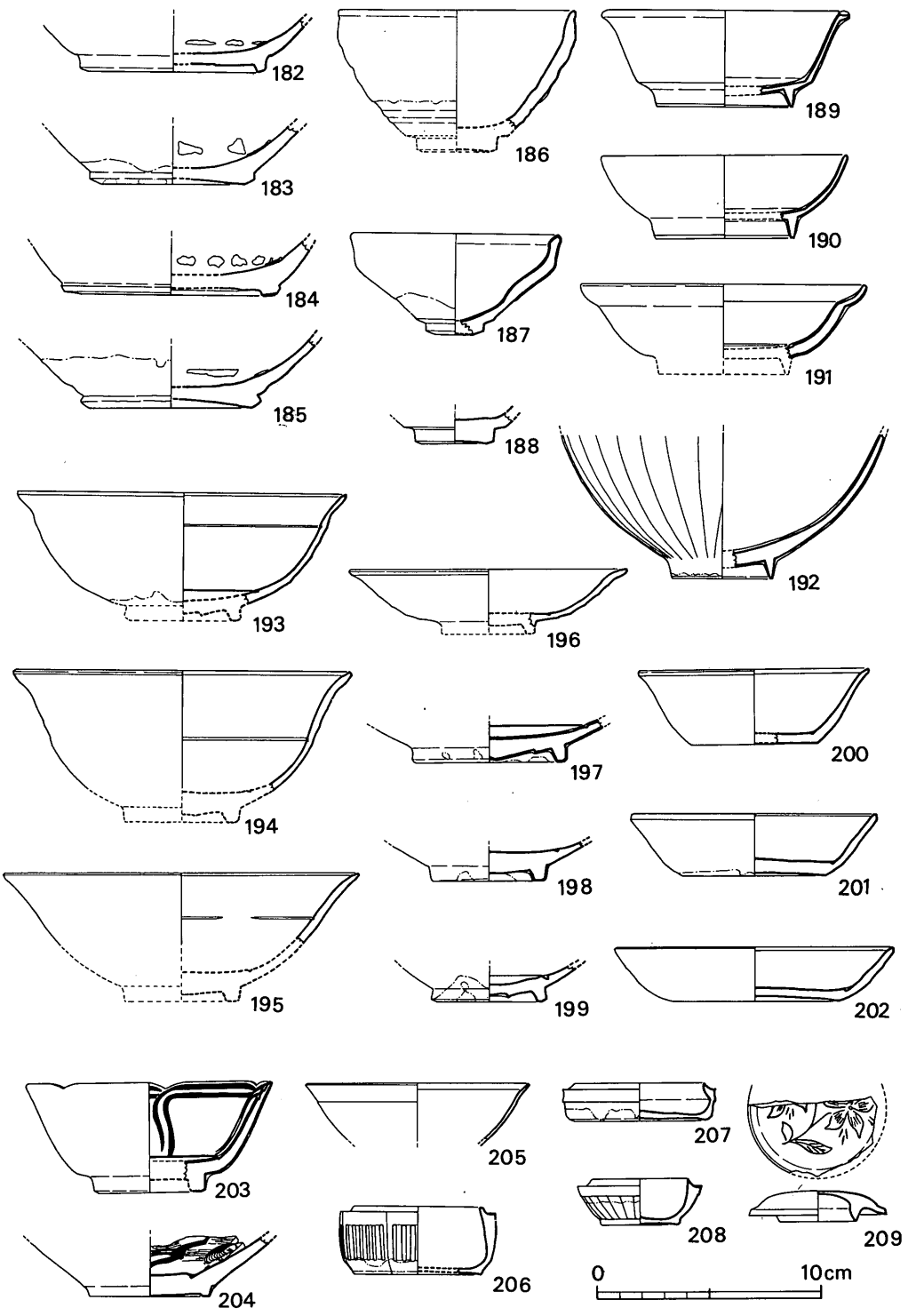
b（174～178）　口縁と底部との境に弱い屈折部をもつ白磁小皿で，口縁は尖っている。底面は焼成前に釉をかきとっている。**175**には沈線で花文を，**178**には型押しの花文がついている。これらはおそらく3類か5類に伴うものであろうか。


150
154
151
155
152
156
153
157
158
159
160
164
165
161
162
163
0
5cm

19図　火鉢・土釜拓影


166
169
167
170
168
171
173
176
172
174
177
175
178
179
181
180
0
10cm

20図　白磁実測図



21図　青磁・天目・白磁・青白磁実測図

c（179～181） 白磁の壺の底で，おそらく四耳壺と思われる。**180**は底部には釉がかからず，底面とたたみつき部分は褐色のシブがついている。**181**はＳＥ509井戸から出土したもので，底が厚く，釉は底部にかけられていない。

7類（22図210～215） 低い高台を有し，胴部はやや丸味をおびた青磁器で，数種に分けられるが，底部でみるかぎり，あまり差はない。

A（210，211） 外側は無文で，内側に二本の線で区切られた空間に飛雲文が描かれたもので，底面をのぞいて全面に濁緑色ないし灰緑色の釉がかかっている。**210**には口唇部に刻目がつけられ，**211**の見込みには目跡が残っている。胎土は灰色ないし淡灰色を呈している。

B（213） 内面にヘラによる花文が描かれているもので，見込みにも草花文が描かれている。釉は深緑色で，胎土は薄灰色である。

C（214，215） 外面に蓮弁文が削り出されたもので，蓮弁が沈線によって描かれたものもある。**215**の見込みにはボタンの花文の型押文がある。釉は淡緑色ないし濁緑色で，胎土は灰白色である。

D（212） 器形は同じで，無文のものである。

なお7類に伴う小皿としては次のようなものが考えられる。

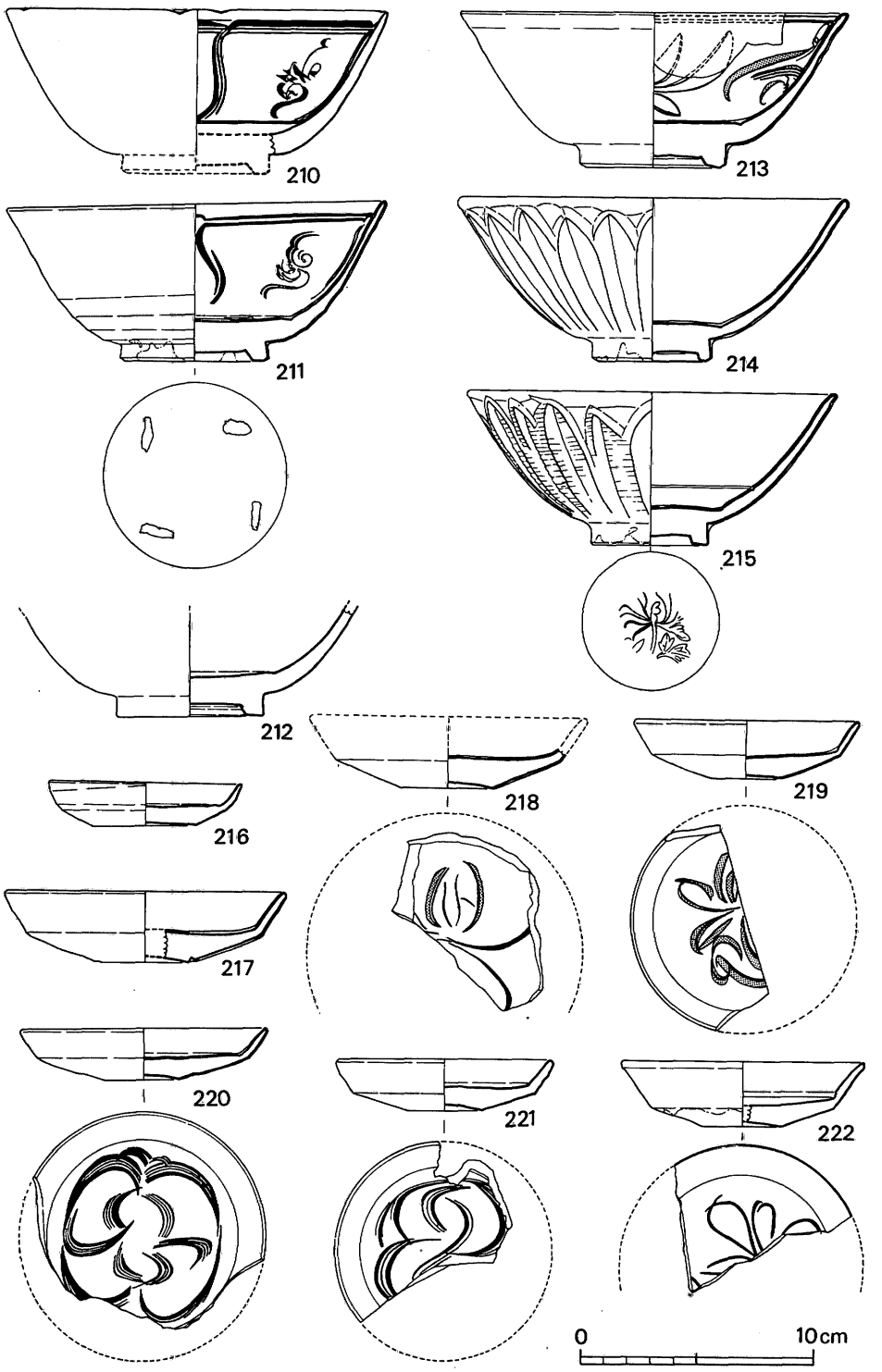
d（217～219） やや厚手の底部から，口縁がやや開きながらまっすぐのび，底面はややあげ底で，焼成前に釉をかきとっている。やや透明な緑色の釉がかかり，胎土は明灰色である。見込みにヘラによる花文があり，Bと同じである。

e 器形などは前者とほぼ同じであるが，見込みに櫛歯による曲線文がみられる。釉は緑味灰色ないし濁薄緑色である。**220**はＳＤ501溝，**221**はＳＫ532土坑出土である。

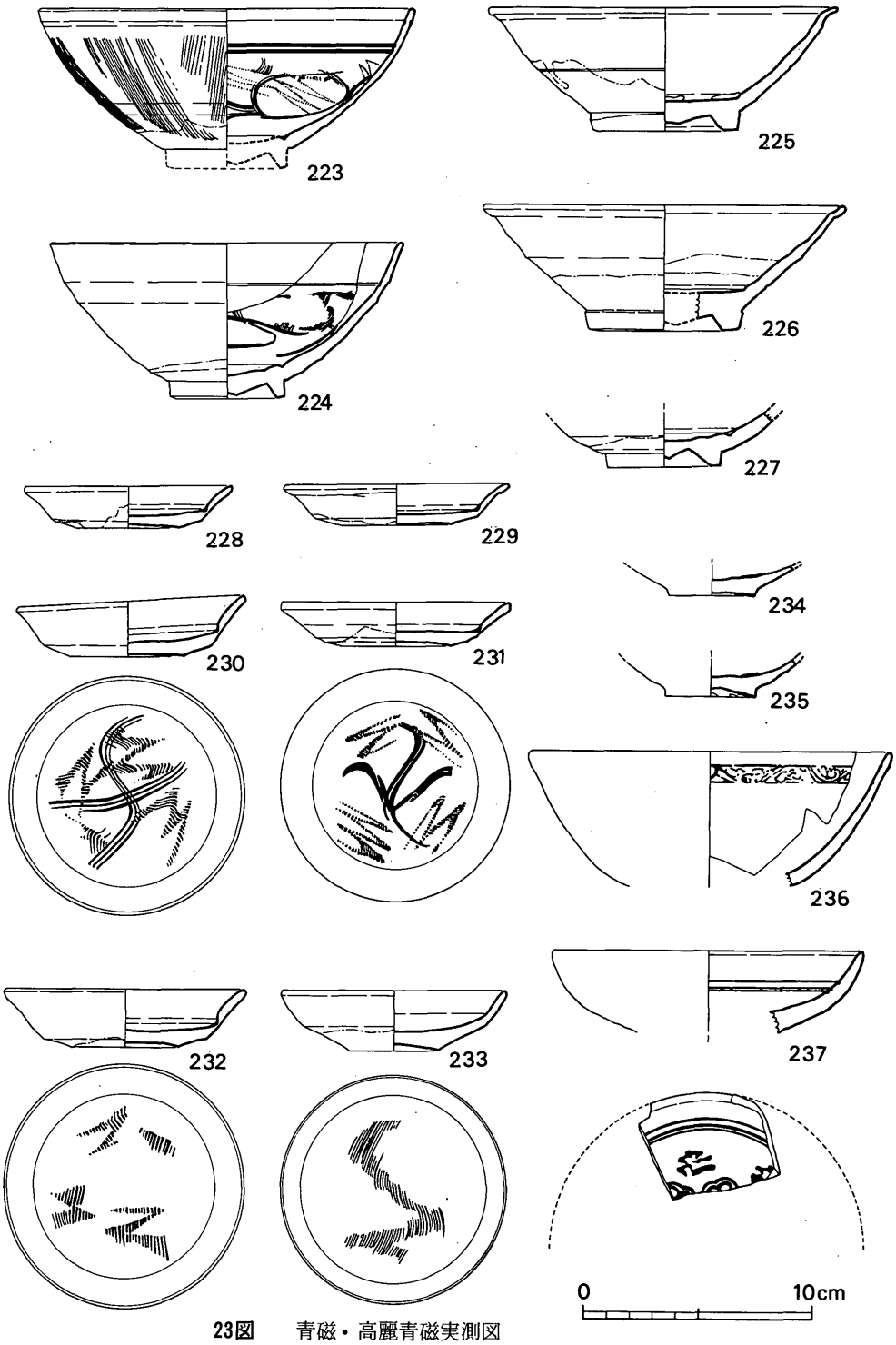
f（222） 見込みに沈線による花文が描かれたもので，口縁はやや外反し，釉も底部までかかっていないので，9類に属するものかもしれない。。

8類（21図189～192） 厚く釉がかかり，高台は薄く，たたみつきの部分はやや尖り釉はかからず褐色を呈している。胎土は灰白色ないし白色である。**189**は口唇部に釉がたまるように溝を掘っている。**191**は薄緑色で口縁は外へ折れ，内湾している。**192**はＳＥ509井戸から出土し，薄青緑色で，細い蓮弁が削り出されているが，釉が厚いため，シノギ部分だけしかみえない。

9類（23図223～233） いわゆる珠光青磁とよばれるもので，櫛歯による文様が特長的である。**223**～**224**は椀で，内面の口縁下に沈線があり，その下に櫛歯による文様が描かれ，**223**の外面にも櫛歯による条線がつけられている。**225**－**226**は無文の椀で，器壁は直線的にのび，口縁はやや外へ折れる。**225**の見込みには目跡がのこり，**226**の見込みの部分には釉がかかっていない。この9類の小皿は**228**～**233**で，器壁はやや外反する。底部まで釉がかかっていないものが大部分であるが，**230**のように焼成前に底部の釉を削りとったものもある。見込みには櫛歯



22図　青磁実測図



23図　青磁・高麗青磁実測図

による文様がつけられている。釉は黄灰色ないし灰緑色で，胎土は淡灰色を呈している。**232**は器形がやや異なり，７類の小皿に近い形で，暗褐色の釉がかかっている。

10類（21図186～188）　いわゆる天目とよばれるもので，胎土は黄味明灰色で黒地に部分的に茶褐色の釉が，底部を除いてかけられている。

11類（21図203～207･209）　薄い青の釉がかかった青白磁で，胎土は白色である。**203**は口唇部に刻みをもち，７類Ａに近い。**204**は内部に櫛歯による文様をもつ椀である。**205**は口縁部分の釉は削りとられたもので非常に薄手である。**206・207**は型に入れてつくった合子で，**209**は蓋で上面に花文の浮き彫りがみられる。

その他青白磁ではないが黄灰色の釉がかかった合子もある。（**208**）

12類（23図234，237）高麗青磁とよばれるもので，朝鮮半島で焼かれたものである。**234・235**は底部で，この類に入れてみた。暗灰色ないし明青灰色の釉が全面にかけられ，胎土は灰色ないし白色で白い粒を含んでいる。見込みとたたみつきの部分に目跡が残っている。**236**は口縁内側に帯状に白い文様が象眼され，半透明の釉がかけられ，灰青色を呈している。胎土は灰色である。**237**は皿形に近く，見込みに白い三本の線と文様を象眼している。灰緑色を呈し，胎土は薄灰色である。

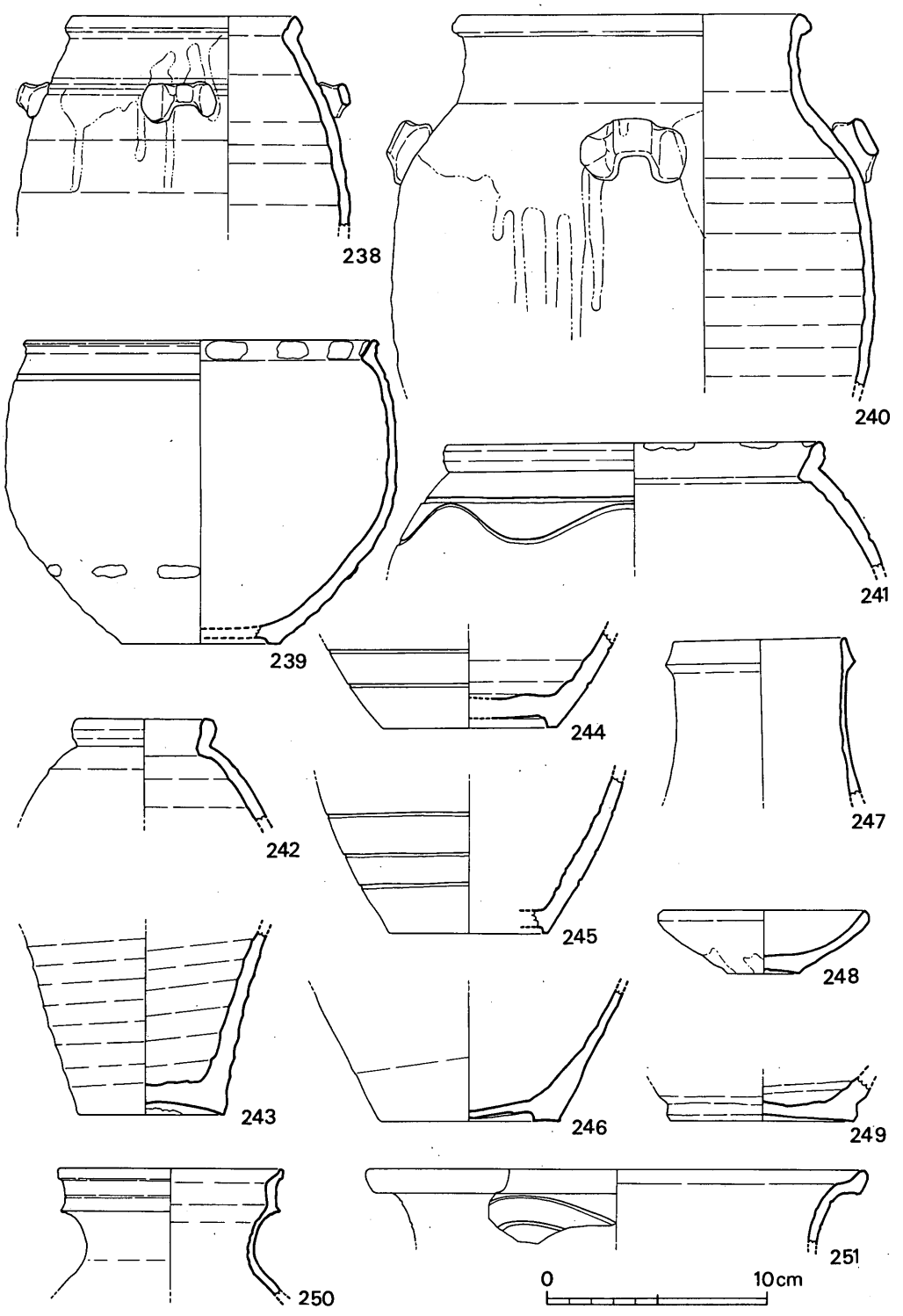
９．雑　器（24～26図）

明瞭な青磁・白磁などの磁器のほかに色々な器形をした大陸製の陶器類がある。厳密な意味での磁器もあるいは含まれているかもしれないので，ここでは一応雑器としてまとめた。

１類（238・239）　短い口縁がやや開き，器に薄い釉がかかっているが風化が進んでいる。胎土・焼成はよく，あるいは磁器に含まれるものかもしれない。**238**は肩の部分に二本の沈線状のものがめぐり，耳が付いていて，四耳壺になるかもしれない。釉は風化して黄灰色を呈し，暗褐色の釉の流れがみられる。胎土は灰色である。**239**はＳＤ501溝から出土したもので，肩に一本の沈線があり，口縁内部と胴下部に目跡が残っている。黄色味をおびた薄い釉がかかり，胎土は灰色である。**244～246**は底部で，この類に入るものと考えられる。**244・245**には胴部に沈線が数本つけられている。

２類（240）　やや大きな壺で耳が付いていて，四耳壺になるかもしれない。内外面に薄茶褐色の釉がかかり，一部に暗褐色の釉の流れがみられる。胎土は精製され，暗褐色を呈している。

３類（241～243）　短い口縁をもち黒褐色を呈する壺である。**241**は，ＳＥ515井戸出土のもので，肩に直線と波状の線がまわっている。口唇部には目跡が残り，薄く暗茶褐色の釉がかかっている。**242**は暗灰褐色の釉が薄くかかり，胎土は褐色である。**243**は暗紫色を呈し胎土は灰色ないし暗茶褐色である。底部に３個所目跡がついている。



24図　雑器実測図 (1)

4類（247）　ＳＥ506井戸の掘方から出土したもので，断面三角形の口縁をもつ長頸壺で，肩にはおそらく耳が付くものと思われる。薄手で表面に暗褐色のアメ釉がかかり，胎土は赤褐色である。

5類（248）小皿で，暗褐色の水びきか薄い釉の上に，黒褐色の釉をかけたもので，全体としてなま焼けのような感じをうける。胎土は赤褐色を呈している。

6類（250・251）　薄手で暗青灰色を呈し，胎土は暗褐色である。ロクロの跡がよく残っている。**251**には波状の沈線がつけられている。丸い肩と大きな平底をもつ壺であろう。

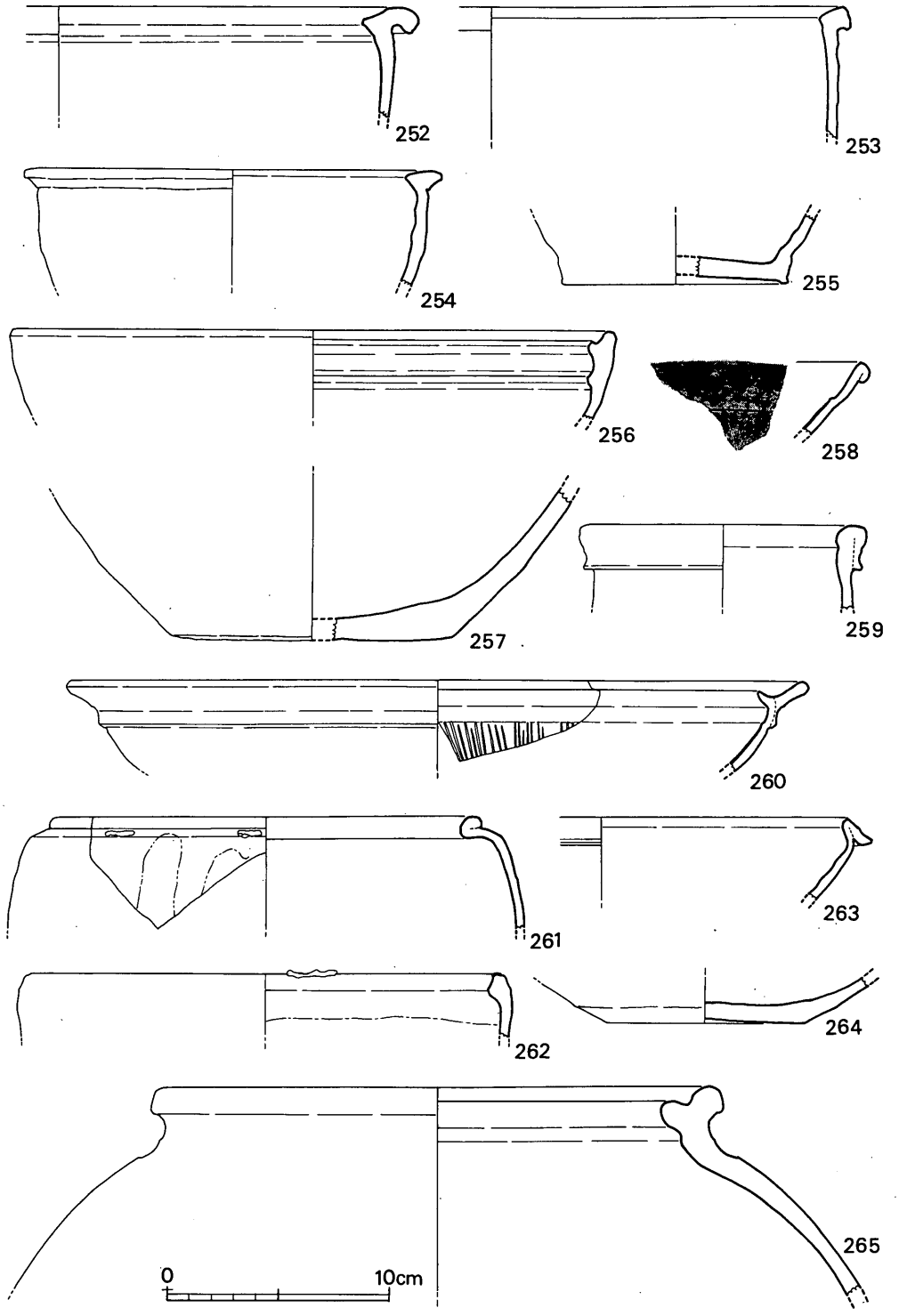
7類（252～255）　口縁が外に張り出す鉢形のもので，大きな底部をもつ。見込みには褐色の文様が描かれている。釉はおもに内側にかけられている。焼成は硬く胎土に砂粒を含み，淡灰色を呈している。**252**は褐色ないし黄灰色を呈し，口縁内側よりやや下には緑をおびた黄褐色の釉がかかっている。**253**は口の上部と外側を除いて両面に釉がかかり，外側では黄味暗緑色，内側で緑をおびた黄褐色を呈している。**254**は暗茶褐色を呈し，内側に黄灰色の釉がかかっている。**255**は底部で褐灰色を呈し，内側に褐黄色の釉がかかり，褐色の文様がある。

8類（256・257）　口縁内側に２段の凸帯をもつ鉢で，内面は下半から底にかけて，よく研磨されている。胎土には白い砂粒を含む。焼成は堅い。**256**の外面は黄灰色，内面は褐色で，胎土は褐色を呈している。**257**はＳＥ502井戸から出土し，外面は暗褐色で底部に近い部分だけ研磨され，内面は黒褐色でよく研磨され，胎土は赤褐色である。

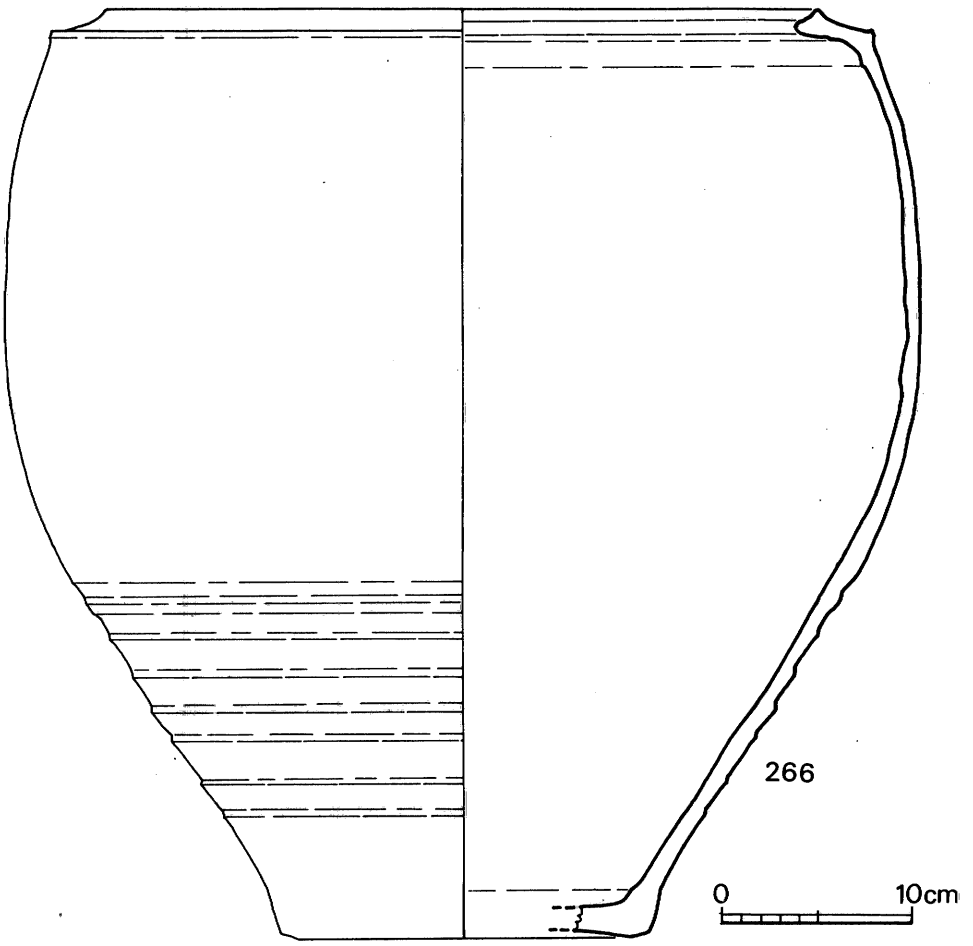
9類（285・260）　摺鉢で，内側に細い線が縦についている。**258**は折り重ねた口の部分にだけ黒褐色の釉がかけられ，他は暗灰褐色を呈している。胎土は灰色である。**260**は内側に蓋受け状の突帯がつけられ，暗褐色を呈し，胎土は黄灰色を呈している。

10類（26図266）　ＳＥ509井戸内からほぼ一個体分出土した。厚手の大きな甕で，最大径48.4cm，器高48.8cmで，口縁は内側に屈折している。胴は丸味を帯びなめらかであるが，底部に近い部分では波打っている。内側上半には同心円のタタキ目が残っている。口縁をのぞいて内外面に灰黄色の釉がかかっていて，下半部では釉の流れもみられる。底面には釉がかかっていない。

その他に一群をなさない陶器類がある。**249**は暗褐色のアメ釉がかかっているが，風化している。灰茶色で胎土は赤褐色である。**259**は暗灰褐色で，胎土は精製され明灰色である。**261**はＳＤ501溝出土で茶褐色のアメ釉がかかり，胎土は赤褐色ないし紫灰色である。肩部に目跡が残っている。**262**はＳＥ506井戸掘方から出土したもので，灰褐色を呈し，内側下半に暗褐色のアメ釉がかかっている。口唇には目跡がある。**263**は折りかさねた口縁をもち，薄い灰色味の釉がかかっている。胎土は明褐色である。**264**は両面に茶褐色のアメ釉がかかり，胎土は褐色である。見込みに目跡がついている。**265**は二つに分かれたような口縁をもち，胴の張る大甕で，両面に白黄色の釉がかかっている。内面にはタタキ目状の痕跡が残っている。胎土は



25図　雑器実測図 (2)

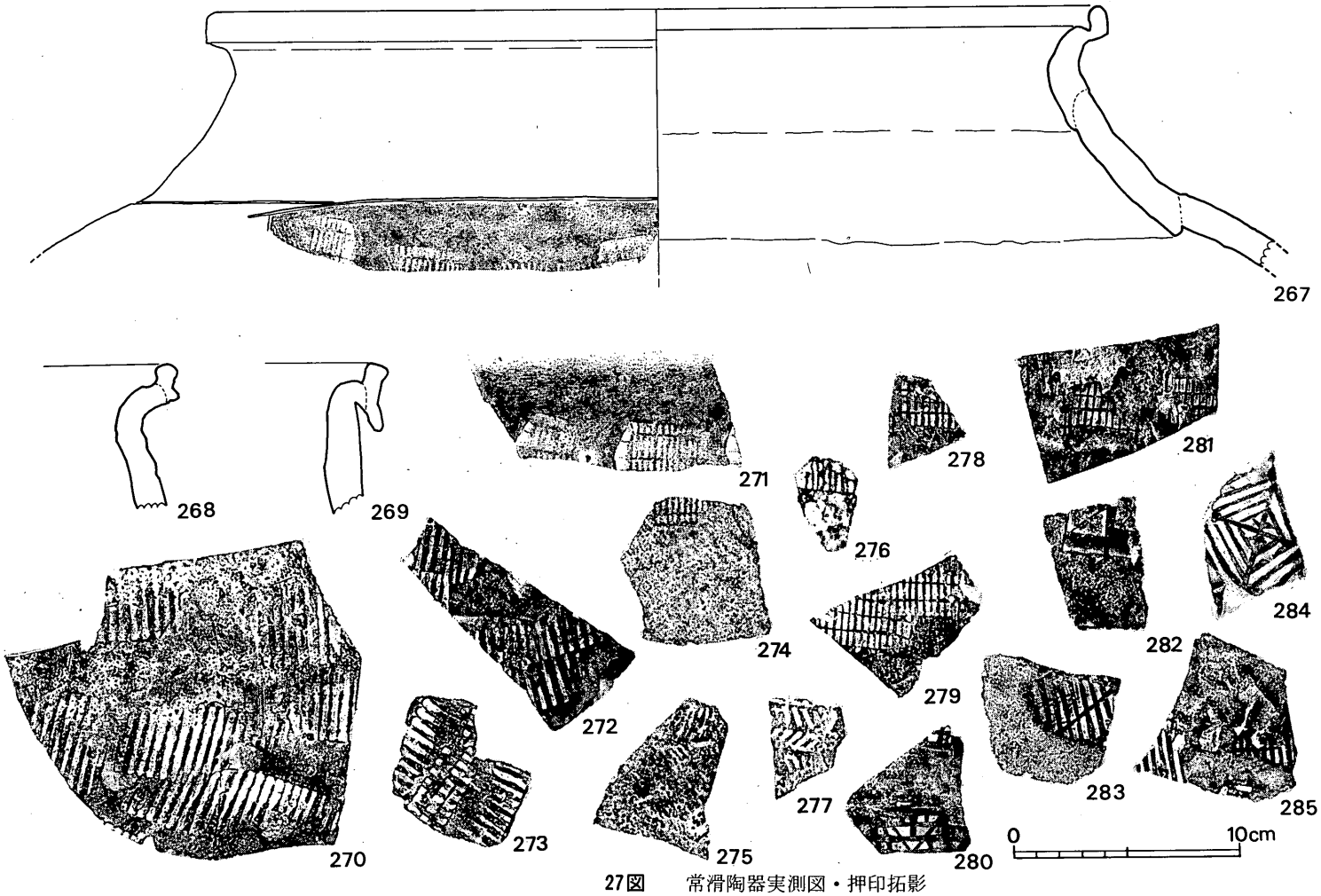


26図　雑器実測図 (3)

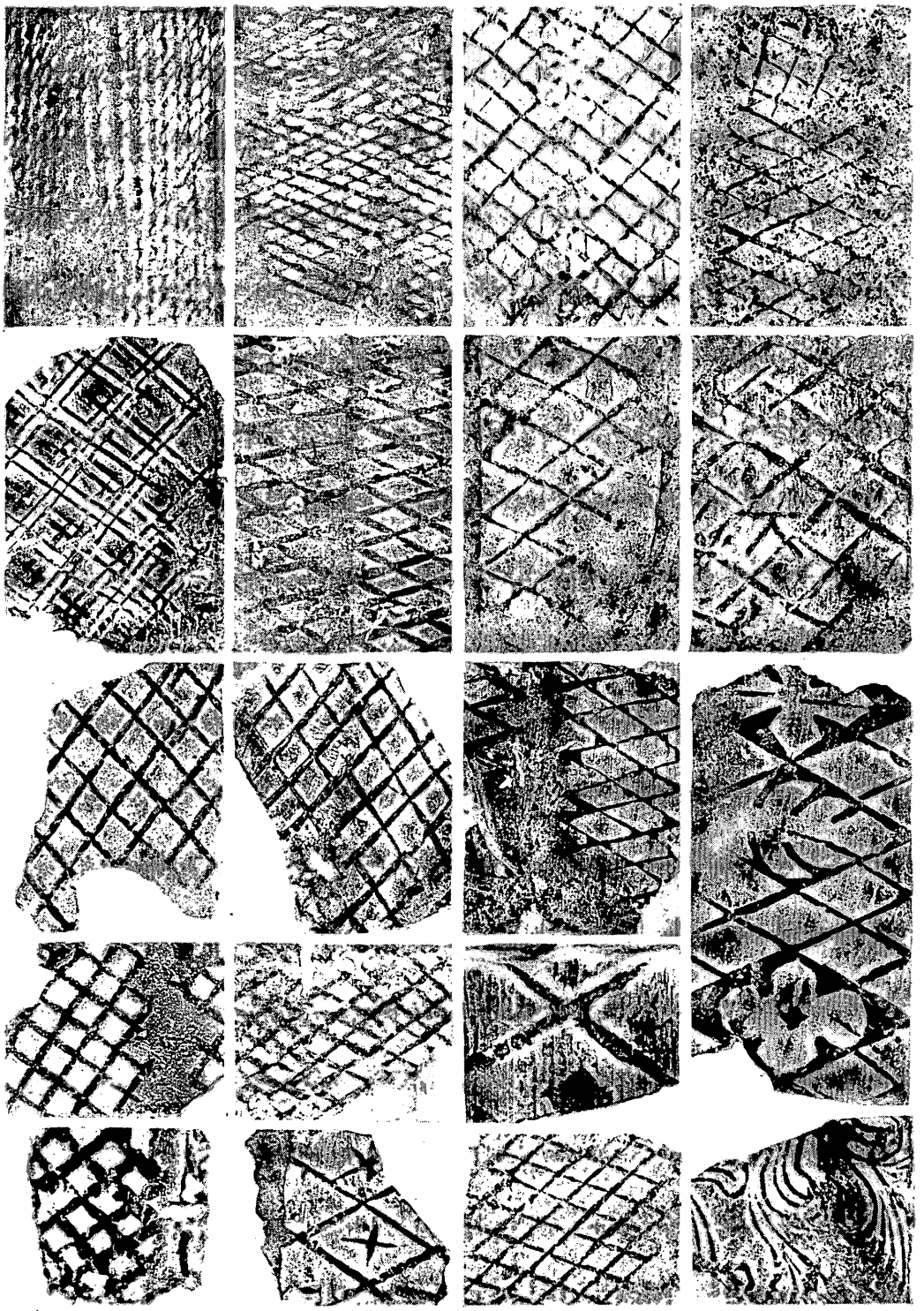
褐色で砂粒を含んでいる。10類に作りの似た甕である。

10. 常 滑 陶 器 (27図)

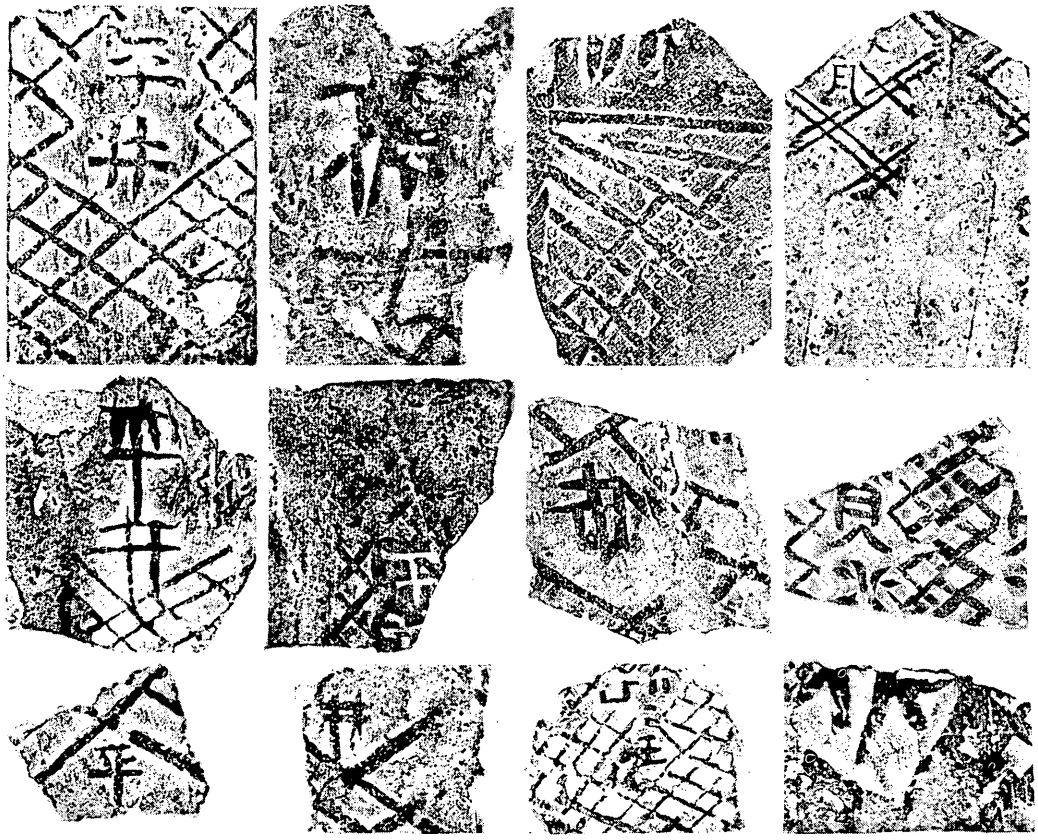
267はＳＥ509井戸から出土した大甕の破片で，折端の口縁をもち，頸部と肩部との境に沈線を一本めぐらしている。肩部には長格子目の押印がおされている。灰褐色を呈し，肩部に灰緑色の灰釉がみられる。体部の破片では肩部から胴部にかけて美しい緑色の釉がかかっているものもみうけられる。胴部破片の押印には，常滑特有の文様が認められ，気をつけて出土遺物を調べれば，かなり多いのではないかと思われる。これらの陶器は知多半島の常滑地方付近から，大宰府まではるばる運び込まれたものである。



27図　常滑陶器実測図・押印拓影



28図　瓦拓影



29図　文字瓦拓影

11.　瓦（28・29図）

ＳＫ456 土坑を除いてはまとまって，また大形破片は出土しないが，瓦の破片はかなりの量にのぼる。その主なものは斜格子目文瓦で，縄目文の瓦はすくない。文字瓦としては「平井」「佐」「賀茂」「加茂瓦」などがある。瓦はほとんどが平安時代のものである。

12. 墨書礫（図版23の１）

ＳＥ502 井戸下部から出土したもので長径9.2cm，幅5.4cm，厚さ2.0cmの扁平な自然礫である。石質は不明。４面にわたって墨書されており，平担面には漢字で，側面にはかなで書いている。

（側面）　うらごぜん
（表）　千伐(ま)□坊
　　持光房
（側面）　よにすめば

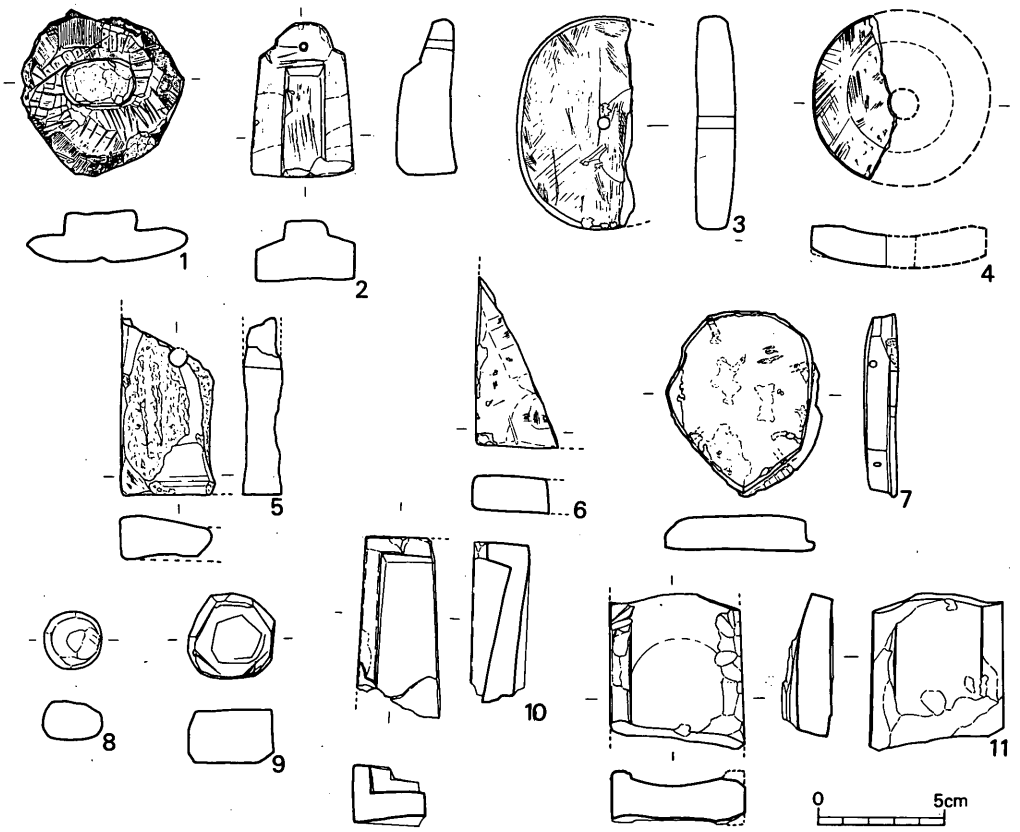
と解読される。背面にも墨書されているがうすくて解読しにくい。花押状のものも書かれているようである。

なお墨書の解読は，九州大学文学部川添昭二助教授にお願いした。

13. 石製品（30図）

石製品については滑石製品，硯，石鍋，砥石などが出土しており，特に滑石製品が大半を占める。

1は長径6.2cmをはかり,円板状のうえに方形の鈕をつくり出す滑石製品である。上面は鈕に向かって幅５mmほどの工具痕が明瞭に残る。背面は不整形で不規則な研磨がなされている。古墳時代などにみられる模造鏡に似ている。SK506土坑出土。**2**は釣鐘状をした全長 5.9cmの滑石製品で，頭部には径３mmの貫通孔を有する。上面には長さ 4.3mmの長方形の突起部がつくり出され，横断面は凸形をなす。裏面にはわずかながら円形の凹みがみられ，滑らかである。石鍋の鍔部分を再加工したものであろうか，左下部に一部ススの付着がみられる。２層出土。**3**・**4**は有孔の円板状滑石製品で，**3**は長径8.15cmをはかるが，本来は楕円形をなしていたものと思われる。**5**層出土。**4**は孔が一方に少しかたよったもので，半径の半分ほどのところから円形の凹みをつくり，断面もやや内湾する。器面は研磨されて滑らかであるが，擦痕と思われる細条痕がみられる。**4**層出土。**5**・**6**は滑石製の方形をなす石板で，**5**は孔を有し下端に工具痕を残す。５層出土。**6**も５と同種のものと思われる。**7**は楕円形にみえるが，５つに面取りし，下端に５mmの鍔を有する滑石製品である。長径 7.5cmをはかり鍔のない方の面は黒色に変色し，所々にススの付着がみられる。周縁には径３mmの孔を４個配し，そのうちの３個には鉄と思われる赤褐色の細い金属棒を挿入している。他面は火気にあっておらず，この面が火に対して内面にあたるものである。用途不明，上層柱穴内出土。**8**・**9**は小形の円板状製品で，ともに滑石製である。**8**は長径 2.1cmで研磨により周縁をつくり出している。２層出土。**9**は石鍋片を再加工したもので裏面には黒く変色した部分をのこす。多面体で周縁は縦と横方向の削りで面取りし，工具痕が残る。上面には５角形の線刻がみられる。上層土坑内出土。**10**・**11**は硯で，**10**は濃い灰色を呈し，頁岩質の石材であろうか。陸部はほとんど欠損するが海部は深さ



30図　石製品実測図

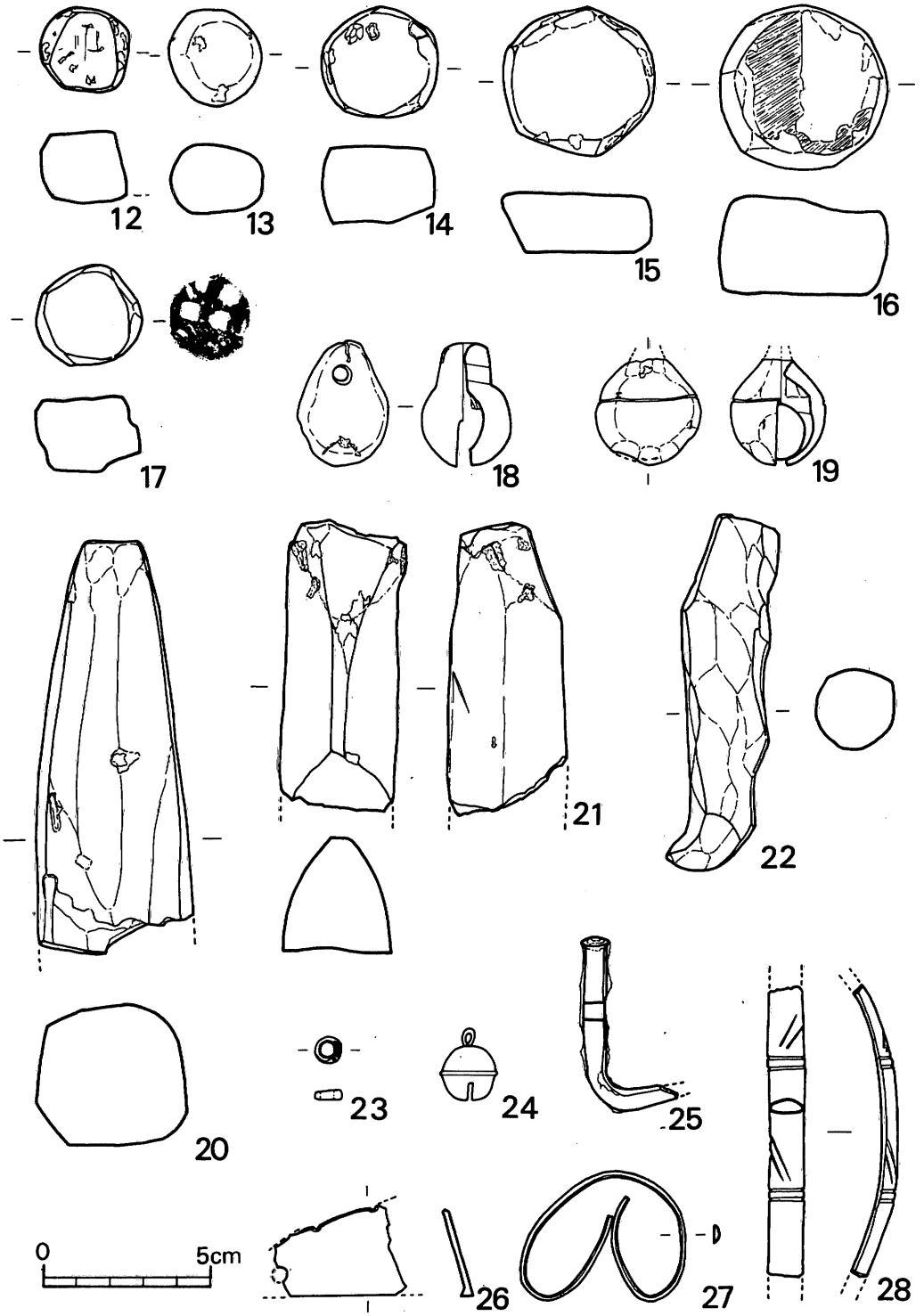
1.4cmをはかり，裏面は上げ底状となる。4層出土。11は灰白色の軟質な石材を用いたもので，裏面にも加工がみられる。海・陸部の一部を残して上・下端部は欠損し，右側壁も剝落している。陸部は中央部磨耗により凹んでいる。裏面は陸と思われる側壁2㎜の立ち上がり部を有するだけで器面も滑らかでなく実際に使用されたかどうかは不明である。4層出土。

14. 土製品（31図12～22）

土製品には瓦を利用した円板，鈴，支脚などが出土しているが，わずかな量である。

12～17は瓦を再加工した小形円板で，いずれも瓦の周縁を研磨したり打ち欠いたりして面取りしている。4cm以上の大形のものとそれ以下の小形のものが出土している。12・13・14・17はともに3cm大で，17は上面に格子目を残す。15・16は4cmをこえる大形のもので，15は周縁の一端に平瓦の小口部を残し，16も裏面に一部布目痕を残すものである。

以上いずれも灰白色や黄灰色を呈し，砂粒を含んでいて硬質であり明らかに瓦の再加工品で



31図　土製品・ガラス製品・金属製品実測図

あることがわかる。各層より出土。草戸千軒町遺跡では土器片を加工したものが出土しており，子供の遊戯具とも考えられているが詳しい用途はわかっていない。

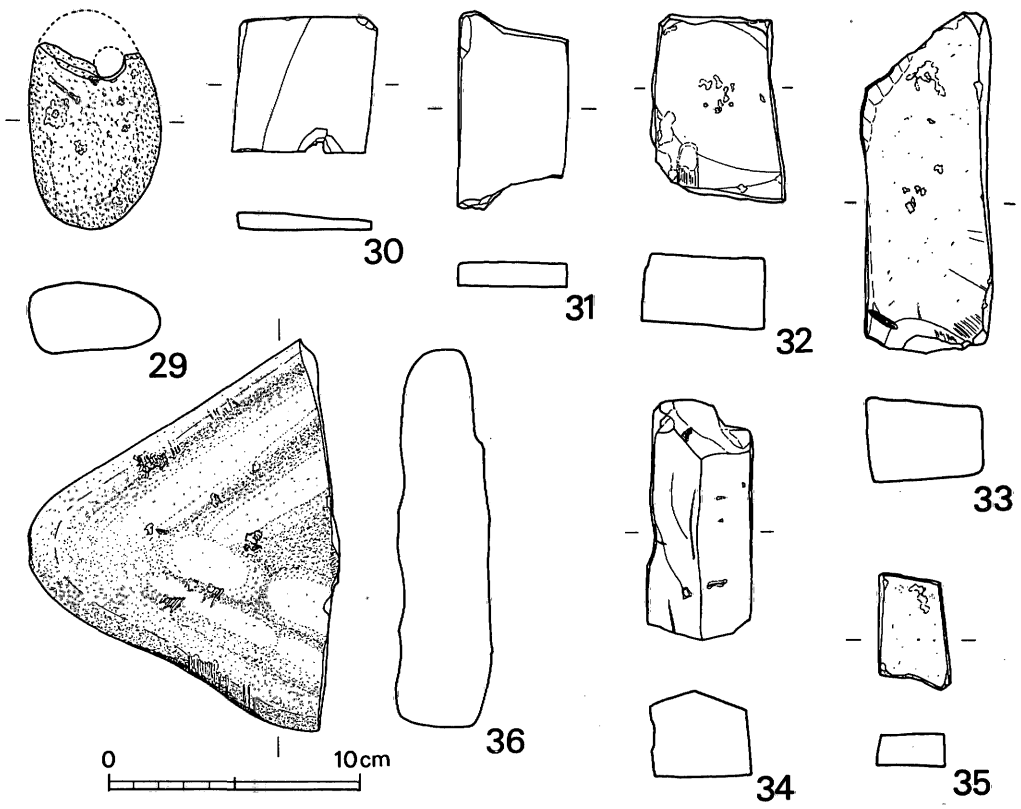
18・**19**は土製の鈴で，**18**は壺形をなし切口を中心に左右に半折した片方だけのものであるが釣手部まであり，全容がわかるものである。黄灰色を呈し，内面上部くびれ部付近にはしぼりによる痕跡がみられ，下部はヨコナデされている。２層出土。**19**も**18**と同様に割れており，幅3.1cmをはかる円形の胴部をもつ鈴である。上端の釣手部を欠損する。暗茶褐色で硬質・堅緻な焼きである。また内部の丸は径1.7cmをはかり，淡褐色で砂粒を少量含む。硬質，３層出土。

20は一辺４cmの断面矩形をなす柱状の土製品で，上端へと細くなり頂部は平担面をつくる。下端は欠損し，全容はうかがえない。明褐色で堅緻，硬質の焼成である。５層出土。**21**も柱状をなす土製品で，下半部は３角形，上部は４面をなし断面台形になる。上部には粘土の付着がみられ，３辺のうちの短辺だけ灰色に変色し，一部ススがついている。土製釜か何かの支脚で，粘土はその接合に際して使われた目張りであろうか。下端は欠損している。上層出土。**22**は三足土器の脚部で淡赤褐色，土師質のものである。砂粒少量含むが硬質な焼きで，全長10cmをはかる。掌で握ぎりしめてすっぽりと納まるつくりで，下端部はくちばし状に屈曲している。上部には土器底面に接合するための面取りがなされている。５層出土。

15. ガラス・金属製品（31図23～28・図版25の１）

23は，１点のみで径8.25mm，孔径 5.0mm，高 3.0mmをはかるガラス製小玉である。ほとんど風化していて本来の面は一部分しか残っていないがうす緑を呈し，側面には巻きつけて作った痕跡が明瞭にみられる。上層柱穴内出土。

24は全長2.18cm，胴部径1.73cmをはかる完形の銅製鈴である。釣手は薄金片を球面上部の方形の孔に折り曲げて挿入し，内部にてそれぞれ反対方向へと折り返して固定している。上半部と下半部を胴部中央にて合わせて突帯とし，丸は割れているが金属製で振るとカラカラと音のするものである。４層出土。**25**は鍵形に屈曲しているので一見カスガイを思わせるものであるが，頭部に節状のものがみられ，折曲頭形をした角釘である。断面 0.6cmの方形で先端部欠損し，現長 7.1cmをはかる。ＳＥ502 井戸掘方出土。**26**は左右両端を欠損していて全容をうかがうことはできないが，上端は花弁状に縁どられ，下端は３角形の突帯を張りつけたように内面へはり出し，幅３mmほどの平担面をつくる。青銅製のもので飾金具の一部であろうか。５層出土。**27**は銅製で，断面かまぼこ形をなし，両端から３cmのところで屈曲したものがさらに中央部にて曲げられたもので，用途については不明である。両端は曲げ切ったような切断面をなす。全長18cm，ＳＤ502溝出土。**28**は両端を欠損するが現長 8.5cm，幅 1.8cm，厚さ 4.8cmの断面かまぼこ形をなす青銅製品である。中央部はやや小幅で，裏面の方へ内湾する。描かれている文様は竹を思わせる図柄である。帯鉤みたいなものであろうか。ＳＫ538 土坑出土。



32図　軽石製品・砥石実測図

16. 軽石製品・砥石 (32図)

29は軽石で，上部やや右側によったところに穿孔があり径１cmをはかる。 孔のところから欠損し現長 7.2cmである。浮きとして使われたものであろうか。ＳＤ505 溝出土。

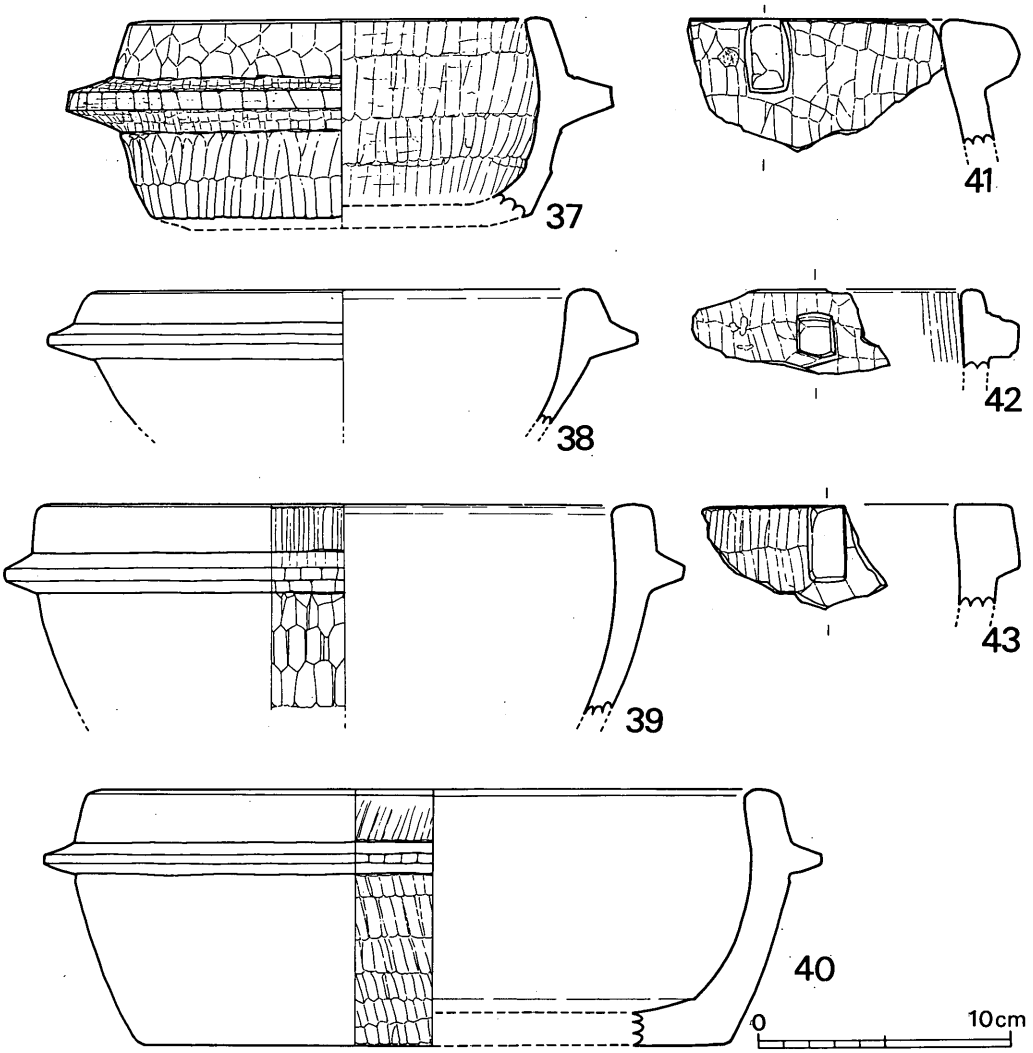
30～35は砥石であるが，滑石製品についで多く出土する。 30は粘板岩質で両面ともに使用，５層出土。31は灰色を呈する頁岩質のもので，両面ともに使用されている。上層柱穴内出土。32は硬質砂岩製で，４面を使用するが，３面にわたって５ケ所に径 1.5mm，深さ１mmの小孔が穿たれている。ＳＤ501溝出土。33は硬質砂岩製で３面を使用，一部にノミ状工具痕が残る。ＳＫ521 土坑出土。34は断面５角をなし，すべて使用，硬質砂岩製でＳＤ504 溝出土。35も硬質砂岩製で４面とも使用されている。

以上の砥石は肌面の粒子により細砥と荒砥にわけられるが30・31は細砥，32～35は荒砥に分類される。36は硬質砂岩様の石質で，一辺が割れて３角形をなしている。上面に２条の浅い溝が２本並行して走るものであり，溝は深いもので 2.5mmで概して浅く，幅もそれぞれ異なる。

また図上に示した下側面と左頂部には敲打痕がみられ，上側面には研磨痕が残されている。裏面は自然面のままである。砥石の一種であろうか。ＳＥ510 井戸出土。

17. 石　鍋（33図）

石鍋は最も多く出土し，口縁部35点，底部９点出土している。いずれもが滑石製で滑石の色調により３つに類別される。（１）は青味を帯びるもの，（２）は雲母を含んだように黄味を帯びて光るもの，（３）は白濁色および灰色のもので，後二者に含まれるものが多いようである。また形態的には２つに分類でき，（１）は方形のこぶ状把手をもつもの，（２）は口縁部下に全周する鍔を有するもので，（２）に属するものの方が多く出土している。37は底部を欠損す



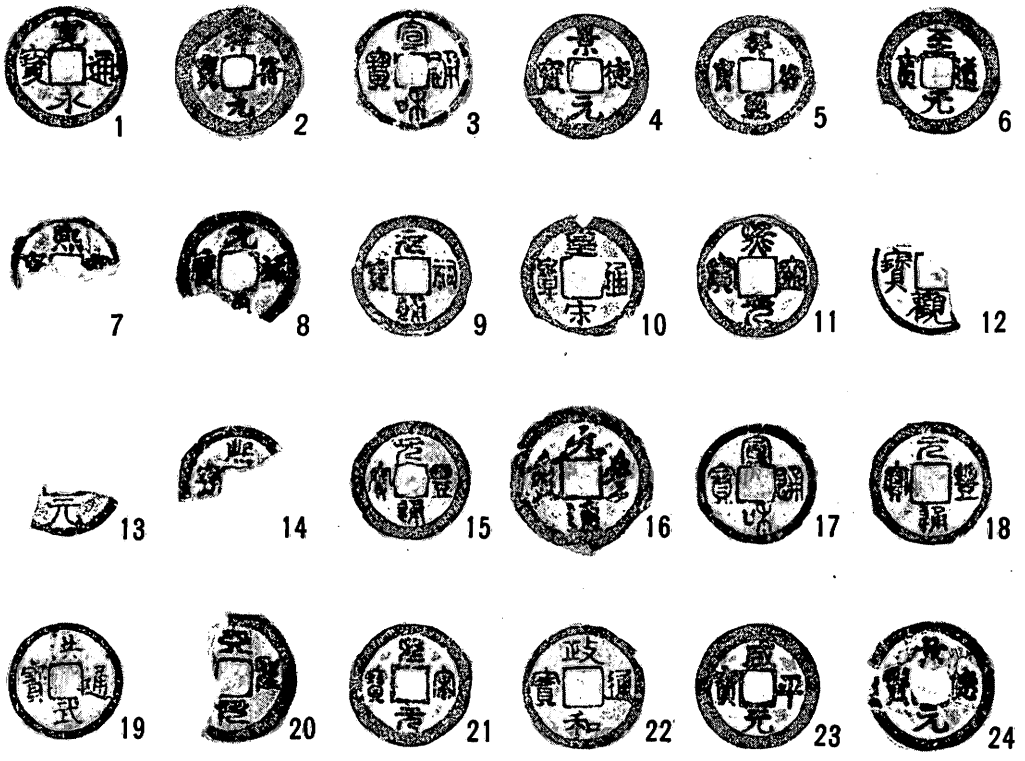
33図　石鍋実測図

るがほぼ全容をうかがえるものであり，内・外面ともに全面ノミ状工具による削り痕が明瞭にみられ，内面ではその上を荒い研磨で消している。口径16.6cm，復元高 8.3cmをはかる。白濁色。上層柱穴内出土。**38**は白濁色で，火気のため鍔下は黒く変色している。内外面ともに工具痕は消されている。復元口径約17cm。４層出土。**39**は灰色を呈し，外面の工具痕は亀の甲状に残る。外面黒変し一部にススが付着する。復元口径約14cm。上層柱穴内出土。**40**は今回出土のうちでは最大のもので復元口径約27cmをはかる。白灰色。ＳＫ541 土坑出土。41～43は鍔のかわりに方形のこぶ状把手をもつもので，**41**は復元口径16cm，灰色をなし上層柱穴内より出土。**42**は口縁部ほぼ直立し，内面には縦方向の深い削り痕がのこる。灰色，復元口径約15cm，５層出土。**43**は白濁色で，復元口径約23cmをはかる。把手下に一部ススが付着する。

この他に石鍋片の鍔部付近に穿孔をほどこしたものが出土している。石鍋自体に加工があるものか，破片を利用して再加工したものかは小片ばかりでわからない。

18. 銅　銭（34図・16表）

５次の調査では25枚の銅銭が出土し，予備調査出土の分１枚を併せると26枚になる。そのうち



第34図　銅銭拓影（$\frac{2}{3}$）

判読可能なものは15種23枚で日本銭の寛永通宝と明銭の洪武通宝以外はすべて北宋銭である。出土の状態は包含層から出土するものが多いが遺構の中から土器等を伴って出土しているものもある。ただ多数の井戸址が発見されながらその内からは一枚も出土しなかったのは興味深い。年代的には北宋太宗の至道元宝（995年）が最も古く，寛永通宝を除いては明太祖の洪武通宝が最も新しいものである。層位的には5層からの出土が最も多く10枚を数え，天聖元宝（1023年）から洪武通宝の約350年の幅をもったものが同一層から出土しているが，洪武通宝の出土状況には疑問な点もあり，それを除いては11世紀後半から12世紀初頭にかけてのものに集中している。5層より上層についても各年代のものが混在して出土しており，銅銭と層位との関係は明確にはしがたい。

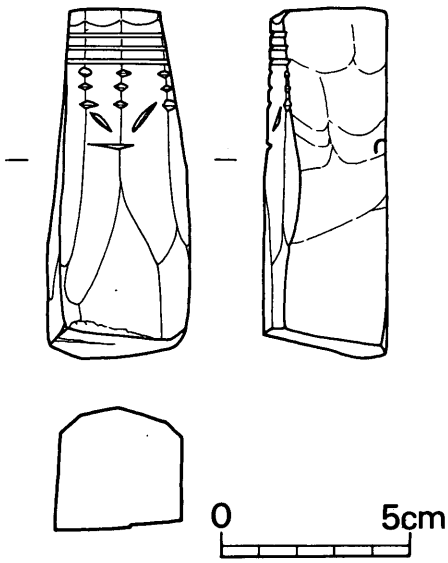
19. 木　製　品（35～37図）

各種のものが出土し，木偶・墨書木札・椀・櫛・箸などがみられるが，用途不明のものも多く出土している。

木偶（35図・図版26の2）　SE 512井戸より出土し，長さ9.25cmをはかる。断面は下端でほぼ方形をなし，両小口は刀子状のもので切断され，背面は荒割りのままの状態である。左右側図は上端に向かって削り出され，正面は4面に面取りされている。

正面は4面がつくる3本の稜を中心に陰刻され，上から1・2・3区とすると，1区は3本の直線の彫りで断面レ形をなす。2区は左右斜めからの切り込みで，1本の稜に3個づつ計9ケ所にみられ，断面V形をなすが平面では菱形をなす。3区は中央の稜に1ケ所，その左右両面に2ケ所切り込んで彫られ，稜部のものは1区のものと同じ断面形をなし，両面にあるものは2区のものと同じ断面である。また正面先端部は3面にわたって浅いU字状に抉られている。

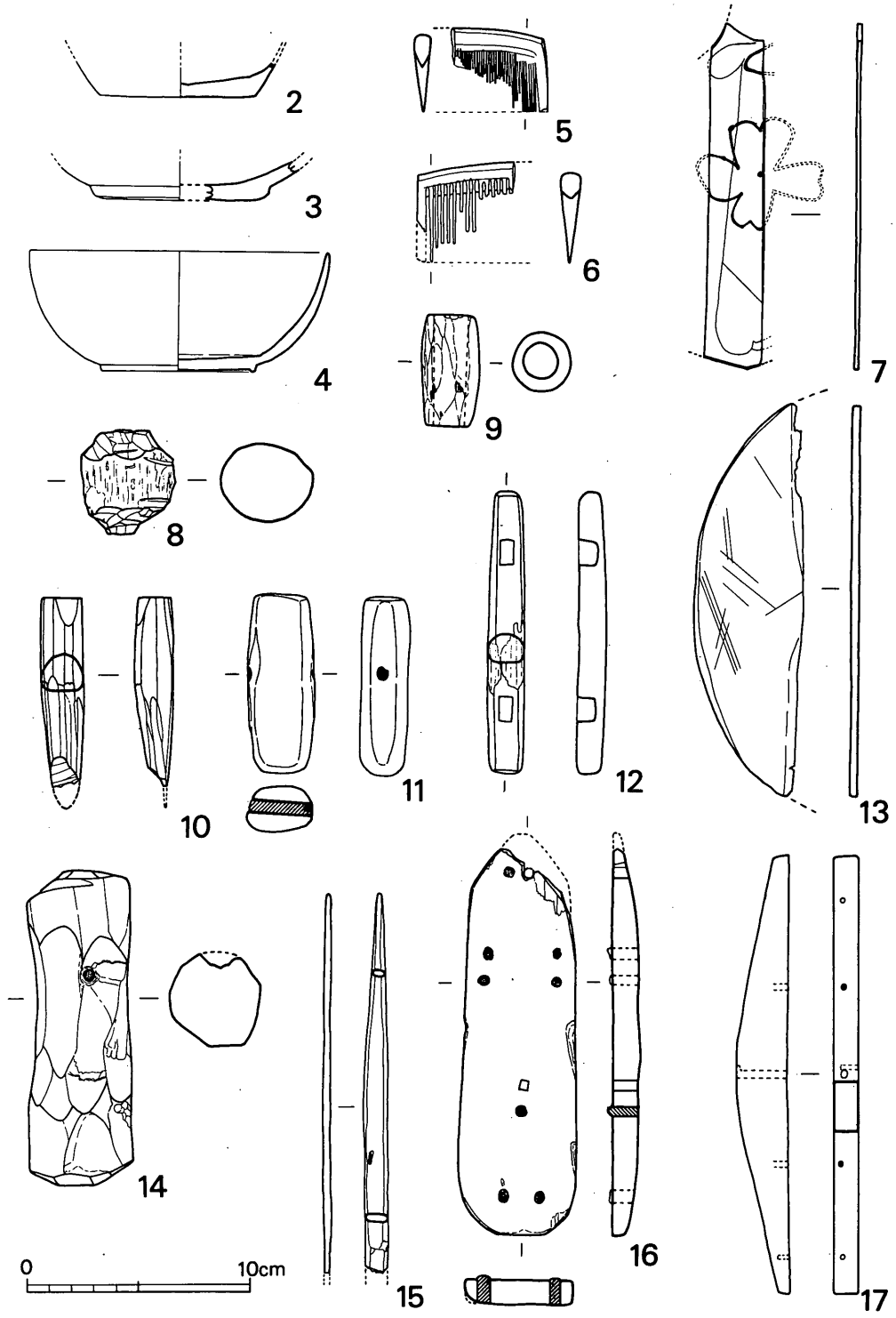
この陰刻木製品が何を意味するものかは定かではないが，一見して人面を思わせるものである。木偶として祭祀的な用途に使われたものであろうか。



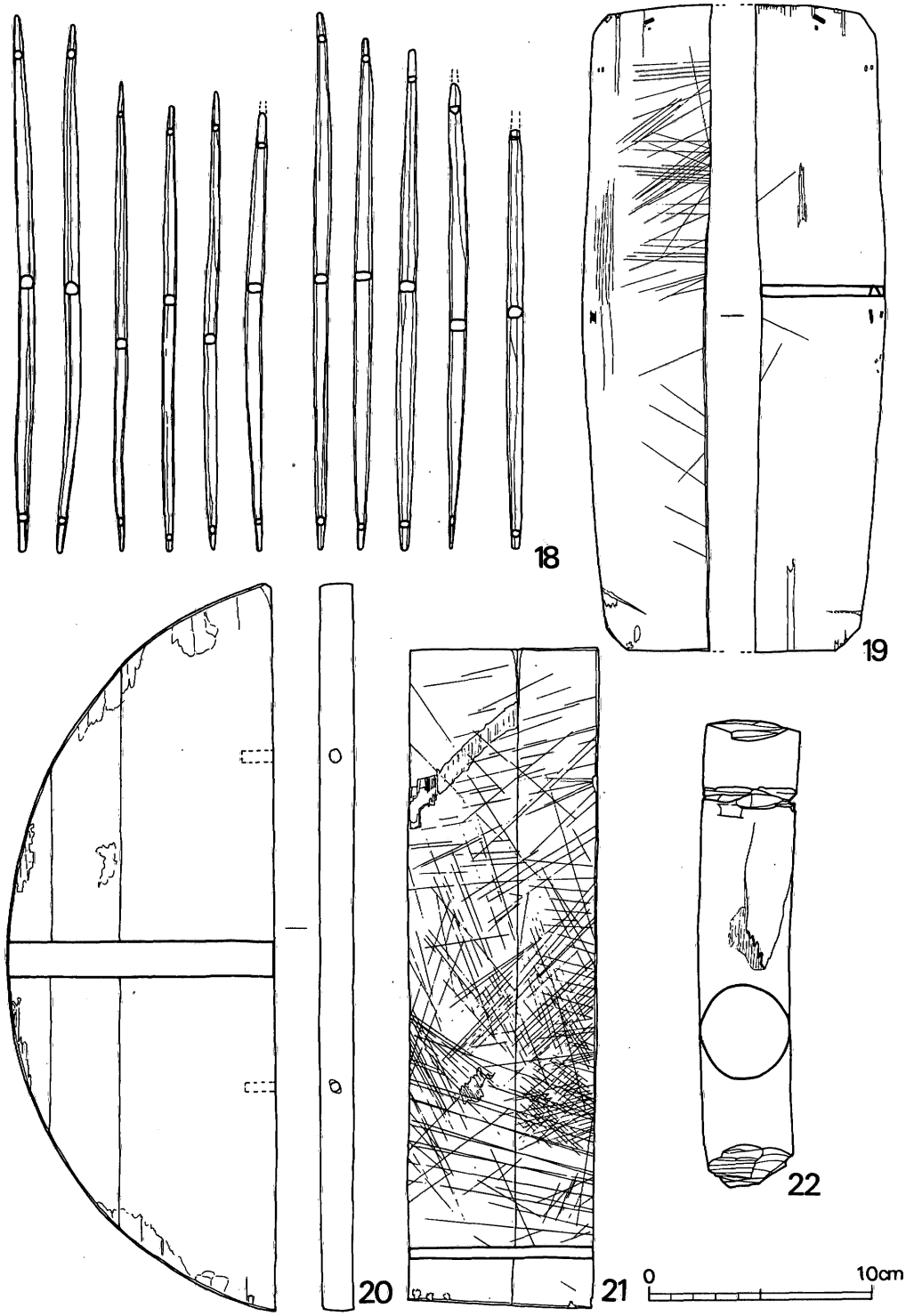
35図　木製品実測図（1）

墨書木札（図版23の２）　ＳＥ501井戸より出土。全長9.0cm，幅2.6cm，厚さ0.35cmをはかる長方形の板材に，上端から1.0cmのところで両側に３角形の切り込みをつくる。かな文字が表裏２面にわたって墨書されているが，うすくて解読困難である。

２～４は椀で，器形のわかるものは１点のみである。**２**は黒漆塗りで内外面にロクロ痕が残る。ＳＤ502溝出土。**３**は高台を有するものであるが，火気にあたったものか全面焦げている。ＳＥ505井戸掘方出土。**４**も黒漆塗りのものでほぼ全容をうかがえる。復元口径約13.5cmをはかる。内外面ともにロクロ痕が顕著で，高台を有する。ＳＥ502井戸出土。ほかに黒塗の漆部だけがはがれたものもあり，朱で花模様の描かれたもの（図版26の１）や木の葉を描いたものなどがある。**５・６**は櫛でともに頭部半円形をなし，歯は頭部の両側から斜めに切り込んでつくり出されているため中央部断面は山形をなす。**５**は１cmあたり10本の歯を有する。黒っぽい色を呈するが材質は不明，ＳＥ503井戸出土。**６**は1cmあたり3.5本の歯を有するあらい櫛である。材質不明。５層出土。**７**はヒノキと思われる薄板に焼け火ばし状のもので文様を描いたものである。両端が欠損しているため文様の全容はわからないが，花弁状の文様を描いたものであろう。また，刀子による細かい線刻もみられる。ＳＥ501井戸出土。**８**は断面楕円形の丸木の両端を切り込んで整形しただけのものである。他の条坊内遺跡では数十個発見されており，「毬打」といわれる遊戯の「毬」と報告されている。今回の調査ではこの１点のみでＳＥ513井戸より出土。**９**は管状の木製品で胴部やや膨らむ。孔は両端から掘っているが内面に「ささくれ」が目立つ。うきであろうか，井戸内出土。**10**は断面台形をなし，上面は多面体に削り出されているが，裏面は１面である。頂部は平担面をなし，下端は欠損するが尖がるものである。木栓様のものか，SK501土坑出土。**11**は直方体状に整形された木部に，側面から焼け火ばし状のもので穿孔し，径５mmほどの細い棒を挿入している。ＳＥ509井戸出土。**12**は断面台形状をなす長さ12.5cmほどの短棒の裏面に長方形のほぞ穴を２ケ所あけたもので，ほぞ穴間は約７cmをはかる。ＳＥ501井戸出土。**13**は曲物の底板で細かい線状の刃物痕が走っている。復元径約11cm。ＳＫ501出土。**14**は周縁を面取りした丸木の両端を簡単に整形し，中央部は細く削り出されているため上部と下部が太くなる槌の子状のものである。ＳＥ506井戸出土。**15**は曲物の底板を再加工したもので中央部よりやや上に桜巻の樹皮が残されている。一方は削り出して柄状にし，他端は欠損するがヘラ状をなすものであろうか。ＳＥ501井戸出土。**16**は船形をした台木に10ケ所穴をあけたもので，うち８ケ所には細い棒が挿入され，上面の方は台木より突出している。孔は円形であるが，中央部にある１個は方形をなす。上面は平担で斜めに暗文風のこすった痕跡がみられる。裏面は上面に比して凸凹である。４層出土。**17**は弓形をなす板材の側面に５つの孔をあけ，うち２ケ所には細木が挿入されている。中央の一孔は他面まで貫通し，裏面にも貫通しない孔があけられている。短冊形の板を数枚綴り合わせて一枚の板となすものの一部で，これは端部にくるものであろう。４層出土。**18**は箸で長さにより２つに分けられる。一つは20cmを



36図　木製品実測図 (2)



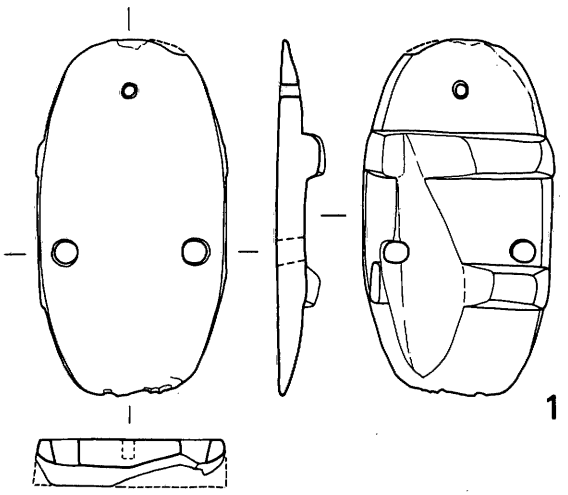
37図　木製品実測図 (3)

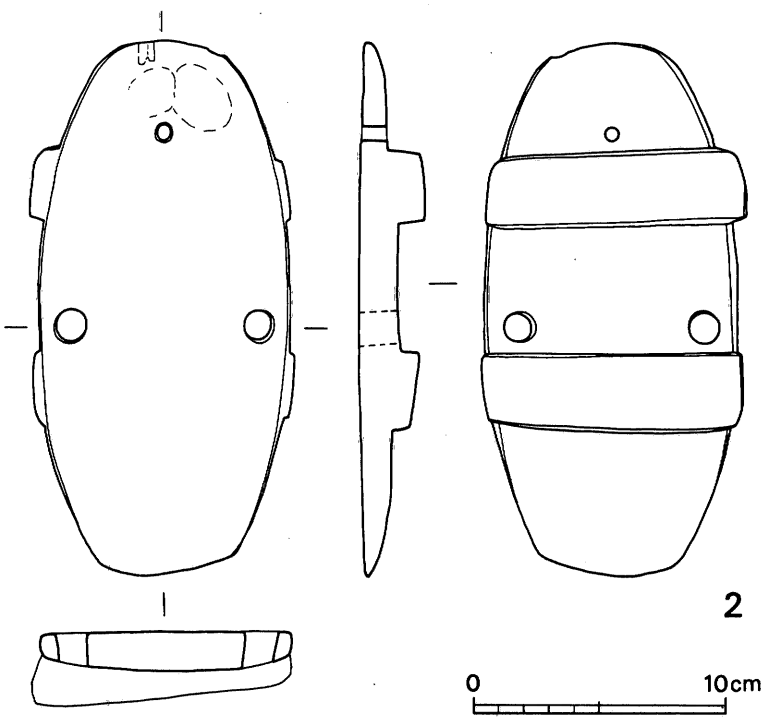
こえる長いものと，他はそれ以下の短かいものである。また中央部断面も丸くなるものと扁平をなすものとがある。各遺構から出土しているが，とくにＳＫ501土坑からは200本，ＳＥ512井戸からは100本以上まとまって出土している。**19**は全長28.7cmの長い薄板で，２ケ所に桜樹皮がみられ，さらに１ケ所それが挿入された小孔があいている。この板と垂直に曲物状のものが立てられ，桜巻きによって緊縛したものであろう。ＳＥ501井戸出土。**20**は半円形の厚い板で，弦にあたる側面には深さ1.4cmの孔が２ケ所にみられる。**17**と同様に板材を綴り合わせて一つの板をつくるもので孔には木が挿入されて別の板材の孔に差し込むものであろう。桶の底板であろうか，ＳＤ501溝出土。**21**は堅緻な薄板に細い直線の刃物痕が多数ついたもので，中央部が密である。裏面は上面よりも少ない。「まな板」用の役目を果したものと思われる。ＳＤ501溝出土。**22**は径４cmほどの円柱両木口を雑に整形し，上端より３cm下位に両方向からの切り込みによるＶ字状の切口がみられる。形状などから**8**にみられるような「毬」をつくる製作過程を示す木製品であろうか。

20. 下　駄（38～43図・図版28～30）

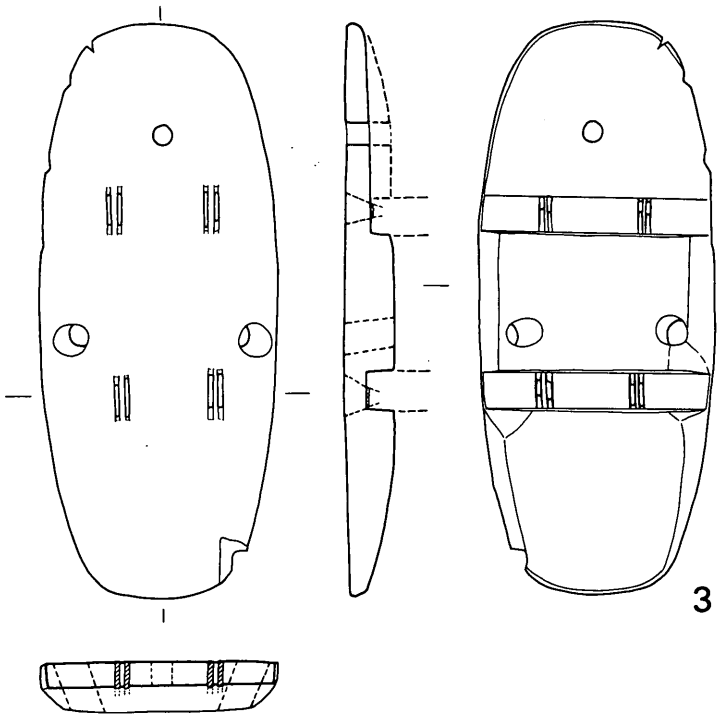
今回出土した下駄は台部のあるもの13個，歯部のみのもの８個である。構造上から大別して連歯下駄と差歯下駄とに区分され，差歯下駄はさらに歯の一部が台部表面にあらわれる露卯とかくれている陰卯のものとがある。

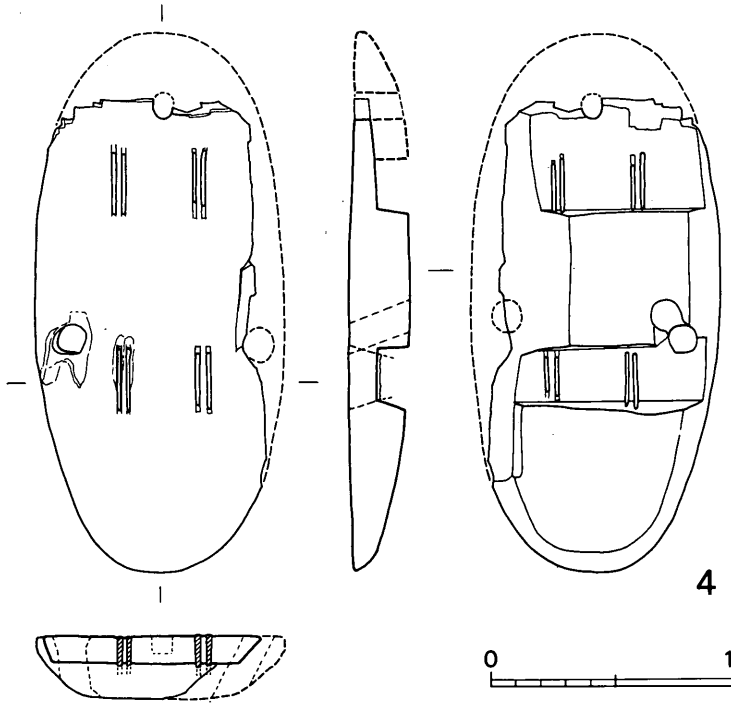
1・**2**は台部と歯部とを一木で作った連歯下駄で**1**は小児用，**2**は成人用のものである。また，**2**は足指の痕跡，歯の磨滅から左足に用いられたものであろう。**3**以下は台部と歯部とを別材で作り，台部に差し込んだ差歯下駄である。**3**・**4**・**5**・**6**は台部上面に２条づつの細長いほぞ穴を前後に２ケ所づつ計４ケ所にわたってあけ，そこに楔形の薄板をうち込んで歯を固定している。**7**も同じ構造のつくりで，ほぞ穴が２ケ所になったものである。歯は台形をなす。**8**は台部前歯部に２ケ所，後歯部に１ケ所1.5×2.5cmの大きいほぞ穴をあけ，歯部にはそれと合致するように突起部を作り出してほぞとし，台部に差し込んだもので，さらに台部面にみえているほぞの中央に楔を打ち込んで固定したものである。効果の面よりみれば３～７にみられるものよりは強固であろう。**9**は小児用の下駄で，１条のほぞ穴４ケ所に楔を打ち込む形式のもので，更に歯を固定するため前歯部に１ケ所，後歯部に５ケ所角釘を打ったもので，角釘は２本現存する。歯は銀杏形をなす。**10**は８の下駄にみられる形式のもので，４ケ所において楔が打たれている。**11**～**13**は台部から折損，剝落したものでいずれも２条づつのほぞ穴をもつ形式のものである。**14**～**18**は歯部のみで，**17**は８・10の構造の下駄に組み合わせられる歯で，歯部上端に２個のほぞがつくり出されている。ほぞには楔の打ち込まれた痕跡が残る。**18**は完形の銀杏歯で，上端には２条づつの穴がみられ，そこに楔が打ち込まれたもので３～７・９・11～13の構造の下駄に組み合わせられるものである。



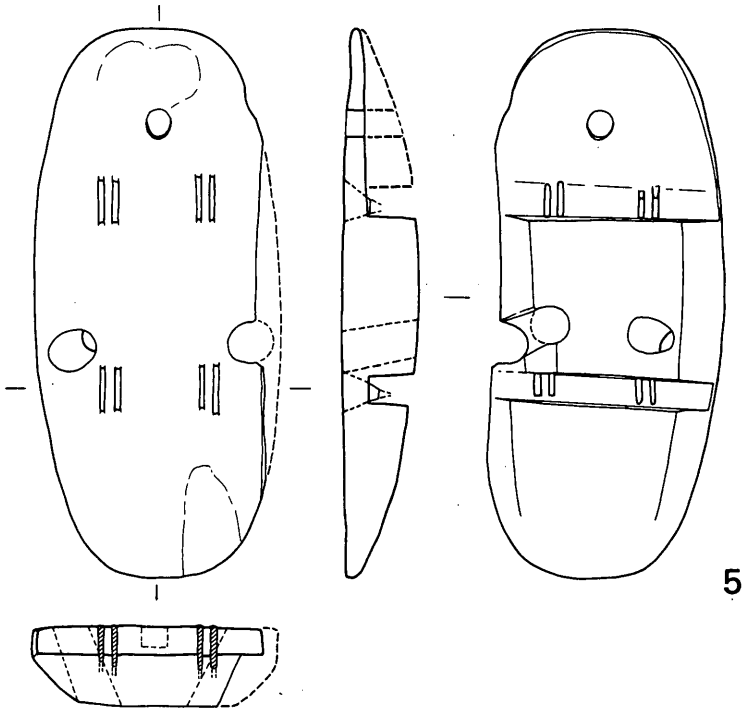


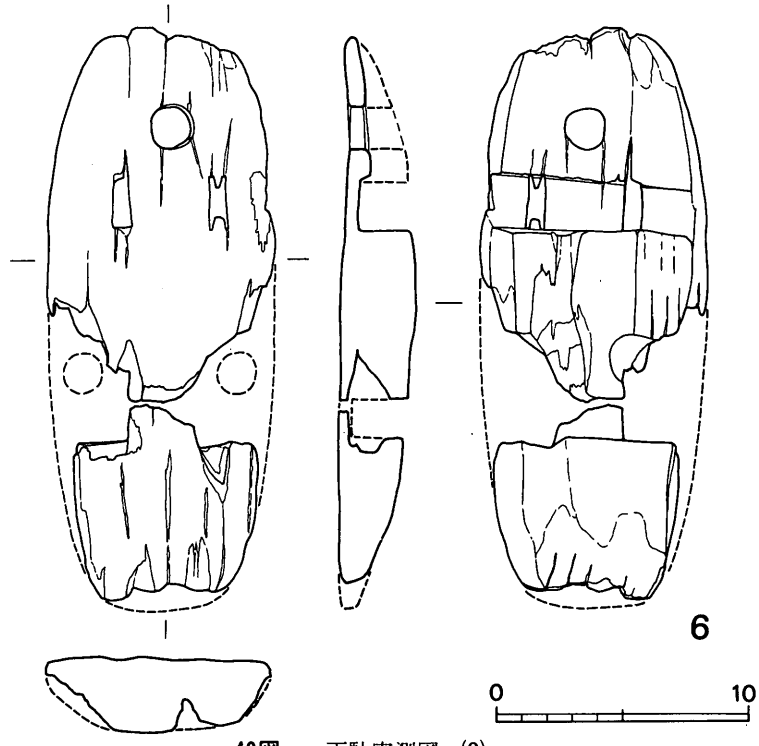
38図　下駄実測図 (1)



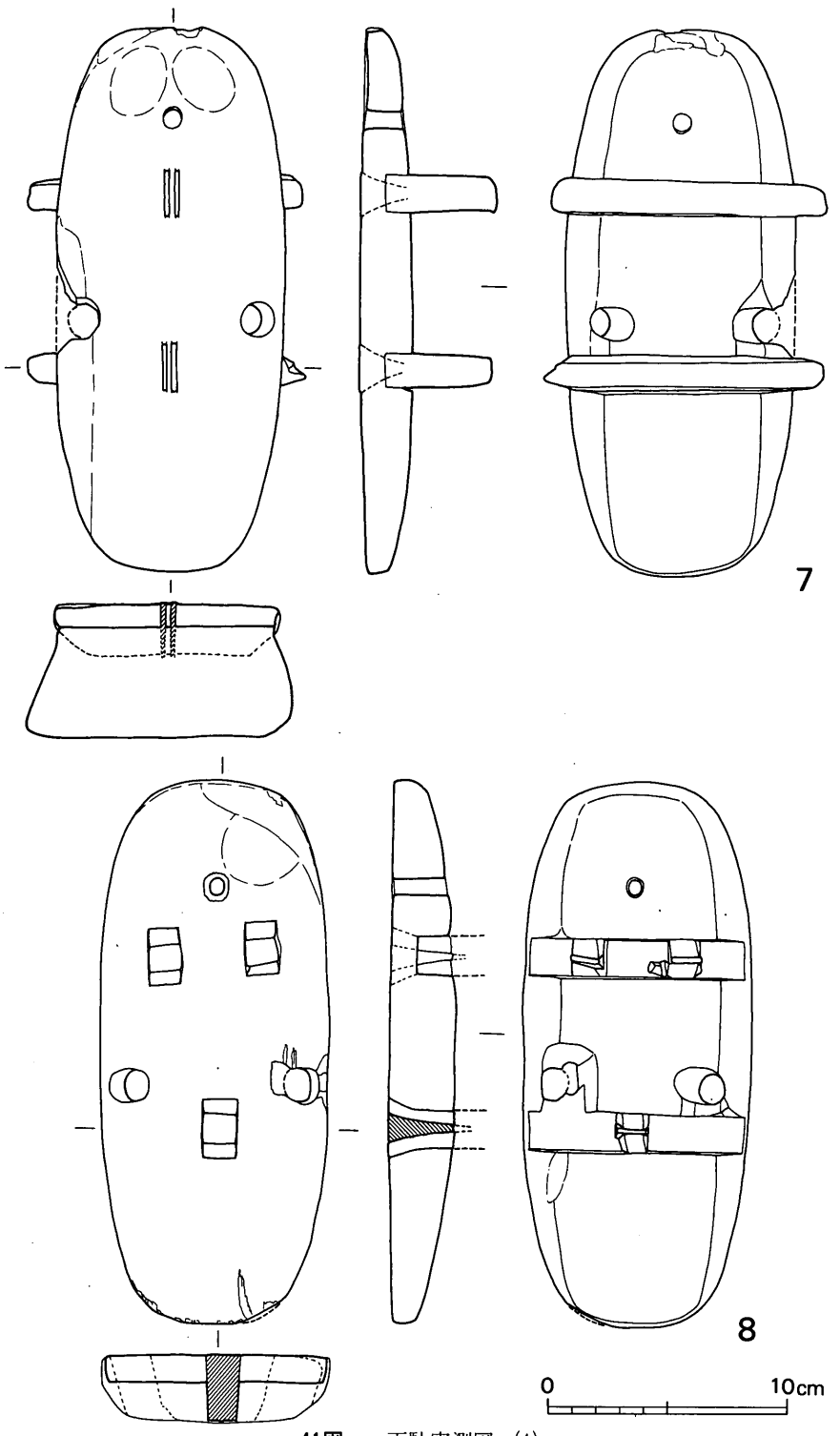


39図　下駄実測図 (2)

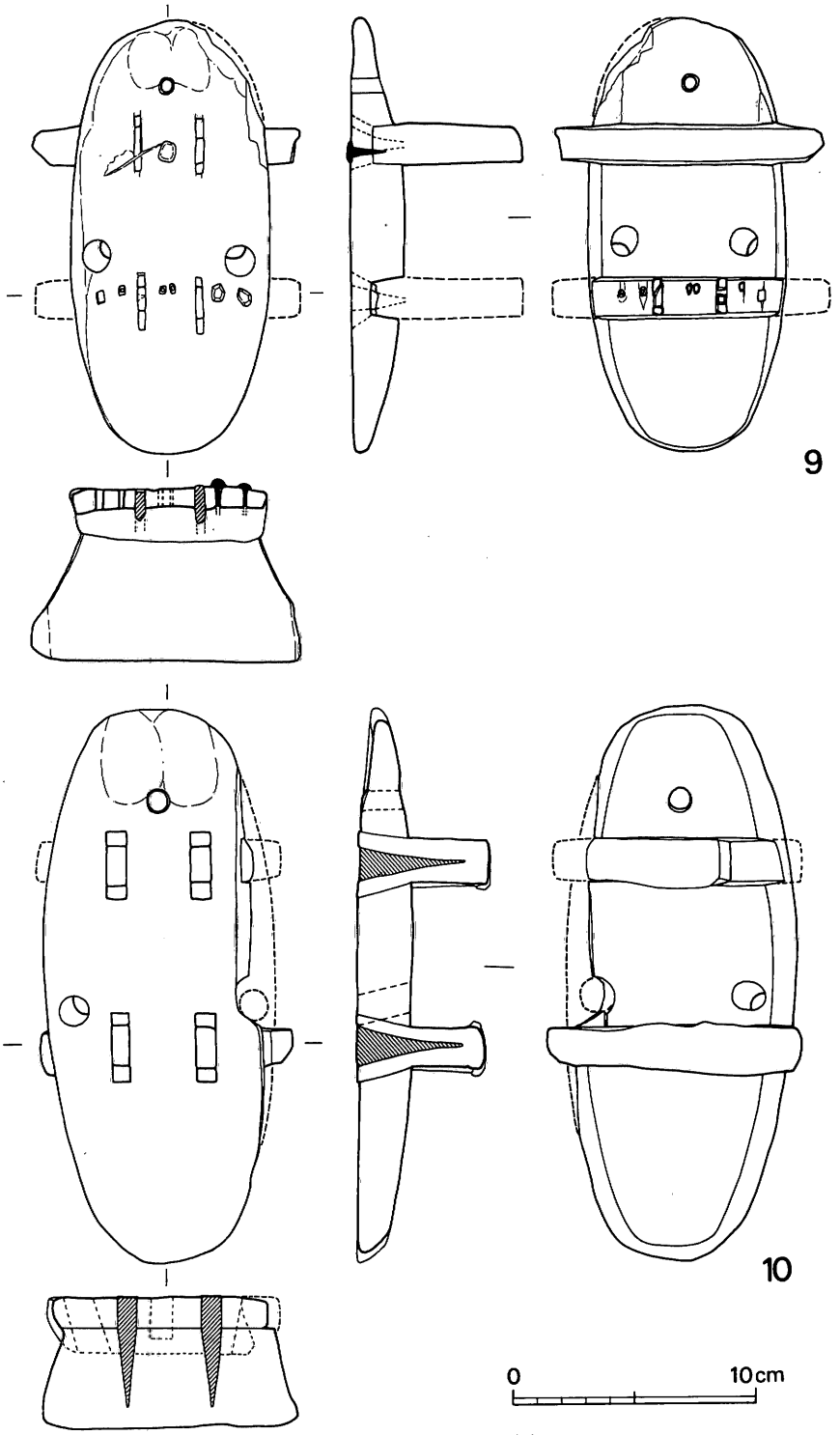




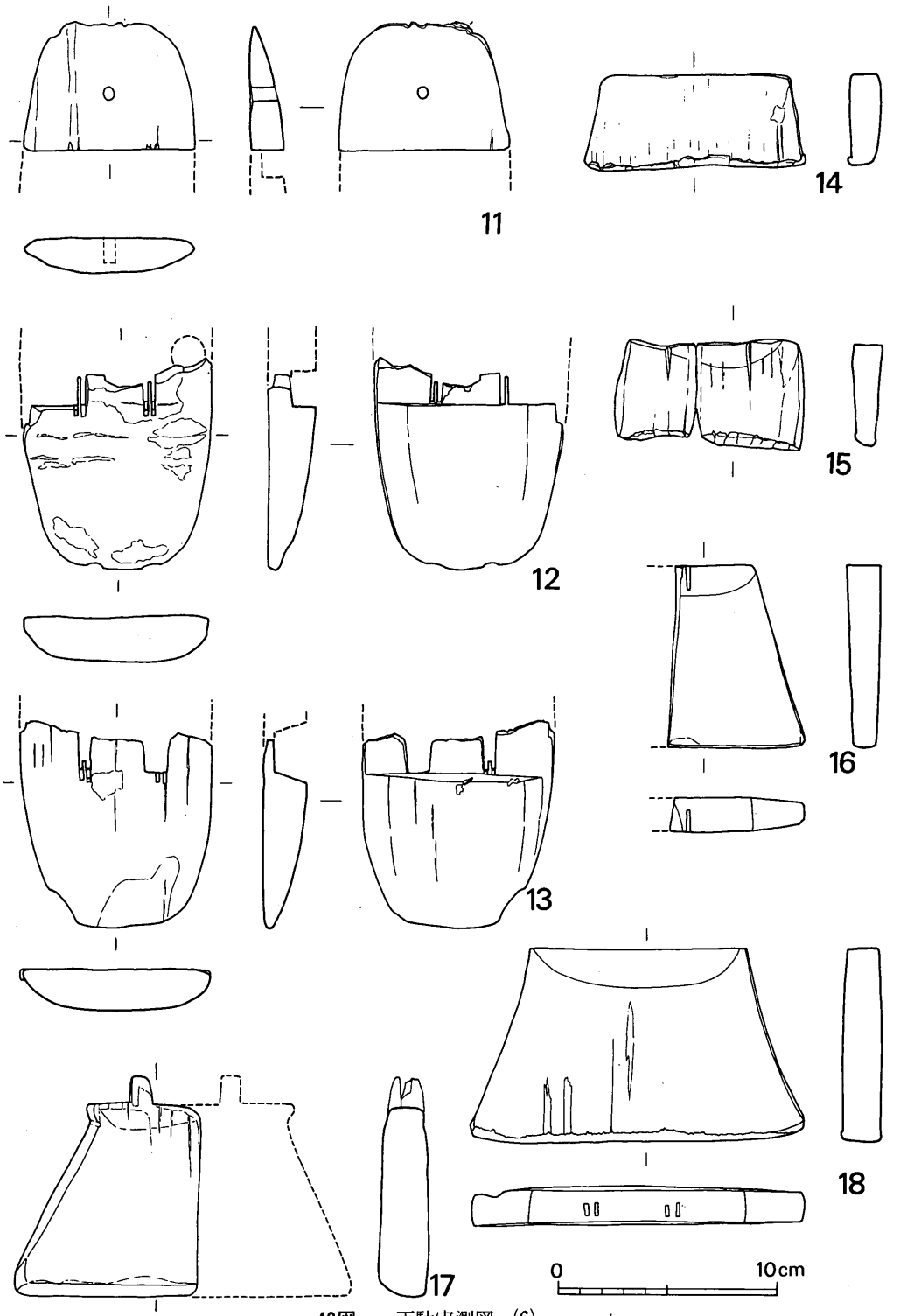
40図　下駄実測図 (3)



41図　下駄実測図 (4)



42図　下駄実測図 (5)



43図　下駄実測図 (6)

21. 履物状木製品（44図・図版31）

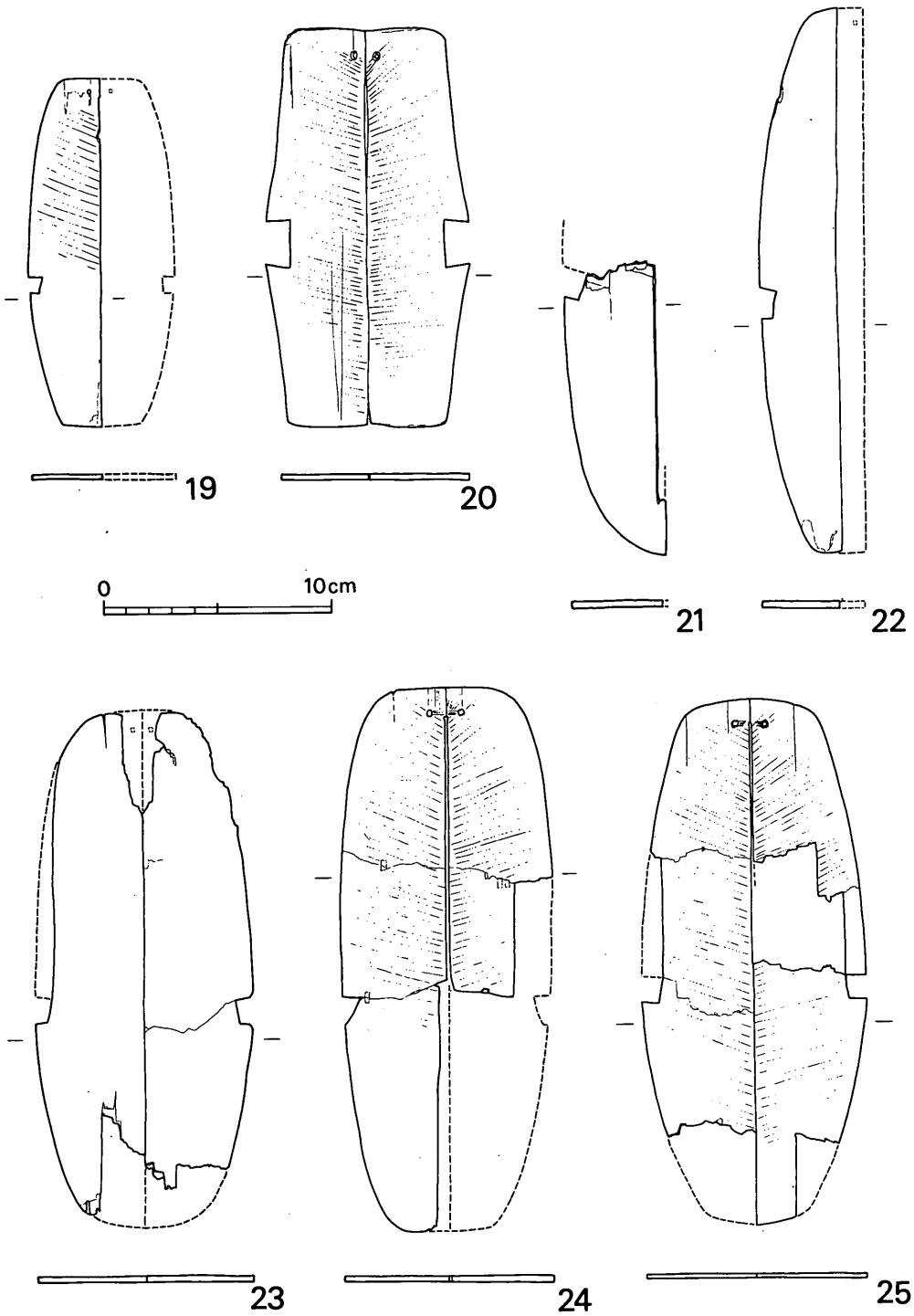
図示したものは7点であるが，他にも小片が多数出土している。形状は長円形の下駄に似るものと，方形をなすものとがあるが，ほとんどが前者に属する。左右対称の形をした薄板2枚で一対をなすもので，弧状外縁中央よりやや下位に「コ」の切り込みをつくる。また短辺の一方の直線部側より1～2㎜の孔を有する。**19**は小型の片方のみであり，**20**も小型の方形をなし，長辺部両側よりも中央部よりの方がやや薄くなる。切り込み大きく1.1×2.1㎝をはかる。**21**も片方のみで，切り込みより上部欠損。**23**～**25**は全容がわかるもので，**24**は孔のある先端部直線側において上端から1.25㎜下位に切り込みがあり，先端部を合わせると2㎜程度の隙間があく。他端は欠損しているためこれがどこまで続くものかは不明。また双孔間にはひもづれ状の痕跡がみられ中央部付近には2×5㎜ほどの凹みが左右両側に2ケ所ずつ計4ケ所に見られる。切り込み3角形をなす。**24**も**25**と同様にひもづれ状の痕跡がみられ，隙間があく。中央部は薄くなる。なお，**19**・**20**・**24**・**25**の器面には暗文風のこすった痕跡が斜めに走る。

草戸千軒町遺跡でも同様のものが出土しており，履物に似た形をしているところから履物状木製品の名称がつけられ，草履状の履物の一種ではないかと考えられているが，当遺跡出土のものには草戸千軒町遺跡のものにみられるような繊維質の付着したものは出土していない。他にはあまり出土例を聞かず，更に多くの類例をまちたい。

14表. 履 物 状 木 製 品 計 測 表

出土地点	全　長	幅	厚　さ	実測図番号	備　考
SE506	15.0	(6.4)	0.2	19	片方のみ
SE516	17.2	8.9	0.3	20	方　形
SE516	12.5+α	(8.6)	0.25	21	片方のみ
SD501	23.4	(9～10)	0.33	22	片方のみ
SK501	(22.4)	(9.5)	0.3	23	
SE512	23.5	(9.3)	0.26～0.3	24	
不明井戸	(22.7)	(9.9)	0.22	25	

（　）は推定



44図　履物状木製品実測図

15表　井戸一覧表

井戸番号	掘方規模	掘方深度	上段形態	曲物	桶側			曲物		出土遺物
					長(cm)	巾(cm)	枚数	高	内径	
	(m)	(m)			(cm)	(cm)		(cm)	(cm)	
SE501	1.31×1.22	0.73	桶側	2段	30.5+α	9.6	11+α	上 33.7 下 27.5	53 33.5	土師器(Ⅱ－3類)，須恵器，陶器 下駄，箸，墨書木札
SE502	1.19×1.11	0.92	桶側		113.2+α	10.	20			土師器，白磁，須恵器 墨書礫，石鍋，
SE503	1.25×1.35	0.92	桶側	2段	51.2+α	8.7	33	上 22 下 24	45 41	土師器(Ⅱ－4類)，櫛，平井瓦
SE504	1.96	0.81	縦板方形	3段	(高さ 45 内径 58)			上 23.6 中 17 下 9.5	35 33.5 35.5	土師器(Ⅱ－3類)
SE505	0.84×1.13	0.63								土師器(Ⅱ－3類)，須恵器，青磁， 板材，下駄(5)，木製椀
SE506	1.41×1.98	0.77	桶側		上 60+α 下 49+α	11.1 10.8	19 16			土師器(Ⅱ－3・4類)，青磁，火舎，瓦 下駄，履物状木製品，
SE507	1.6×1.5									竹タガ，土師器，須恵器 石鍋，滑石製品，
SE508	1.9	0.83	縦板方形		(高さ 45 内径 70)					土師器，須恵器，青磁，瓦
SE509	1.57	0.9	桶側		上 下64.8+α	10.3	14 21			土師器(Ⅱ－3類)，青磁， 木製品，常滑陶器，
SE510	0.9	0.84	桶側	1段	61+α	12.	17	26.5	47	土師器，青磁，瓦器 板材
SE511	0.96×0.84	0.96								竹タガ，土師器
SE512	1.28	0.76	桶側		67.7+α	12.1	17			土師器(Ⅱ－2・3・4類)，青磁，釘 木偶，下駄，履物状木製品，
SE513	1.52	0.9	桶側		52.7	9.9	15			土師器，下駄，木製品，
SE514	1.50×1.31	0.97	桶側		46.5	11.6	15			土師器(Ⅱ－3類)，須恵器，青磁，陶器
SE515	0.69	0.5								竹タガ
SE516	2.7×2.3	0.75								桶板片，土師器(Ⅱ－5類)，須恵器 木製品
SE517	1.74	0.7								竹タガ，土師器，須恵器， 白磁，緑釉

16表　銅銭一覧表

出土銅銭	時　代	初鋳年	地　区	層　位	備　考	拓本写真番号	
寛永通宝	江戸時代	1636	L	2層		1	
祥符元宝	北宋真宗	1008	L	上げ土		2	
宣和通宝	北宋徽宗	1111	L	2層		3	
景徳元宝	北宋真宗	1004	L	2層		4	
祥符通宝	北宋真宗	1008	LE6	2層		5	
至道元宝	北宋太宗	995	LF3	3層下部		6	
熙寧　宝	北宋神宗	1068	LB14	4層	熙寧元宝	7	
元祐通宝	北宋哲宗	1086	LB11	4層		8	
元祐通宝	北宋哲宗	1086	LD5	4層下土坑		9	
皇宋通宝	北宋仁宗	1039	LF3	SD502溝上面		10	
熙寧元宝	北宋神宗	1068	LB5	4層	土器と一括	11	
大観通宝	北宋徽宗	1107	LB4	4層	土器と一括	12	
元			LD7	5層		13	
熙寧元宝	北宋神宗	1068	LB9	5層		14	
元豊通宝	北宋神宗	1078	LD10	5層		15	
元豊通宝	北宋神宗	1078	LC12	5層		16	
宣和通宝	北宋徽宗	1111	LD10	5層		17	
元豊通宝	北宋神宗	1078	LD7	5層		18	
洪武通宝	明 大 祖	1368	LC11	5層		19	
天聖元宝	北宋仁宗	1023	LB9	5層		20	
聖宋元宝	北宋徽宗	1101	LF4	柱穴内上部		21	
政和通宝	北宋徽宗	1111	LB5	SK501土坑		22	
咸平元宝	北宋真宗	998	LB5	SK501土坑		23	
景徳元宝	北宋真宗	1004	トレンチ	東西溝		24	

17表. 下駄一覧表

出土地点	構造	台部 (cm)				歯部 (cm)			備考	実測図番号
		長さ	幅	厚	器高	前歯幅	後歯幅	高さ		
SE505	連歯	14.05	7.5	1.1	1.9	1.75	1.75		台木幅より歯の幅の方が広い(小児用)	1
SE512	連歯	21.0	10.0	1.5	2.8	2.9	3.1		歯は台形	2
SE505	差歯	22.65	9.5	2.0		(1.5)	(1.6)			3
SE506	差歯	(21.3)	(10)	(2.55)		(2.0)	(2.1)		井桁上端にくっついて出土	4
SD501	差歯	21.6	9.9	3.1						5
SD502	差歯	(23)	9.0	3.0		(1.8)	(1.5)			6
SE505	差歯	22.5	9.6	2.2	5.7	1.6	1.45		歯は台形	7
SE505	差歯	22.5	9.5	2.25		(1.6)	(1.6)			8
SE513	差歯	17.6	8.15	2.25	7.0	1.65	1.65		釘を歯に打ち込んでいる(小児用)	9
SE501	差歯	22.6	(9.5)	2.3	5.4	1.95	1.7		歯は銀杏形 掘方切口面より出土	10
SE505	差歯		7.7+α	1.55+α					前歯より前の部分のみ	11
SE505	差歯		8.7+α	2.2					後歯より後の部分のみ	12
SE512	差歯		8.8	1.9					後歯より後の部分のみ	13
SE505	差歯					1.4		3.1	銀杏形	14
SD502	差歯					1.3		5.0	台形	15
SD501	差歯					1.5		8.2	台形	16
LF2	露卯差歯					2.3		9.95	台形	17
SK501	差歯					1.8		8.7	銀杏形	18
SE502	差歯					1.3		8.3	銀杏形	
SD501	差歯					1.2		5.0	台形	

( ) 内は推定値

18表　土坑一覧表

P番号	地　区	遺構番号	規　模	深　さ	出　土　遺　物
1	LB4・5	SK501	2.35× 1.7(m)	37(cm)	土師器（Ⅱ－4類）多量，青磁，碁盤状木製品，小型曲物底板，その他木製品
2	LB3	SK502	0.82	25	漆片（木葉模様）
3	LE6	SK503	1.58×1.08	21	土師器（Ⅱ－2類）須恵器，白磁，青磁陶器
4	LD6	SK504	1.92× 1.0	14.5	土師器（糸切り），青磁，白磁（四耳壺），陶器，片口
5	LD6	SK505	4.0×3.42	24	土師器（糸切り）青磁，白磁，青白磁，片口（須恵），須恵器杯
6	LD4	SK506	3.16×2.86	15	土師器（糸切り），青磁，白磁，陶器，青白磁，滑石製品，石鍋，片口（須恵）
7	LE4	SK507	1.0× 0.7	17	土師器（糸切り），須恵器杯，石鍋
8	LD2	SK508	2.7+α	18	土師器，須恵器，青磁，白磁（四耳壺），石鍋片
9					SK513と同一
10	LE4	SK510	1.9× 1.1	10	土師器（糸切り），青磁，白磁，陶器片口（須恵）瓦器，擂鉢
11	LE4	SK511	1.4×1.06	20	陶器，鉱滓，
12	LE7	SE516		75	
13	LC5	SK513	1.58×1.29	16	土師器（Ⅱ－4類）青磁，陶器，片口，土製品，
14	LC6	SK514	2.8× 2.6	72	土師器（糸切り）青磁，白磁，陶器，片口（須恵）下部より獣骨
15	LD4	SK515	1.5×？	20	
16					不明
17	LD6	SK517	2.13× 1.0	17	土師器，青磁
18	LD6	SK518	1.13×1.09	20	
19	LC7	SK519	1.76×1.22	16	
20	LD7	SK520	2.11× 0.8	23	土師器（Ⅱ－2類），るつぼ，甕，杯瓦器椀，青磁，白磁，陶器
21	LB6				SE517 井戸
22	LB7				SE508 井戸
23	LD7				SE506 井戸
24	LD8	SK524	1.55×0.64	18	土師器（糸切り）土師甕，須恵器，青磁
25	LB8				SE509 井戸
26	LB7	SK526	0.98× 0.7	10	
27	LC3	SK527	1.26	24	土師器（高台付）青磁，片口（須恵）
28					欠番
29	LB11	SK529	2.53×1.73	15	土師器（糸切り，ヘラ切り）須恵器青磁，片口，黒色土器
30	LC11	SK530	2.38× 1.3	20	土師器，土鍋（口縁に縄目）須恵器，青磁，陶器，
31	LD10				SE514 井戸
32	LB12	SK532	2.27×1.27	28	土師器（ヘラ切り，糸切り）青磁，瓦
33	LF10	SK533	2.7× 2.5	20	土師器（糸切り）青磁，青白磁
34	LB10	SK534	1.94	50	土師器（糸切り，ヘラ切り）白磁，黒色土器，瓦
35	LB11・12	SK535	4.15×0.76	10	土師器（糸切り）青磁，白磁黒色土器
36	LB12	SK536	1.47	38	土師器（糸切り），片口（須恵）
37	LD9	SK537	1.79	71	
38	LE9	SK538	1.71	9	土師器（Ⅱ－3類），須恵胴部，青磁白磁（四耳壺）陶器，銅製品，石鍋，瓦器，
39	LB12	SK539	0.98×0.63	21	土師器（糸切り）須恵，白磁
40	LC9	SK540	1.04×0.88	19	土師器（糸切り），青磁，片口（須恵）
41	LC10	SK541	0.87× 0.7	22	石鍋，片口（須恵）
42	LB9	SK542	1.46×0.75	24	
43	LB9	SK543	0.96×0.78	38	土師器（糸切り）青磁，白磁，片口（須恵）焼土，木炭
44	LC9	SK544	0.7×0.69	23	土師器（糸切り），青磁
45	LD10	SK545	1.69× 1.3	38	土師器（糸切り），須恵，青磁，瓦
46	LC3	SK546	2.2	50	土師器甕，須恵器壺，瓦

七、おわりに

今回の報告は，第５次調査の分だけについてであり，他の調査次のものについては未報告であるので，これをもって御笠川南条坊遺跡の全貌をうかがうことはできない。最終的な判断はすべての整理・報告がなされてから出されるべきであり，今回の報告は今後の整理・報告のための一応の目安として，出来る限り基本的な資料を集成することに努めた。

以下，今回の調査・整理を通じて気づいた問題点や成果などを２・３あげてまとめとする。

大宰府史跡については政庁跡を中心とする古代大宰府と，それ以降の中世大宰府とに考えられるが，今回の調査は出土遺物からみて中世に属するものがほとんどで，これまで白紙の状態に近かった中世大宰府の解明に手懸りを与えるものである。しかし，柱穴，土坑，井戸など多数の遺構が検出されているにもかかわらず，それら生活遺構相互の関連性と，その主体となるべき人々の社会的実態などについては不明な点が多く，より広い観点からの観察が必要である。また，農道に沿って検出された南北溝は観世音寺の中軸線より東へほぼ１町の距離にあり，大宰府条坊との関連が注目される。

出土遺物の主体をなす土師器についていえば，従来未開拓の分野であった中世土師器の編年についての分類が試みられ，一応の流れがとらえられたが更に確実な資料にあたることが必要であろう。また中国輸入陶磁器も夥しい量にのぼり，宋銭の出土と考え併せると改めて日宋交易の盛行がうかがわれるものである。

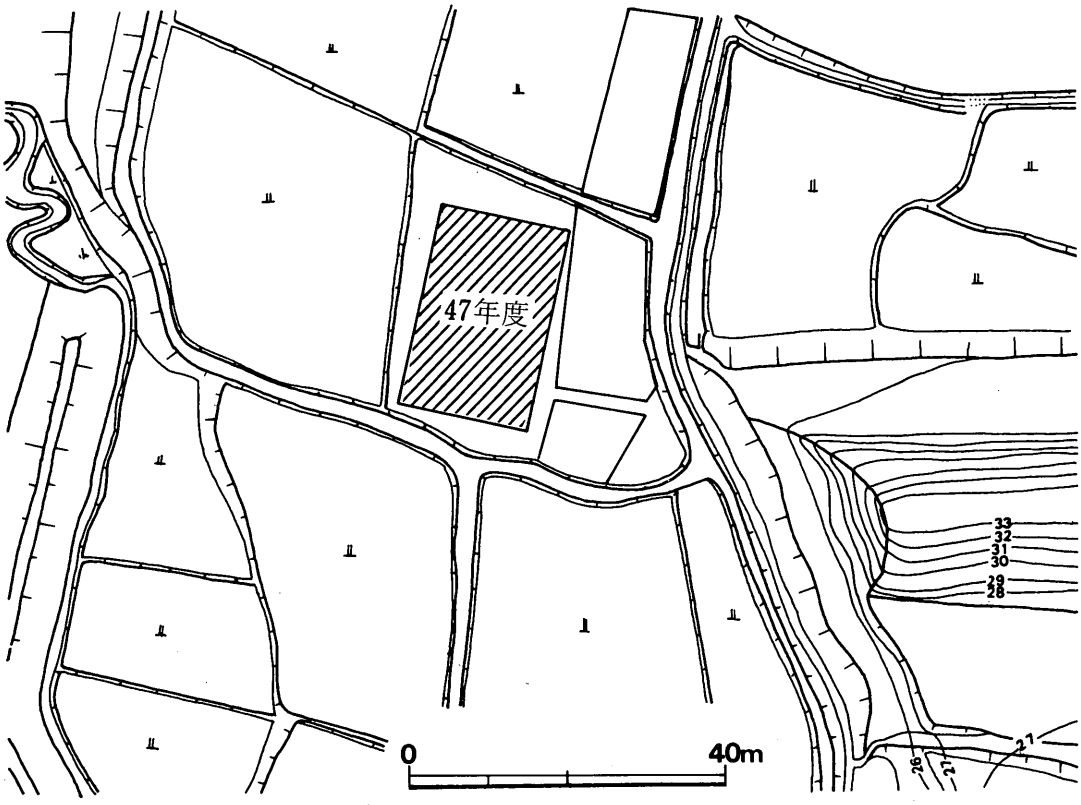
以上，第５次調査に関して気づいた問題点などを２・３あげてみたが，今回報告した資料を基礎に，検討すべき問題点を今後さらに解明してゆきたいと考えている。

付　水城地区（水城跡）の調査

遺跡の位置　水城は四王寺山から延びる一支脈である丸山の麓から吉松山までの東西約10町間に築堤されたものである。調査地域は御笠川に接した地点で，昭和46年度調査を実施した地区の西側で，川の東側にあたる地区である。調査面積は約1,000㎡である。

検出遺構　調査区に15m×25mのトレンチを設定し発掘調査を行なった。湧水と砂の陥落の為調査は困難であった。目的は水城跡に係る水門跡等の発見にあったが，調査の結果は昭和46年度と同様の結果であった。多量の河砂の堆積が認められ，地表下約7mで地山と考えられる地層に達する。この地層の上面は酸化鉄によって硬くしまっている。

調査の目的とした遺構の発見はなく，奈良・平安期以後の遺構の発見もなかった。発見された遺物は，弥生時代中・後期の土器片，古墳時代および奈良・平安期の須恵器片と土師器片，奈良・平安期の瓦片等があるが，川の流れによって運ばれてきたものであるため層位的には明らかにいえない。調査の結果をふまえれば，遺構の遺存が考えられる地区は，水城の堤防に非常に近い地区すなわち堤防の裾部周辺が考えられる。

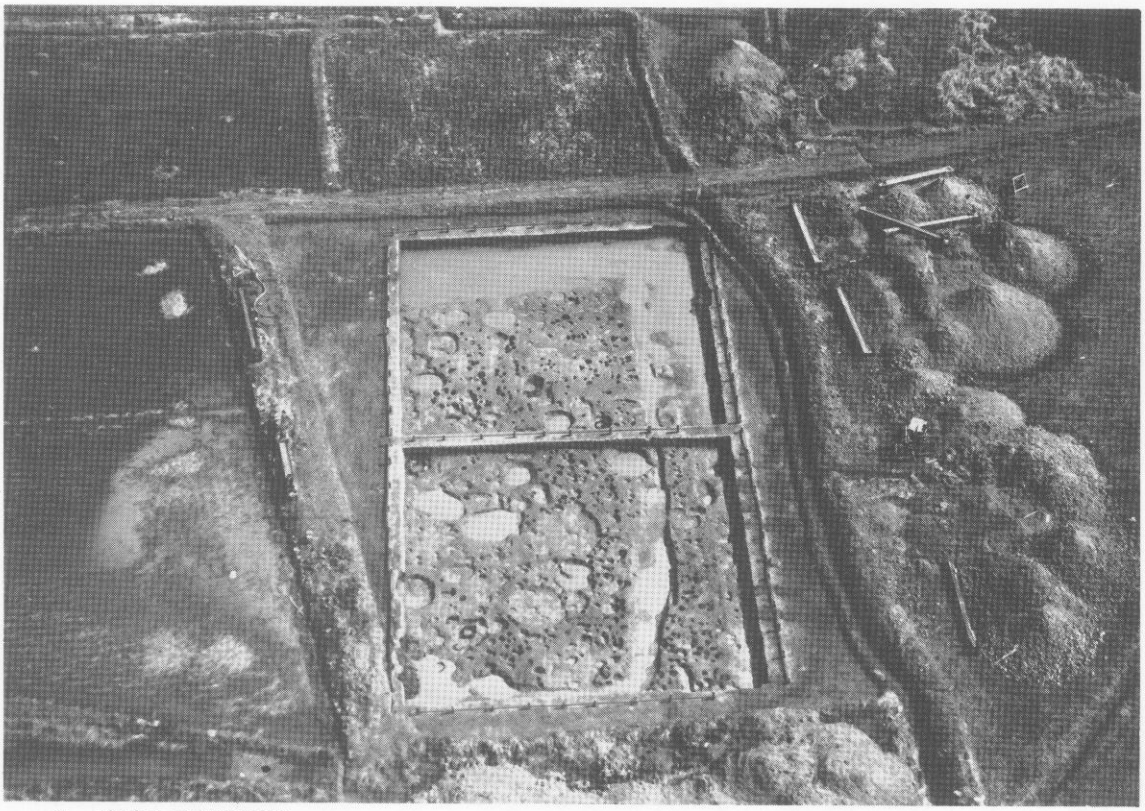


45図　水城跡発掘調査地点

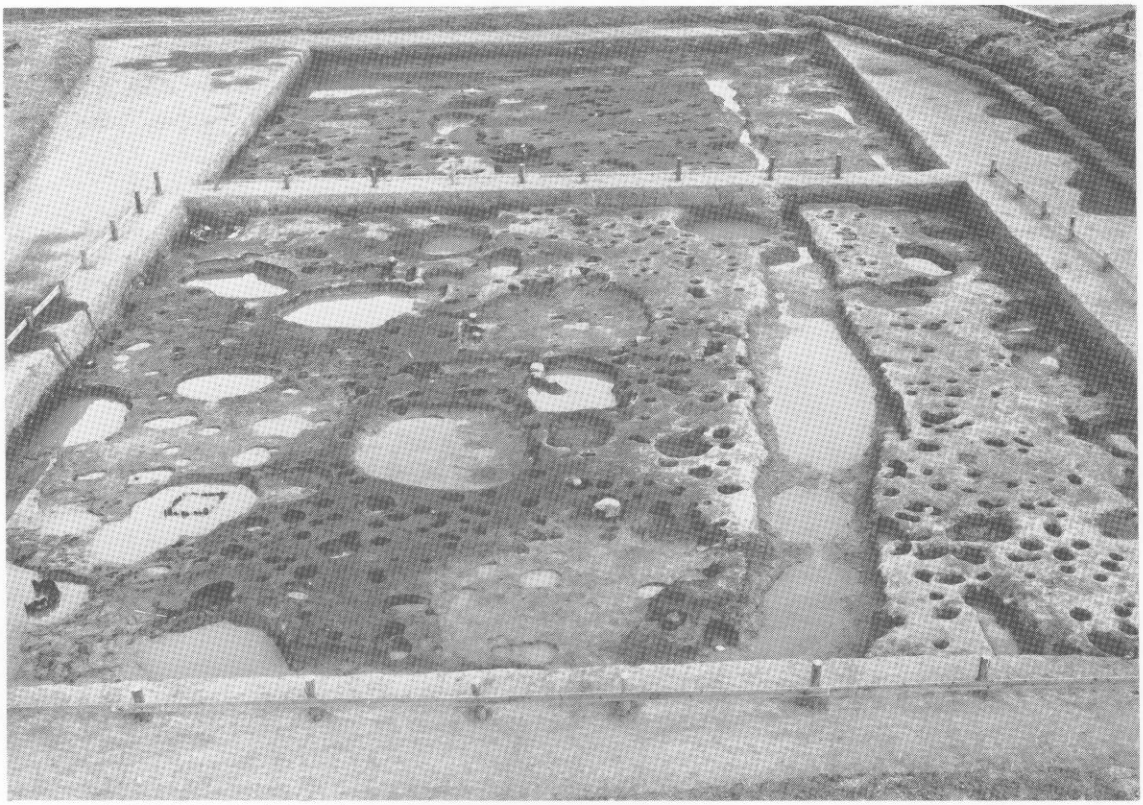
図　版



1　遺跡付近航空写真（東から）



2　遺跡全景航空写真



1　上層遺構全景（西から）



2　上層遺構全景（東から）



1　東区下層遺構全景（南から）



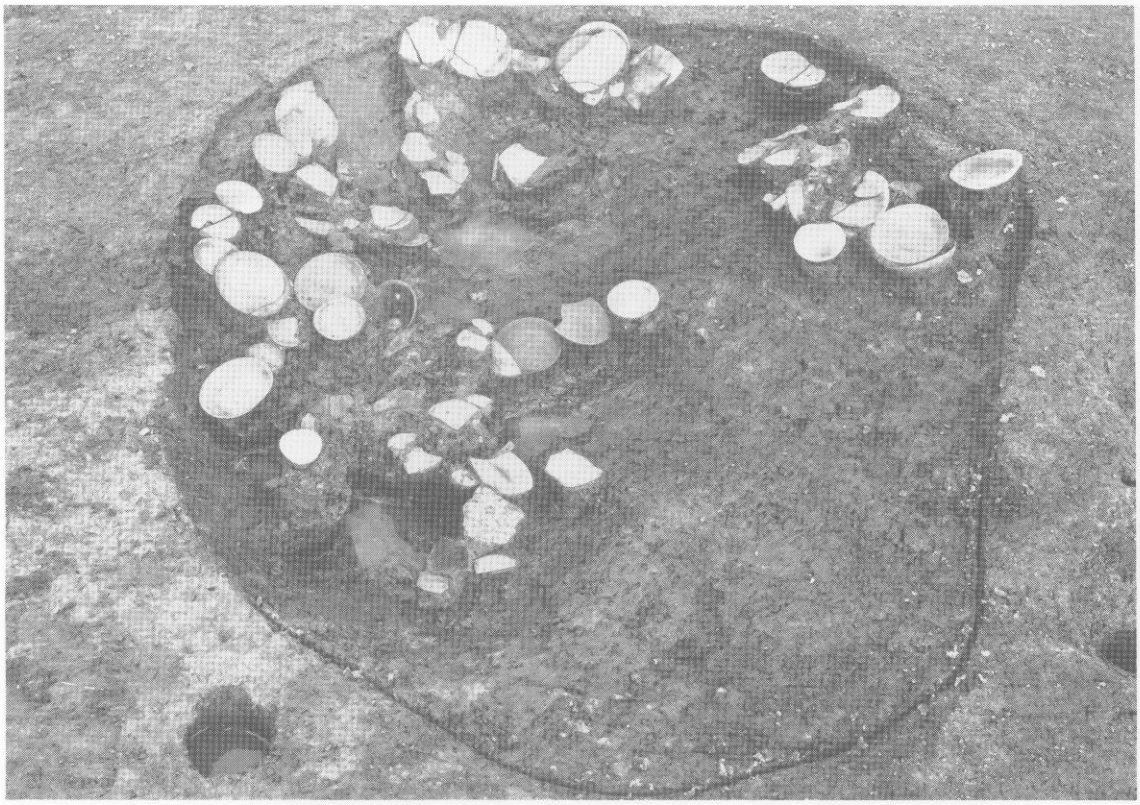
2　ＳＤ501溝南壁土層（北から）



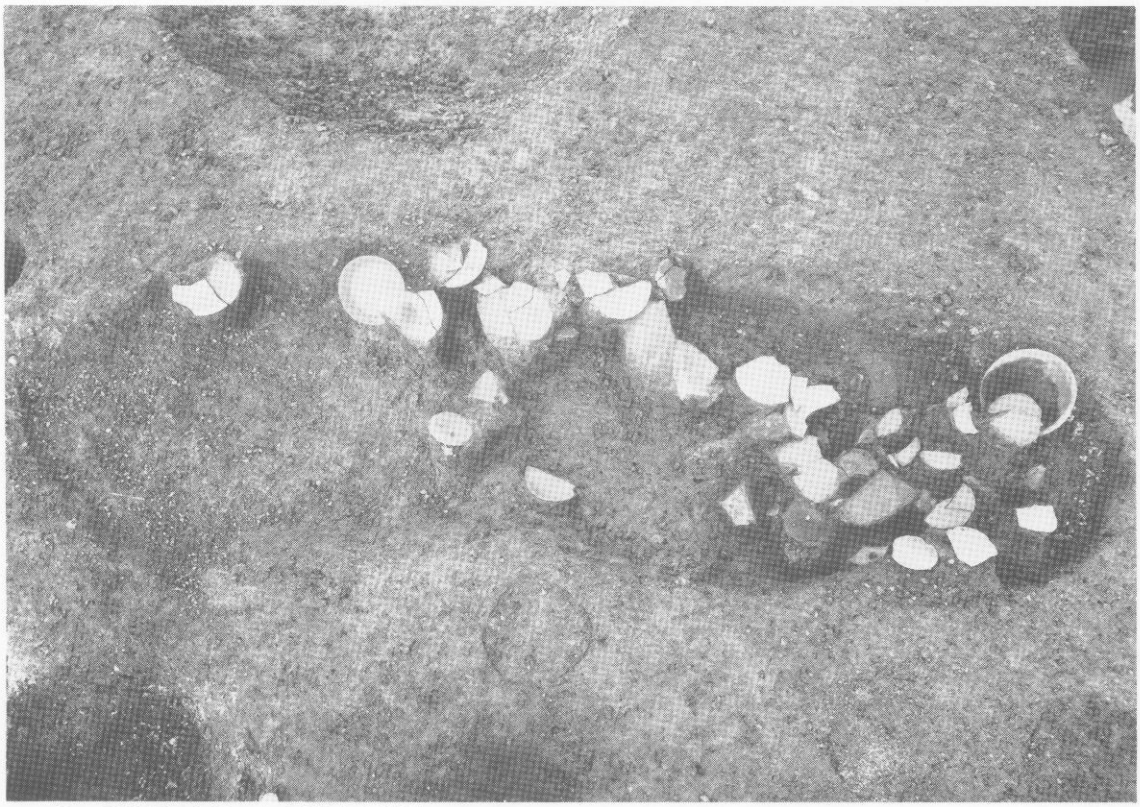
1　建物遺構（東から）



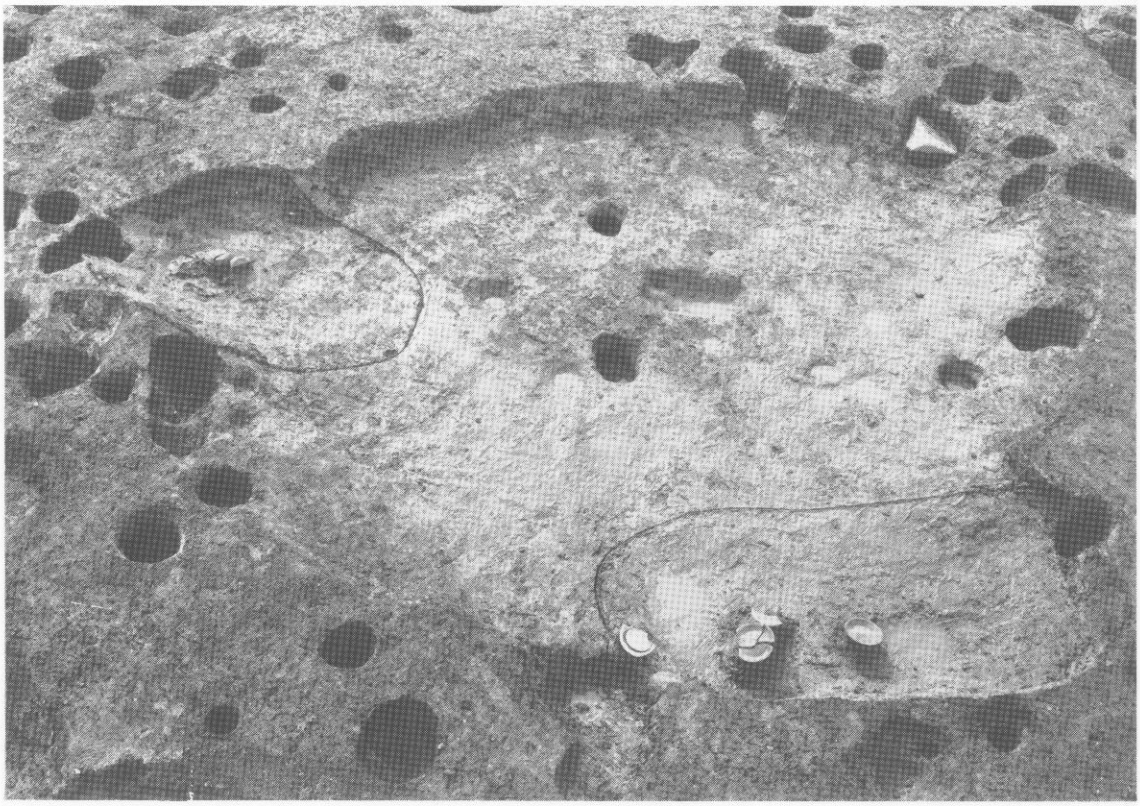
2　SK501土坑土師器出土状態



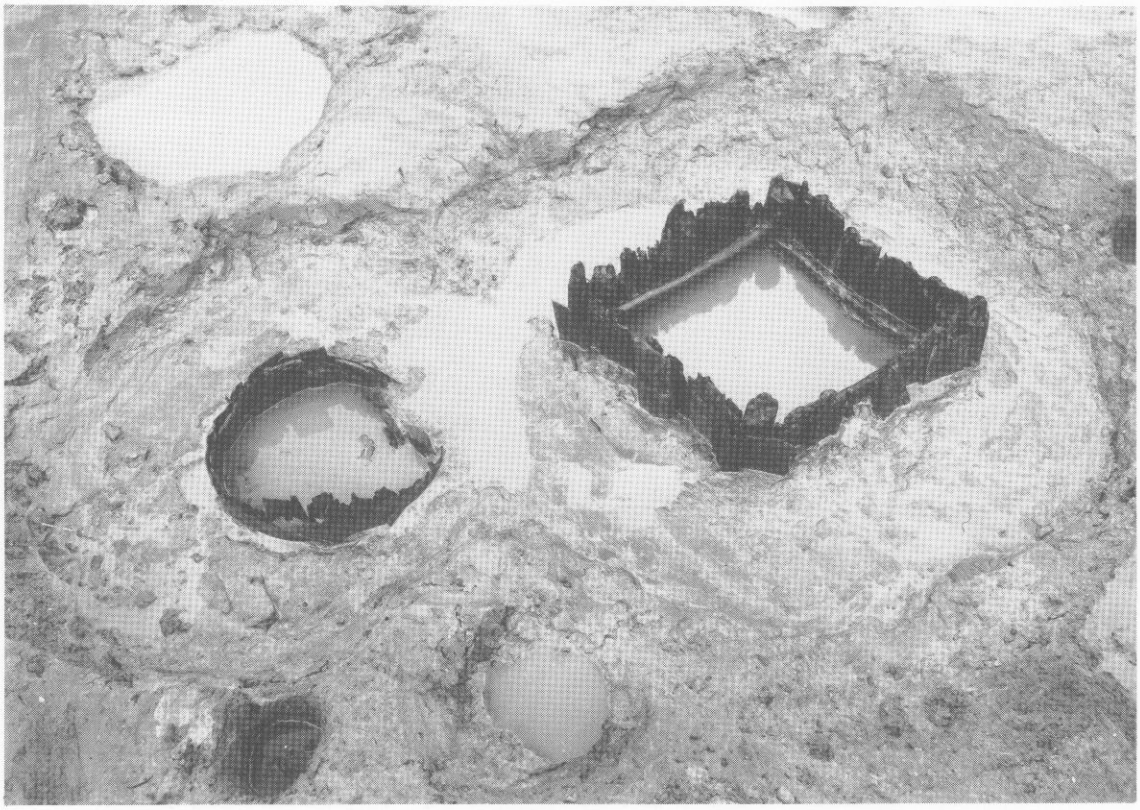
1　SK513土坑　土師器出土状態



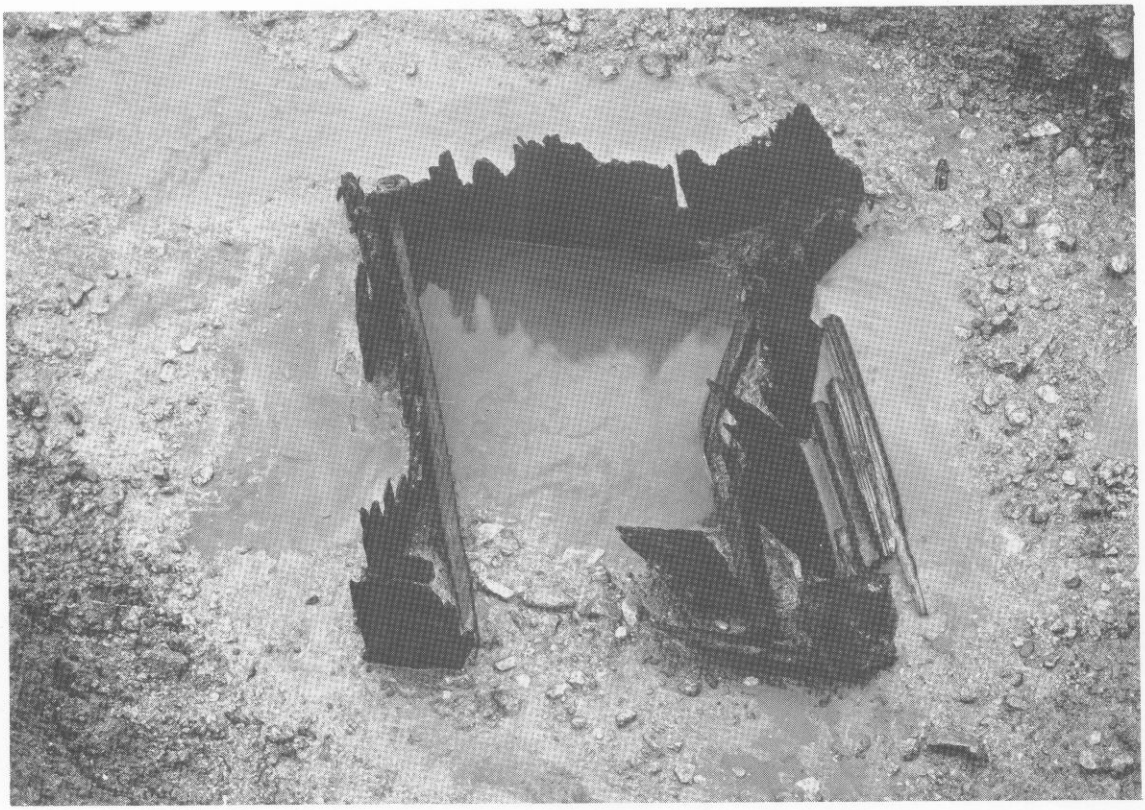
2　SK520土坑　土師器出土状態



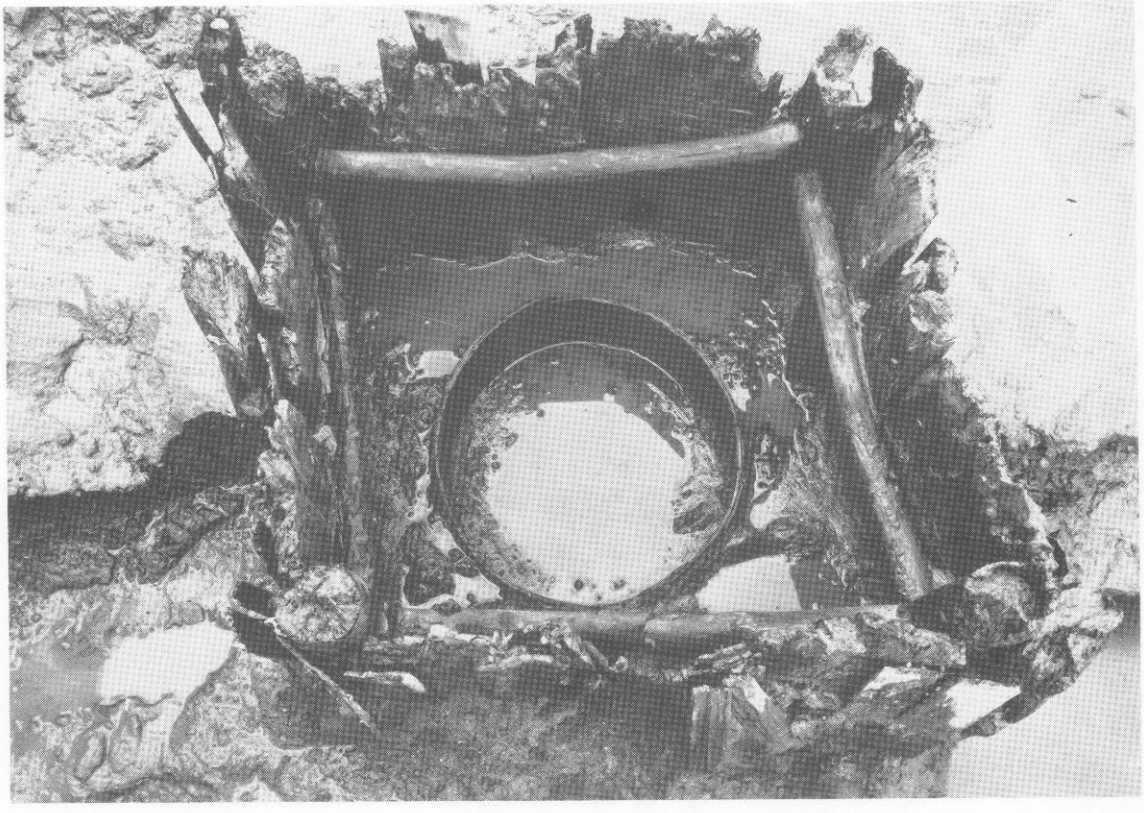
1　土坑出土状態（左）SK504　（中）SK505　（右）SK503



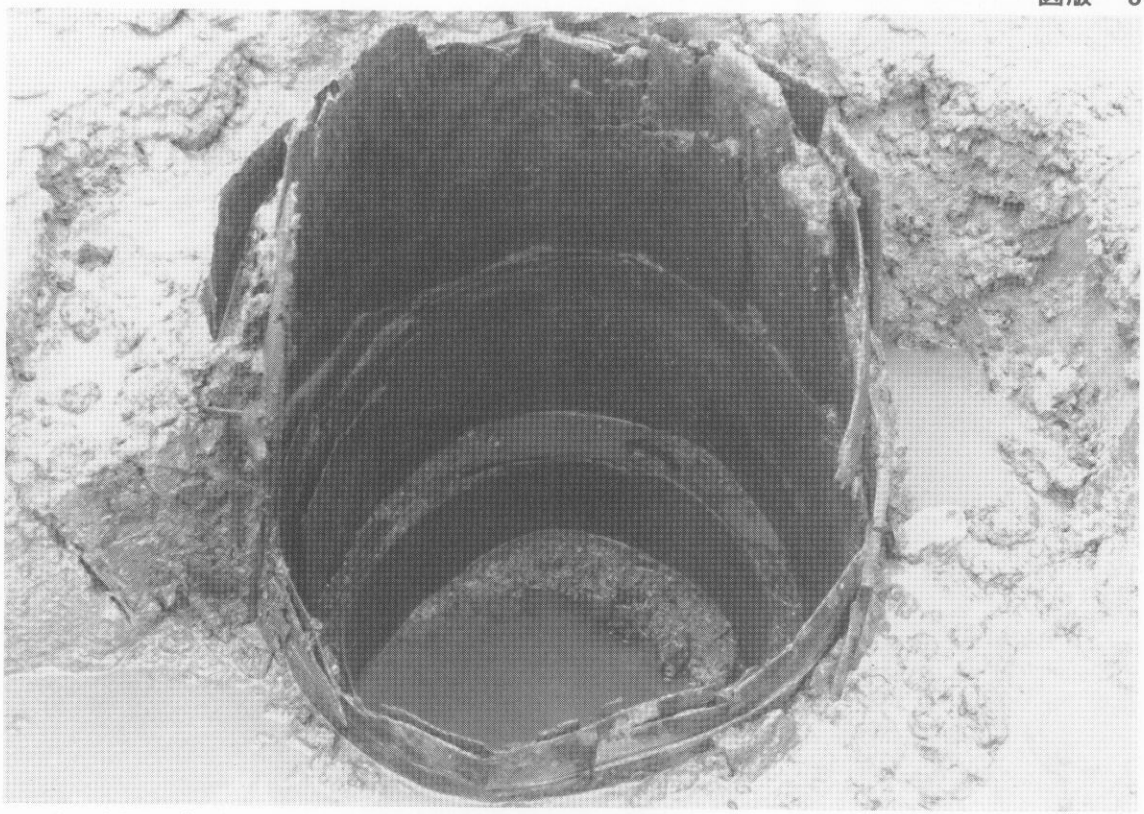
2　井戸出土状態（左）SE503　（右）SE504



1　SE508井戸



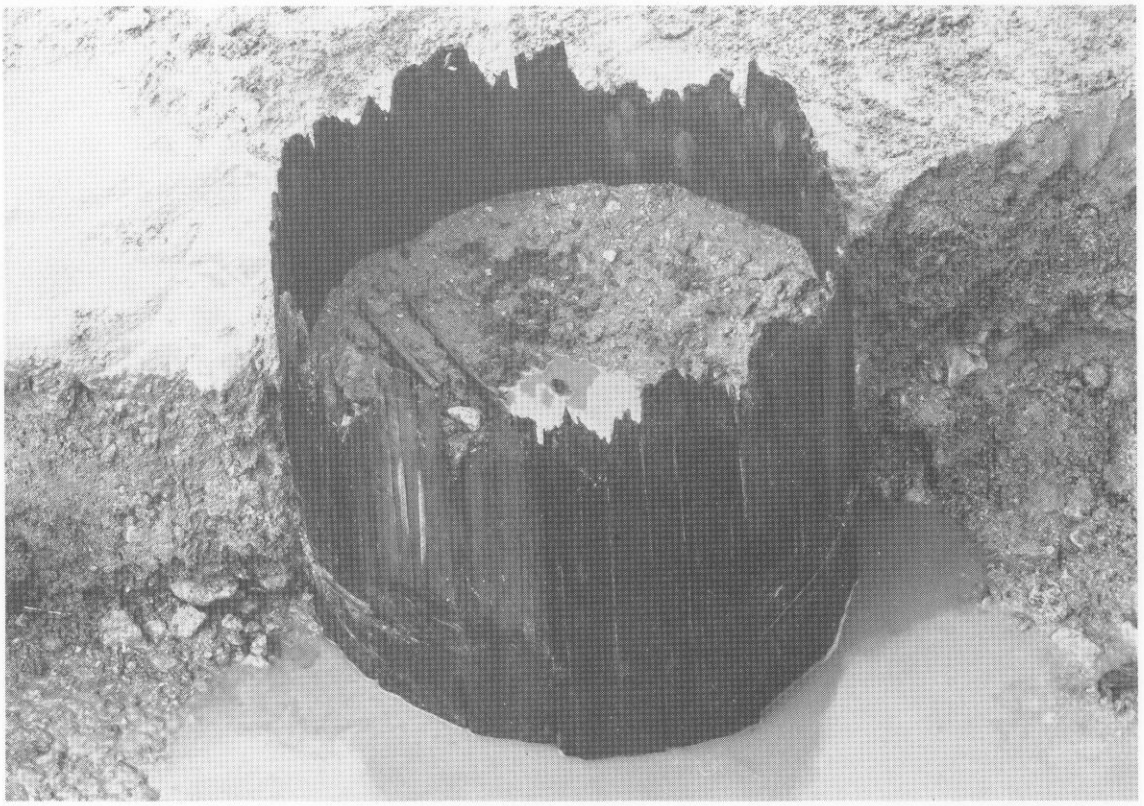
2　SE504井戸



1　SE503井戸



2　SE501井戸



1　SE510井戸



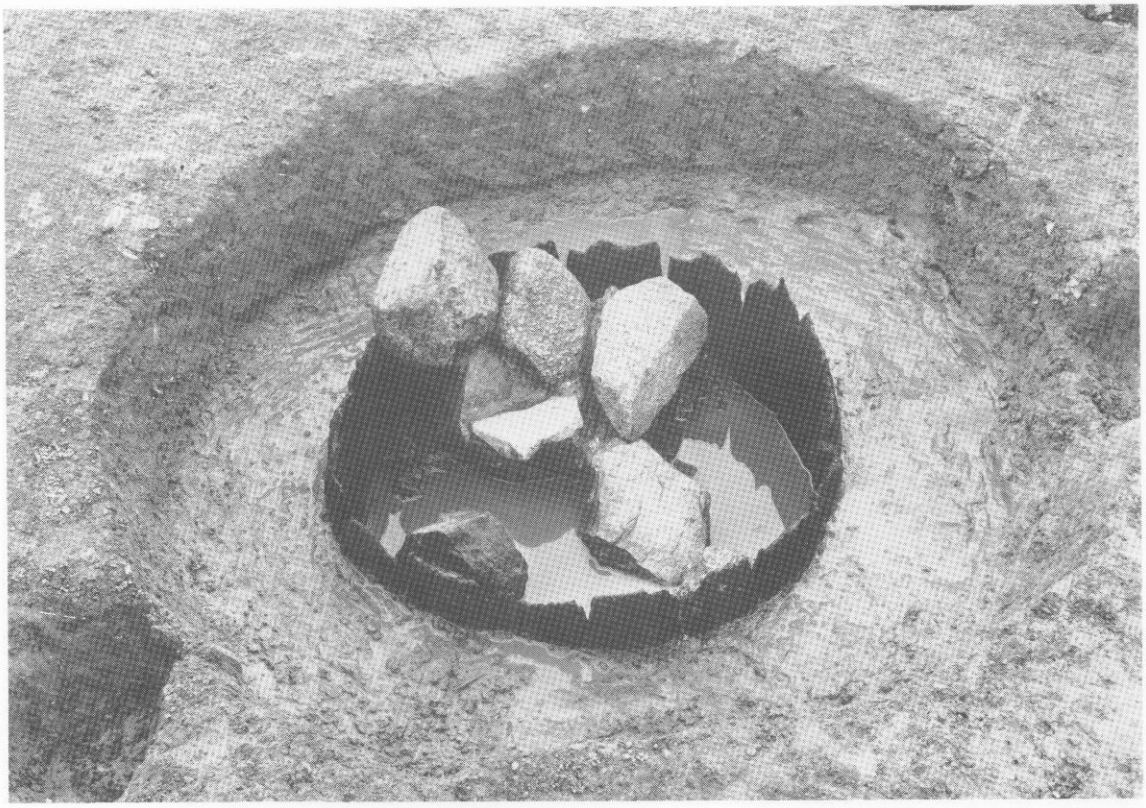
2　SE506井戸



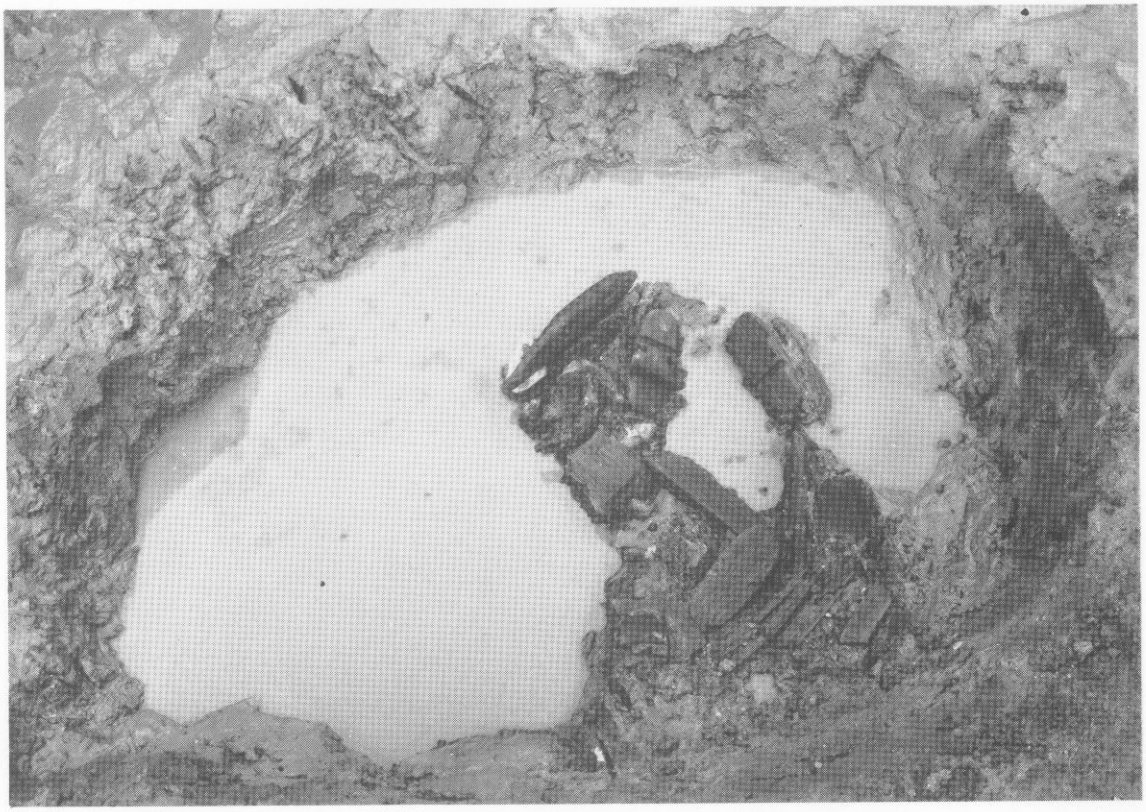
1　SE509井戸



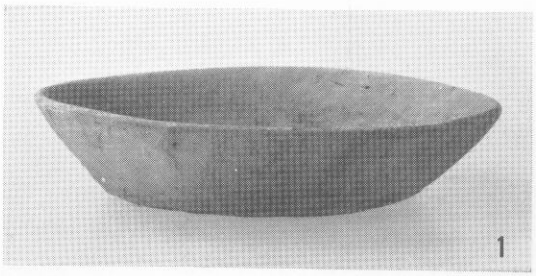
2　SE514井戸

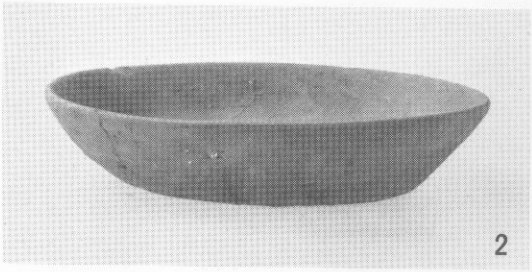


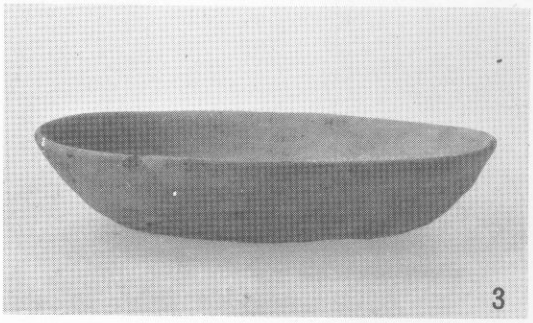
1　S E512井戸

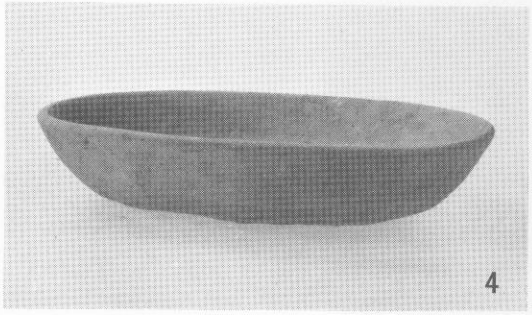


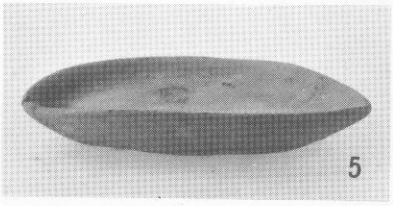
2　S E505井戸（下駄出土状態）

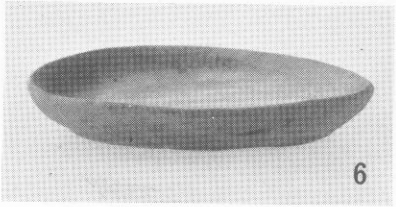

1

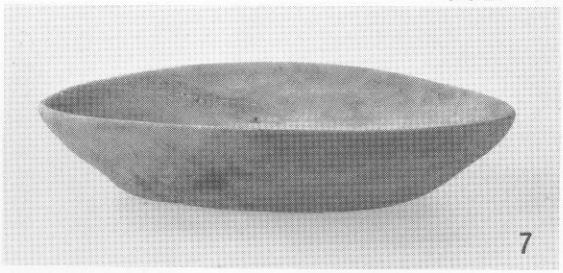

2

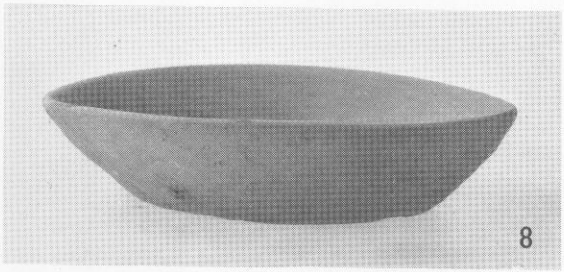

3

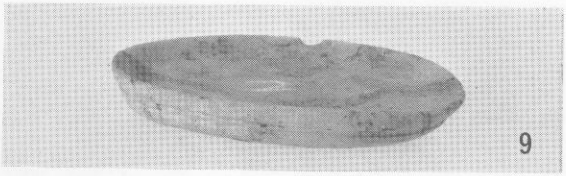

4

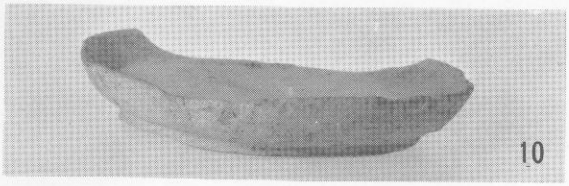

5

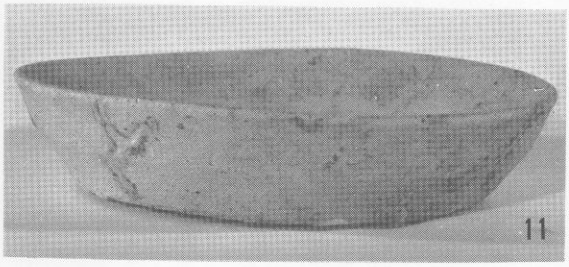

6


7


8

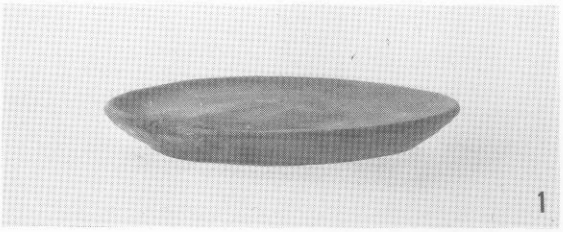

9

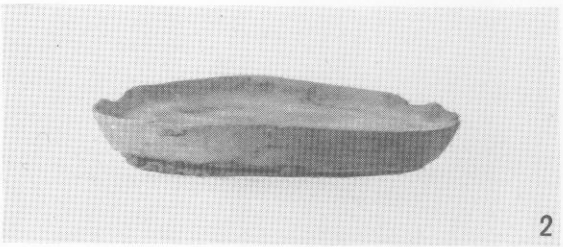

10

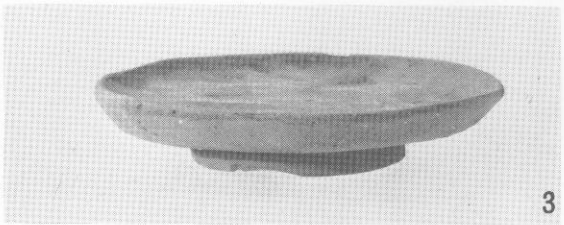

11

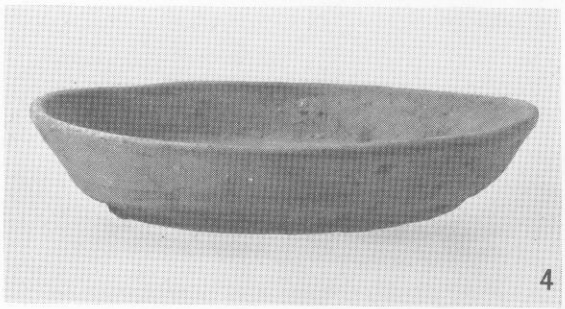

12

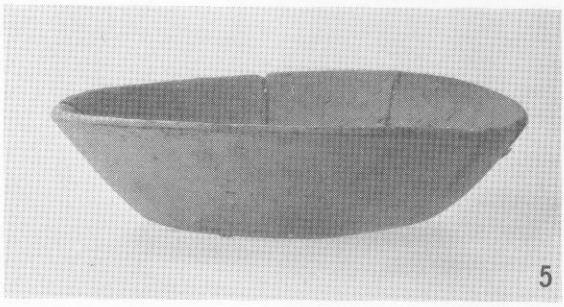
土師器・瓦器(12)　（1～8—SK501、9～12—SK520出土）

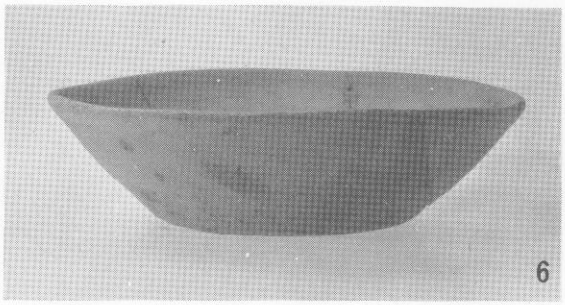

1

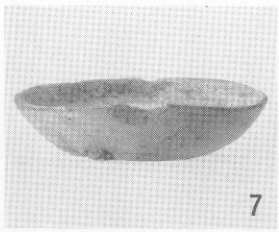

2

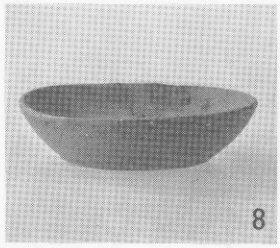

3

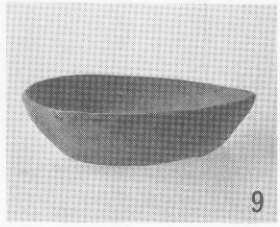

4

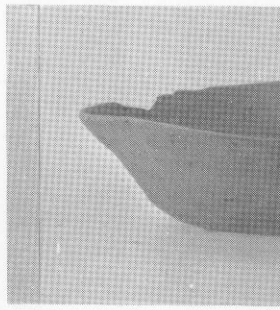

5

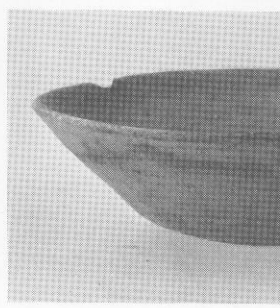

6

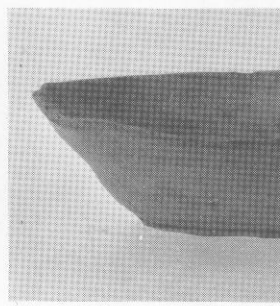

7

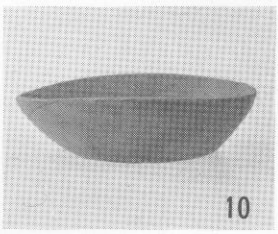

8

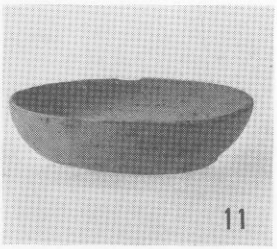

9

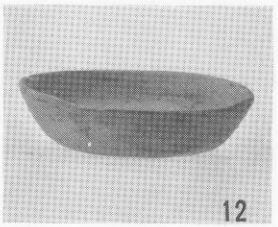

10

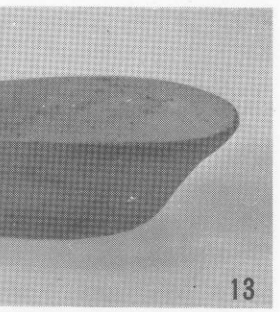

11

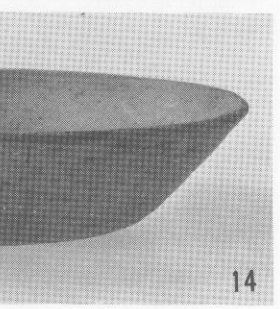
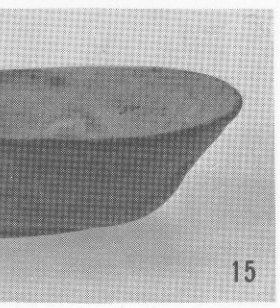

12


13


14


15


土師器　（1～4—SE505、5～15—SE516出土）



1　須恵器壺　（ＳＫ546土坑出土）



2　火鉢



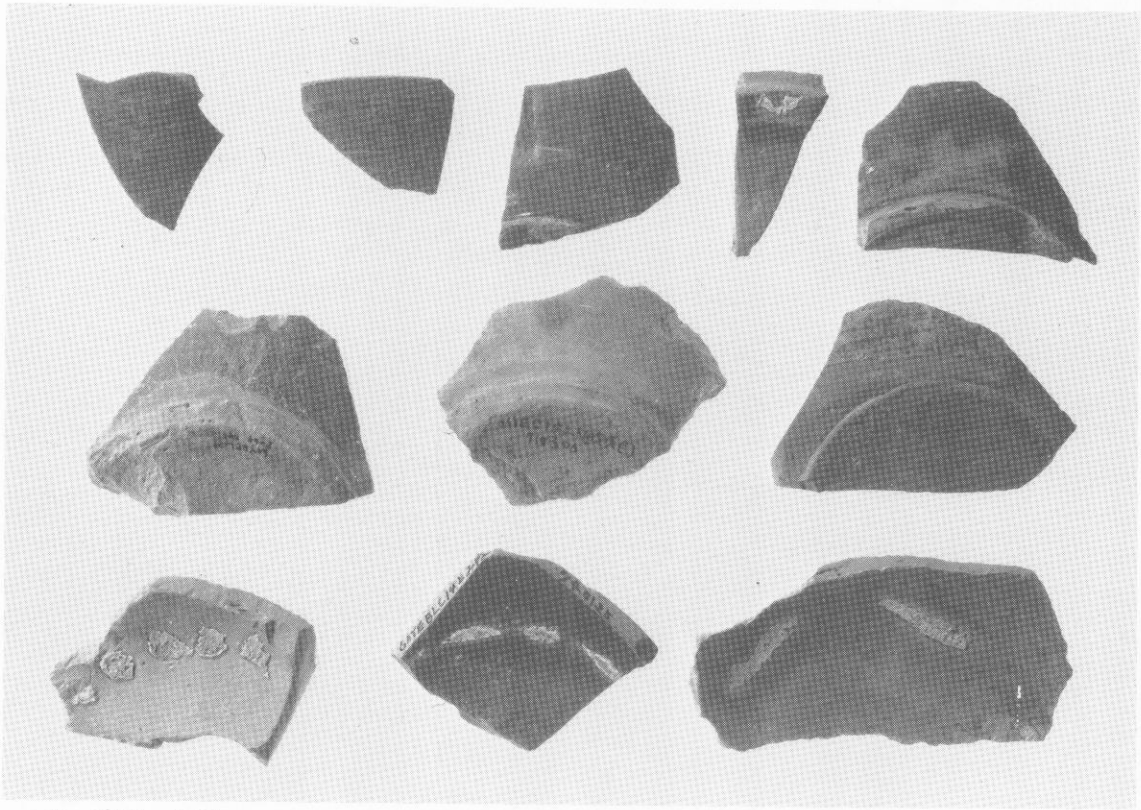
1　片口 (1)



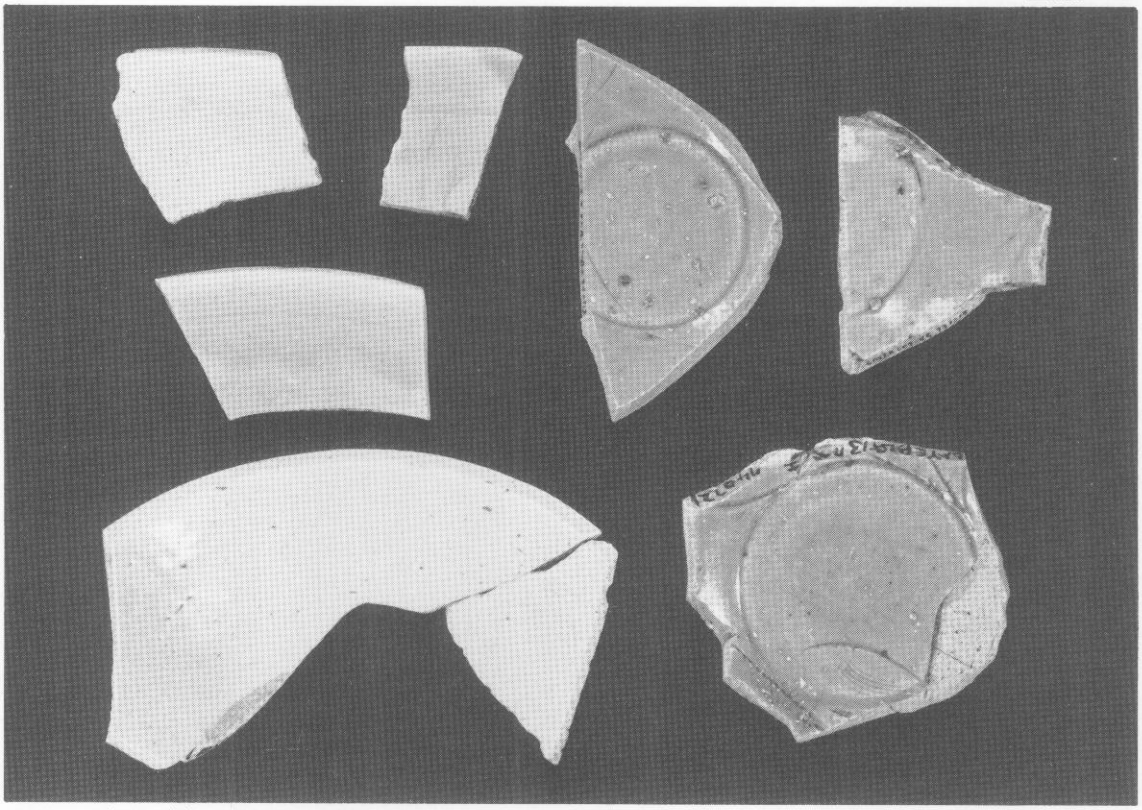
2　片口 (2)



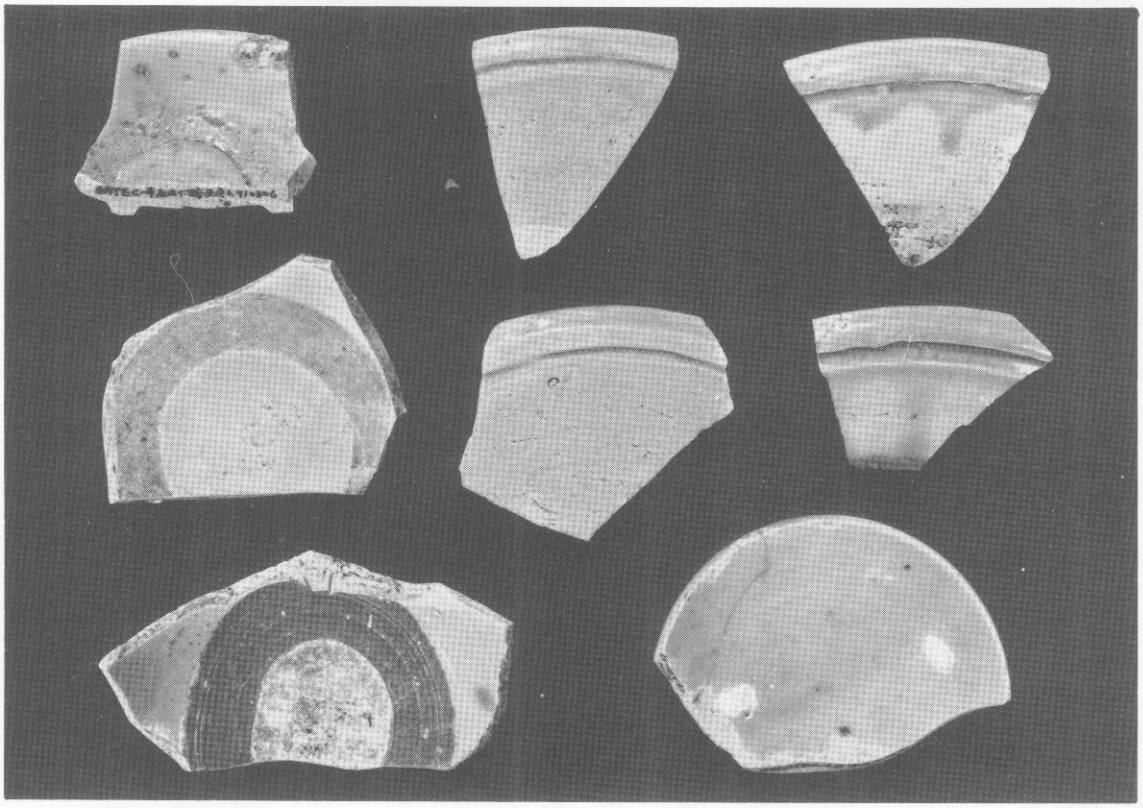
1　完形青磁椀　7類



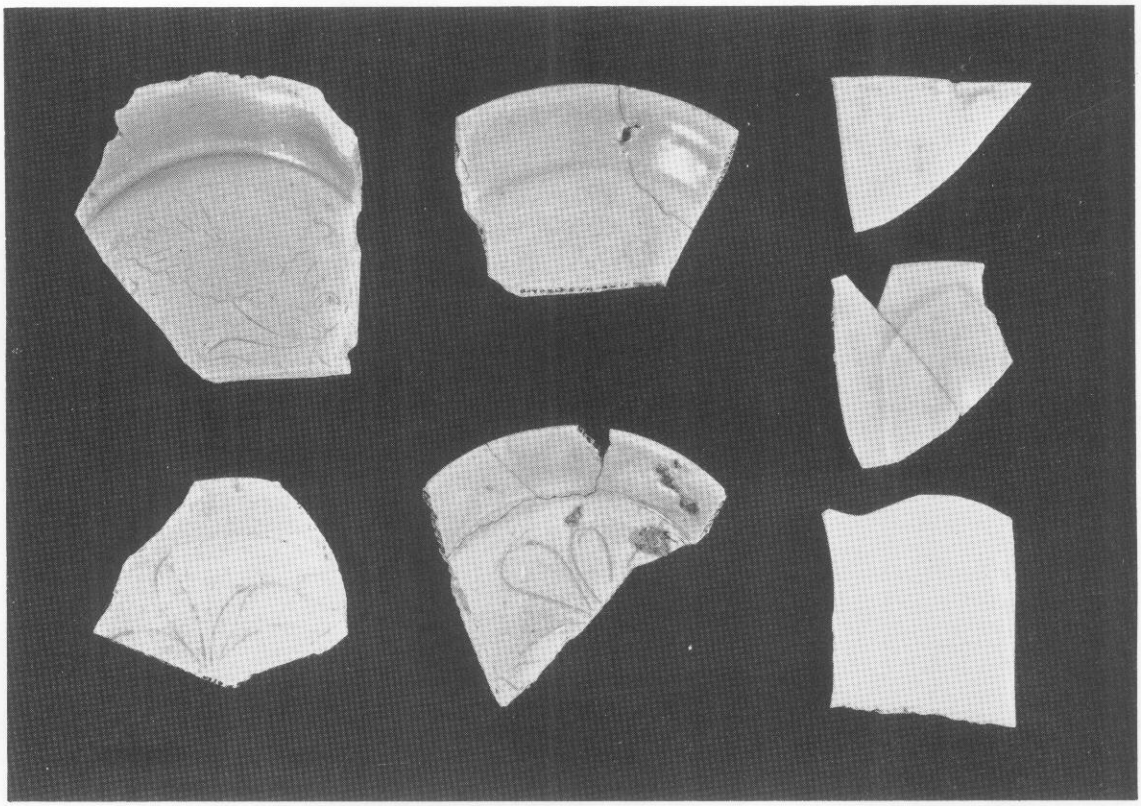
2　青磁　1類



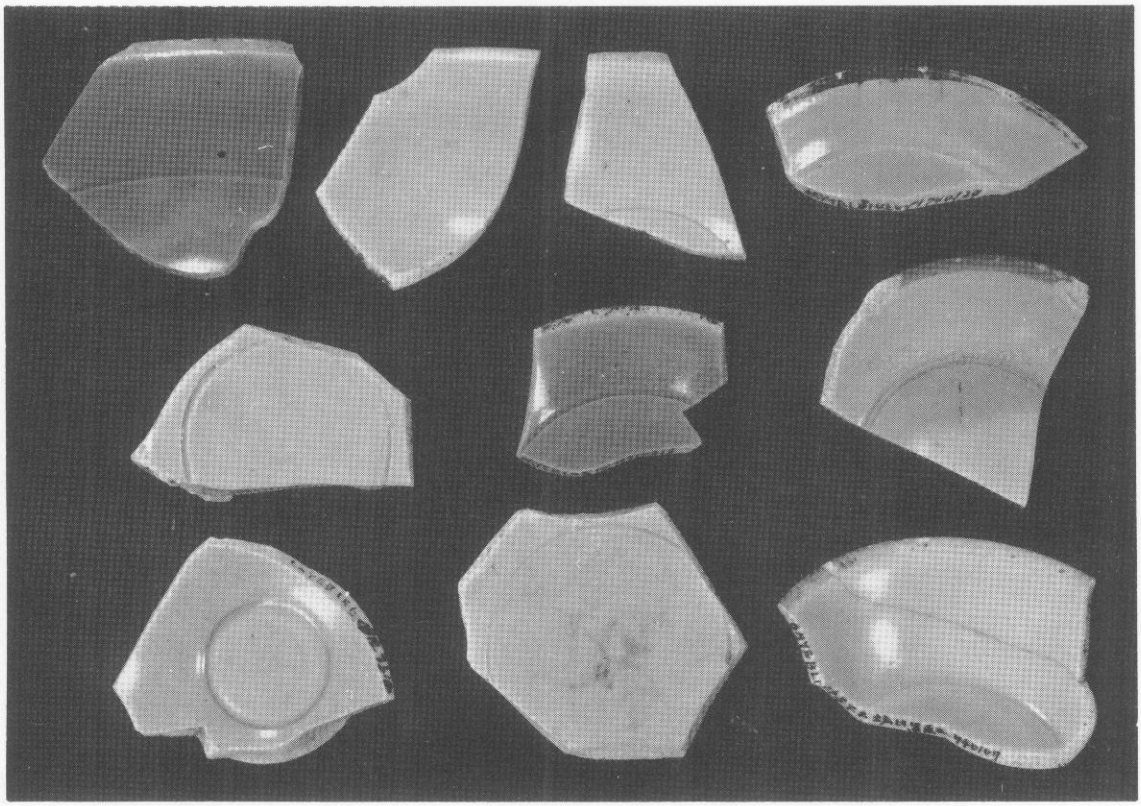
1　白磁　(1)



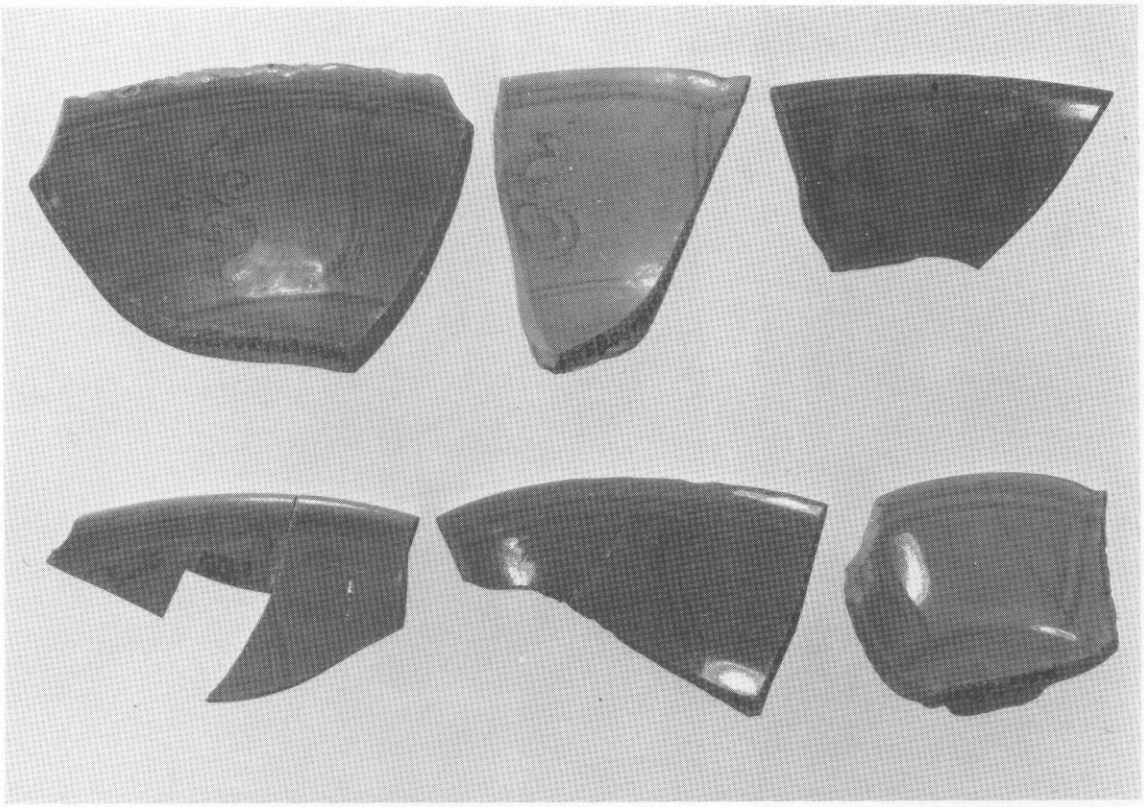
2　白磁　(2)



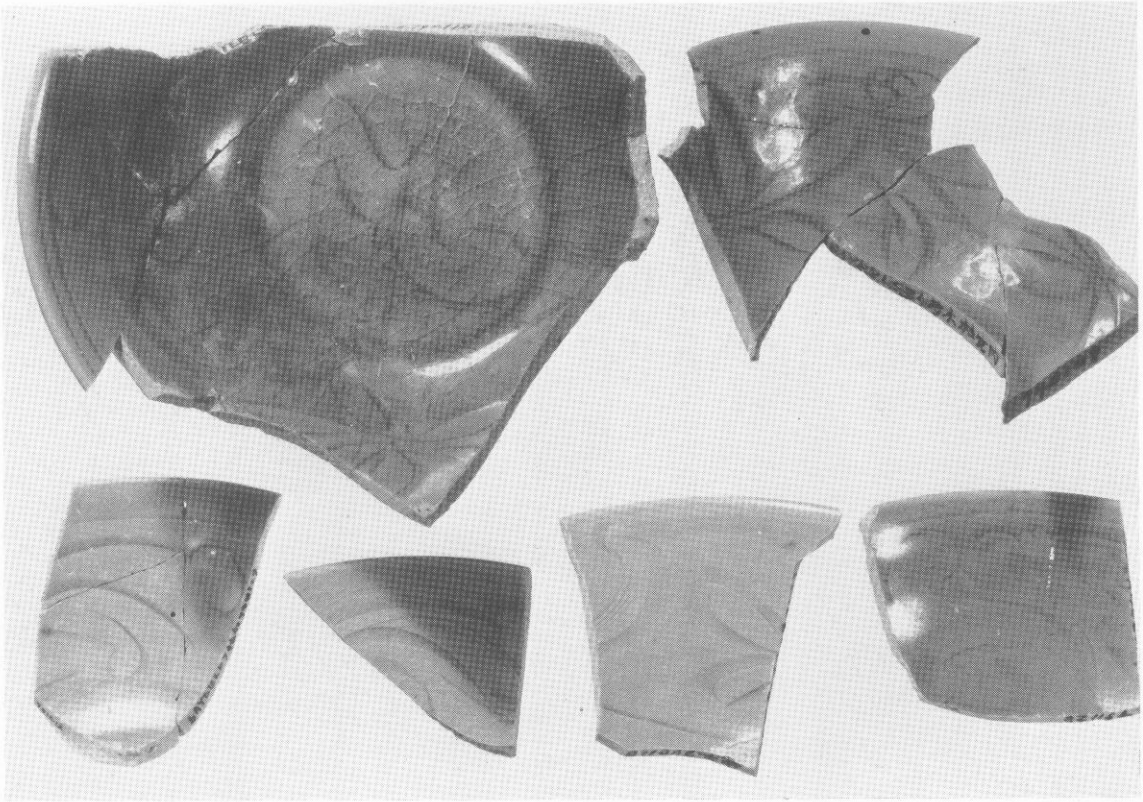
1　白磁　(3)



2　白磁　6類



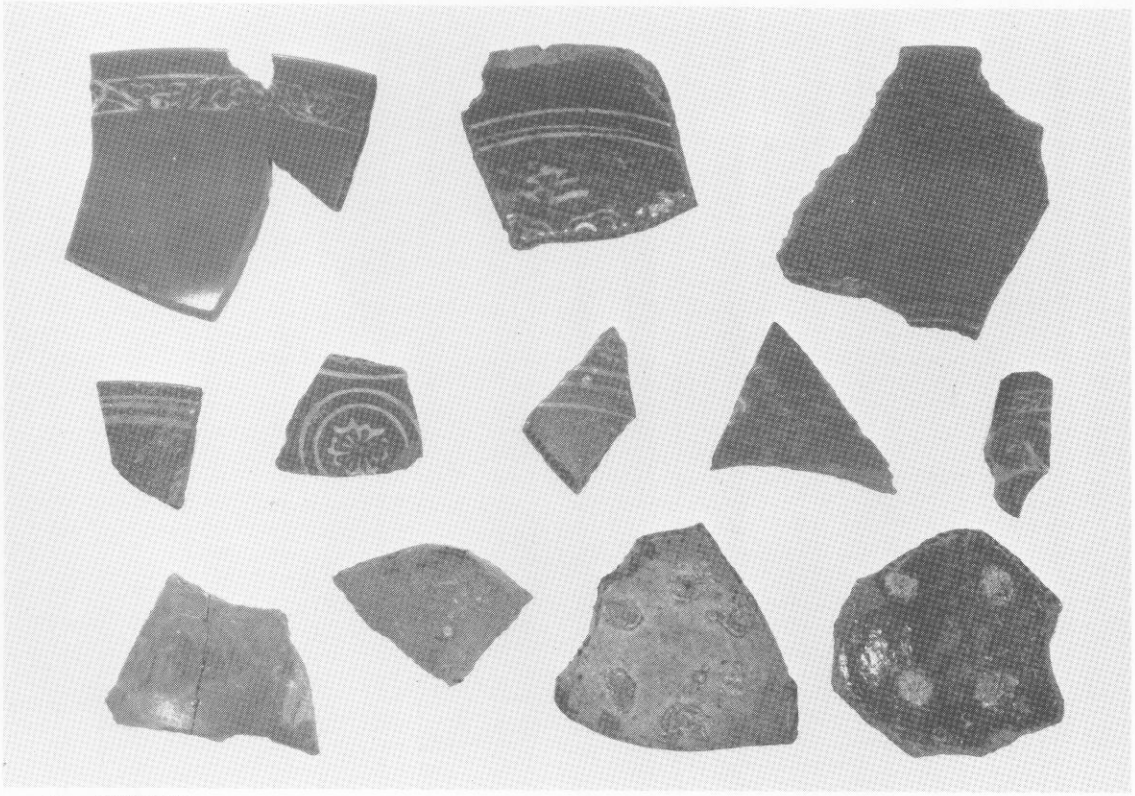
1　青磁　7類(1)



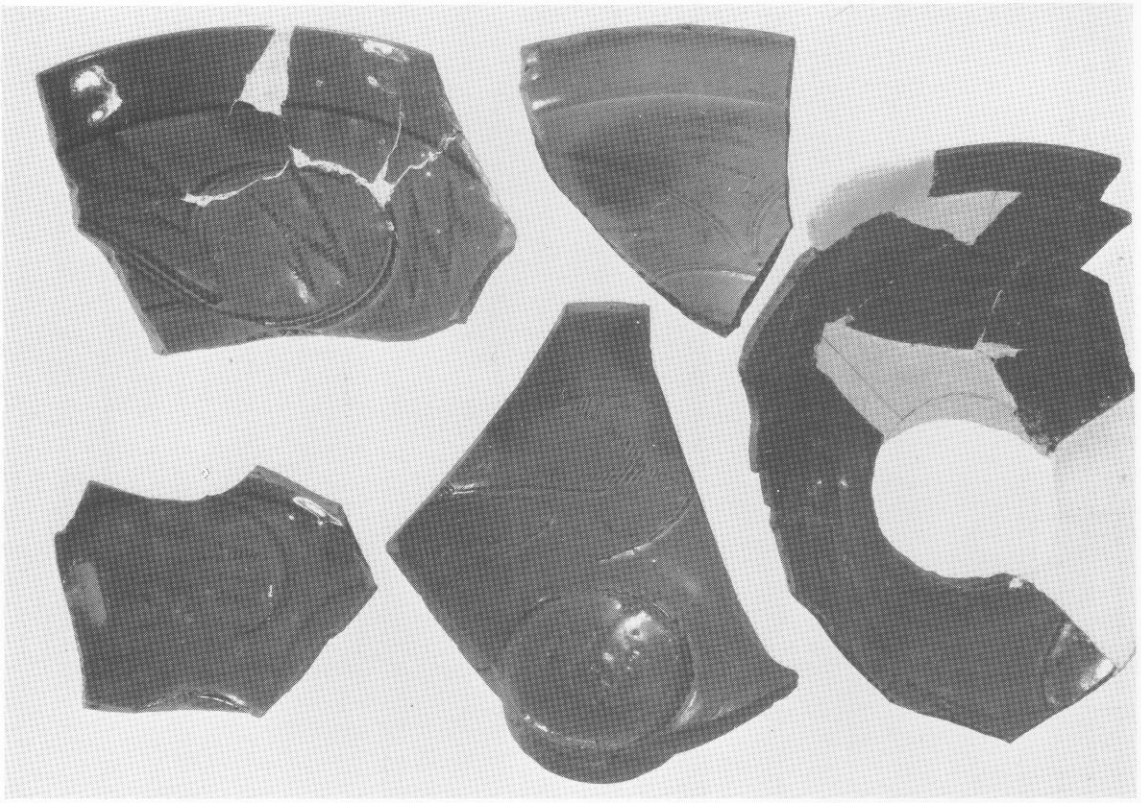
2　青磁　7類(2)



1　青磁　7類(3)



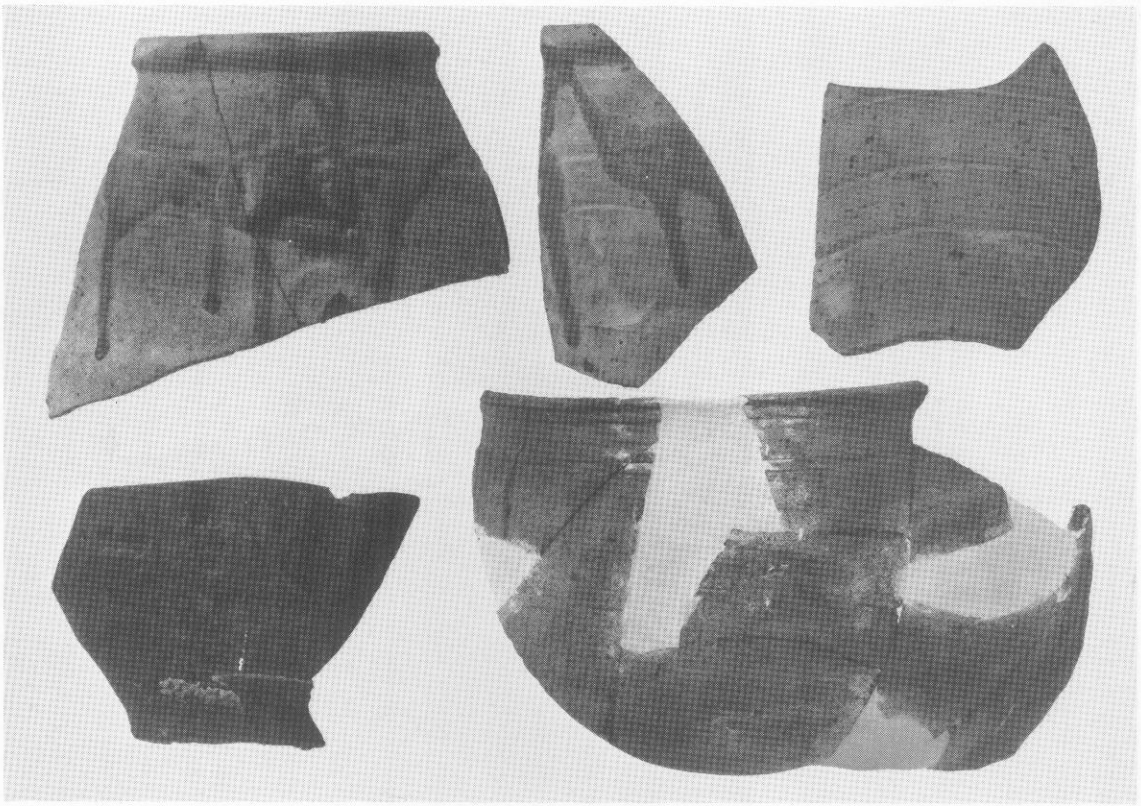
2　高麗青磁



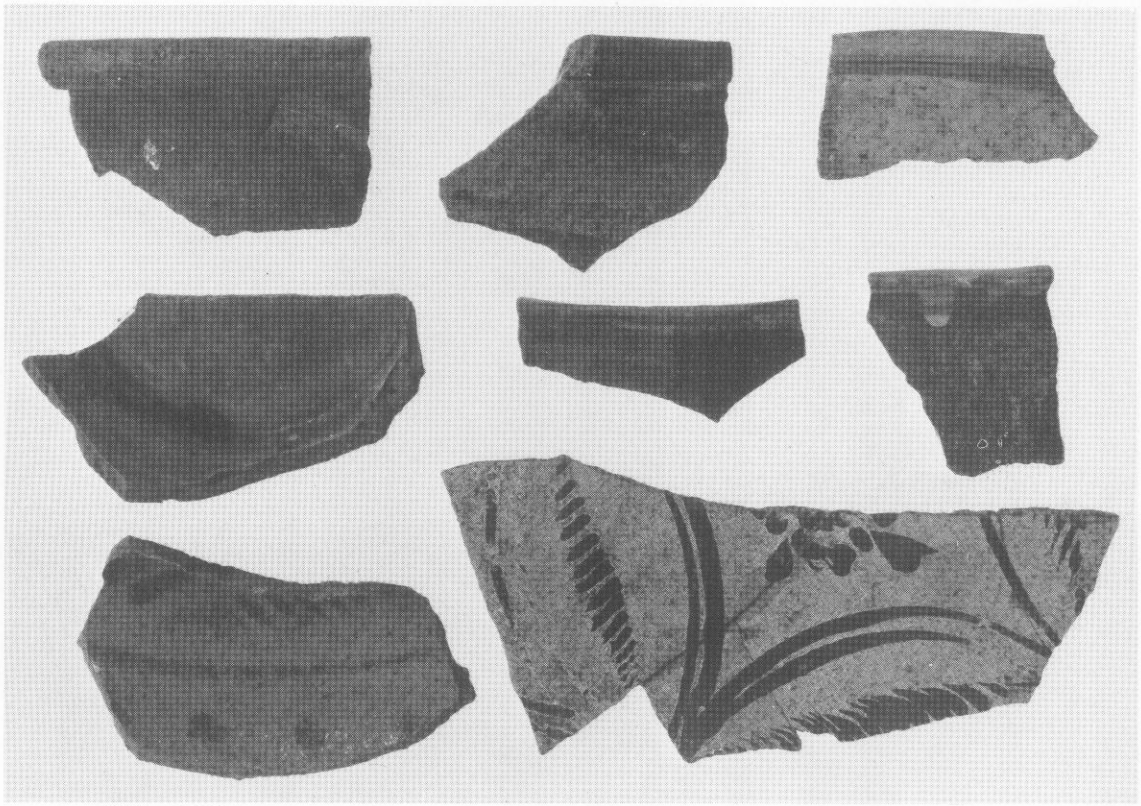
1　青磁　9類(1)



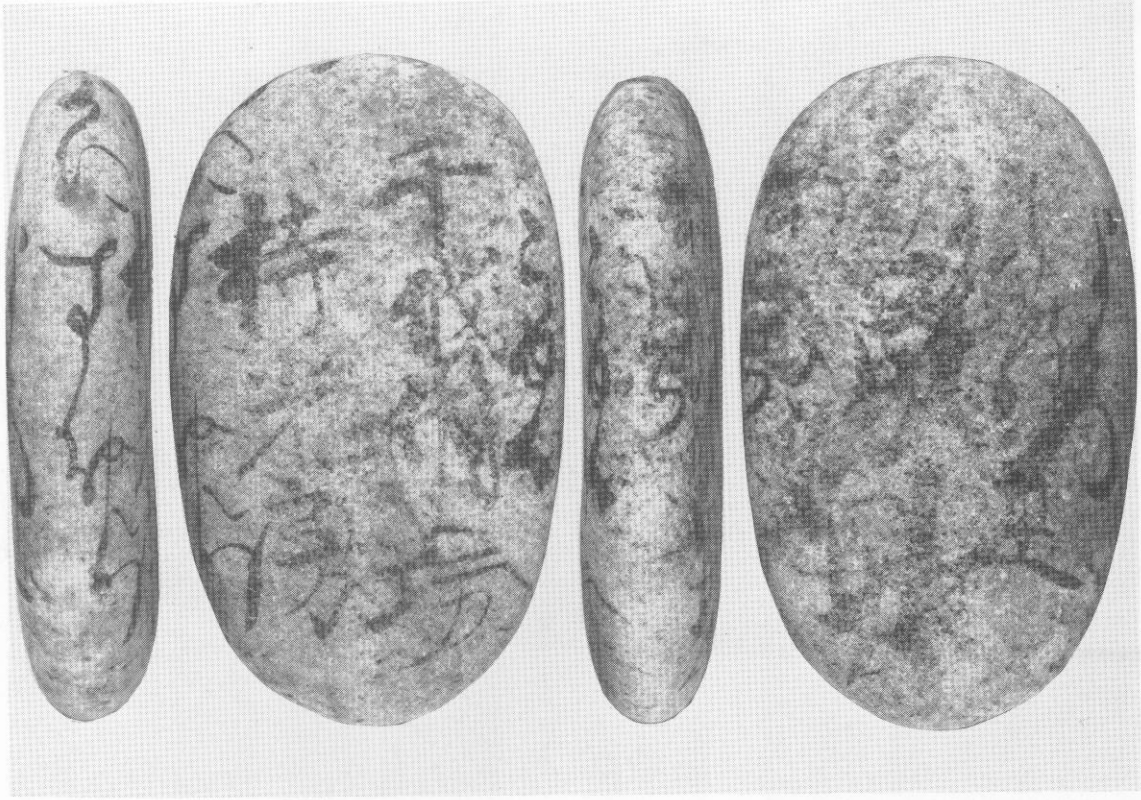
2　青磁　9類(2)



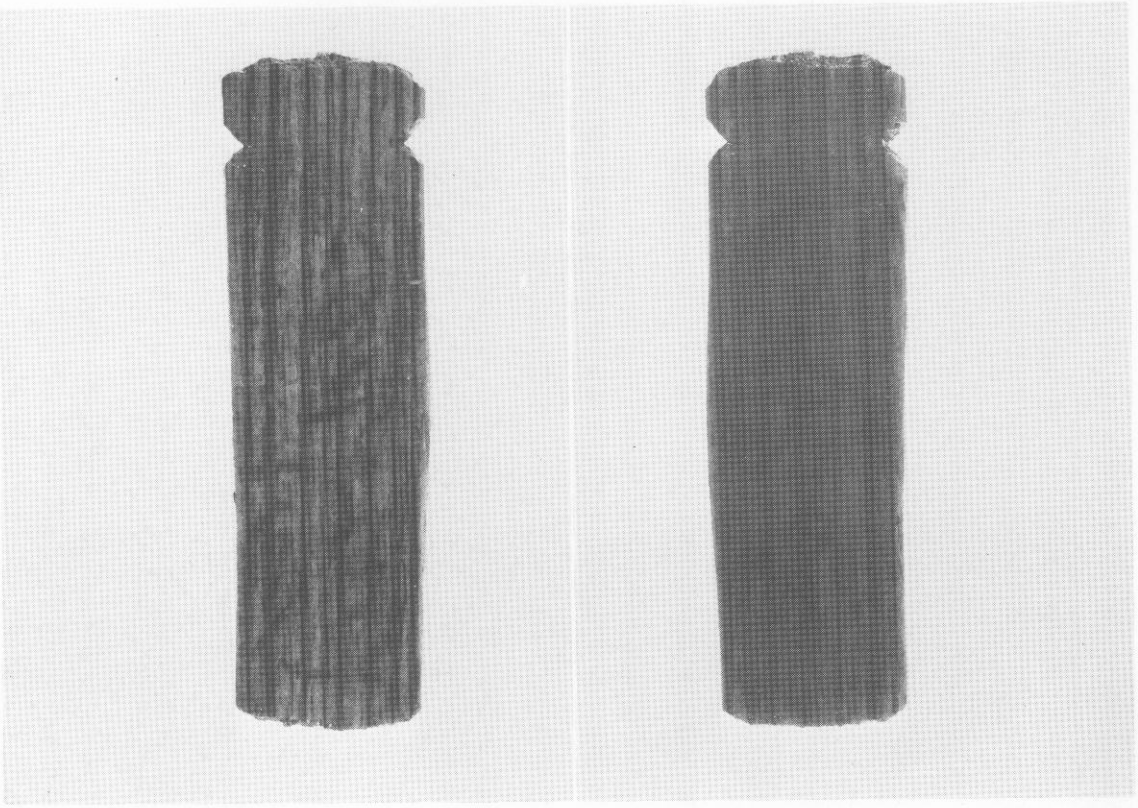
1　雑器　1類



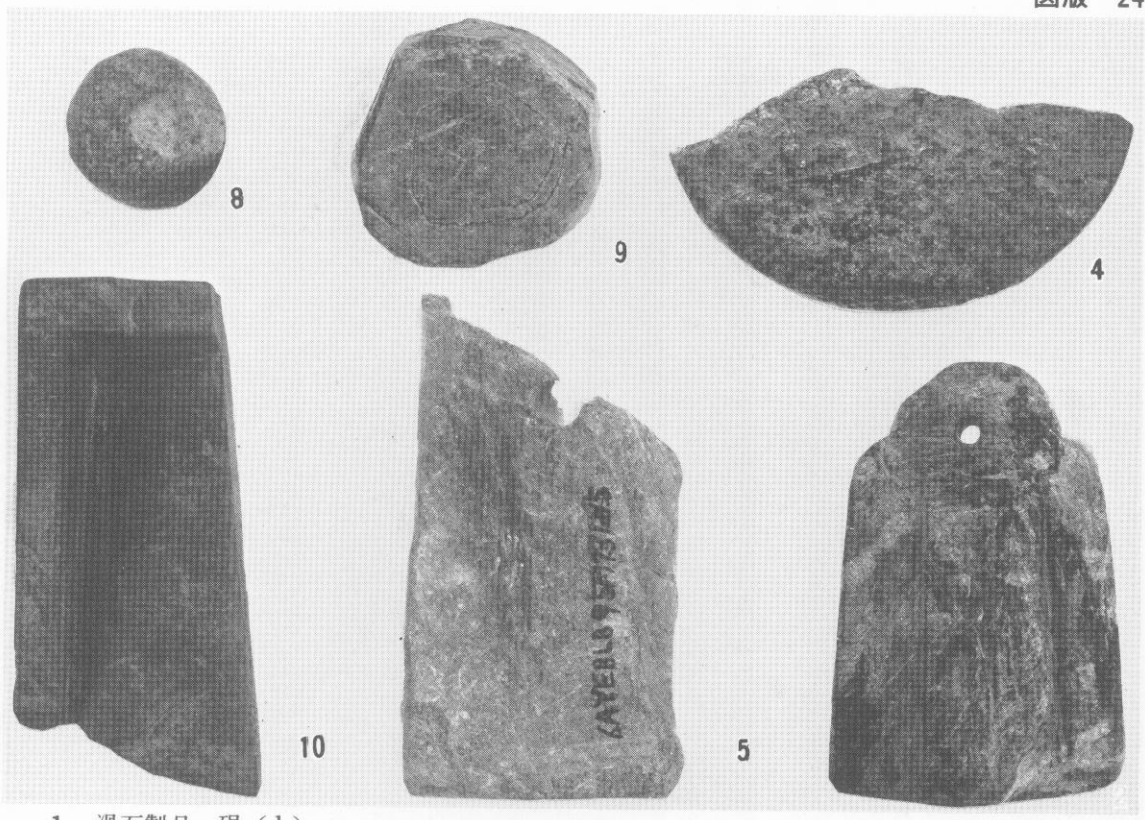
2　雑器　7類



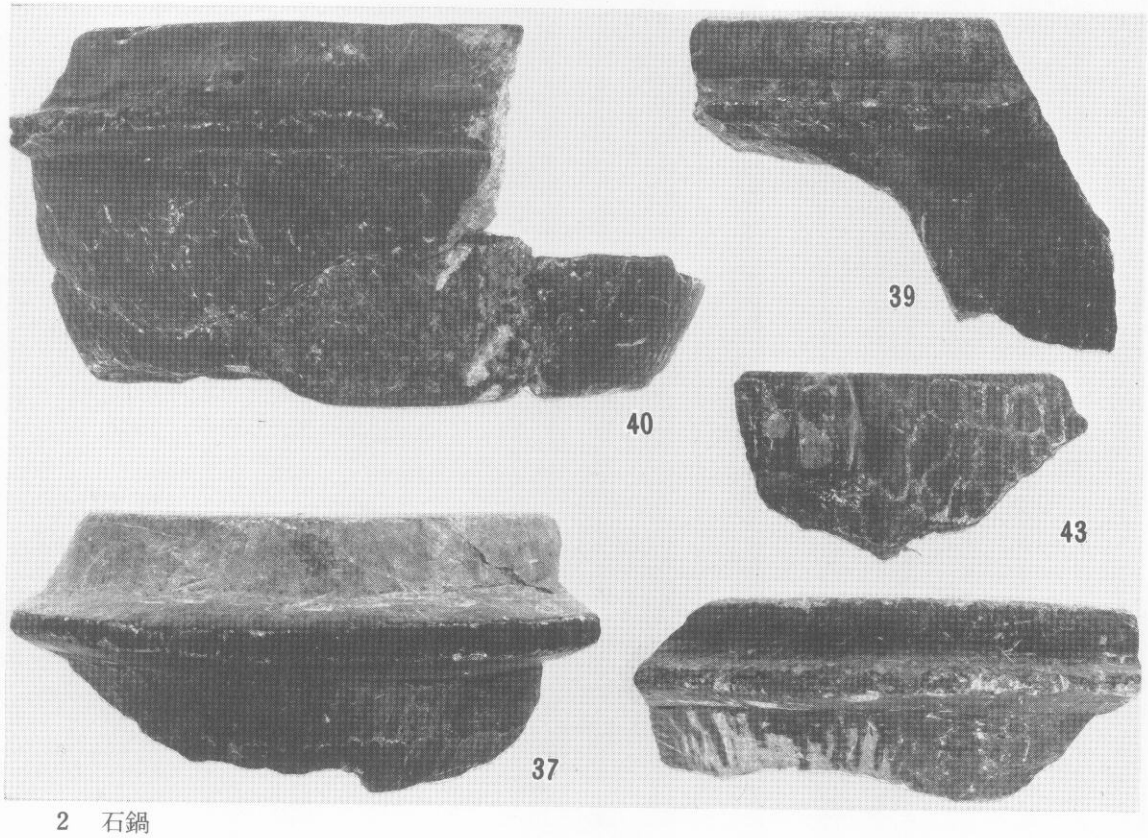
1　墨書礫（$\frac{1}{1}$）



2　墨書木札（$\frac{1}{1}$）



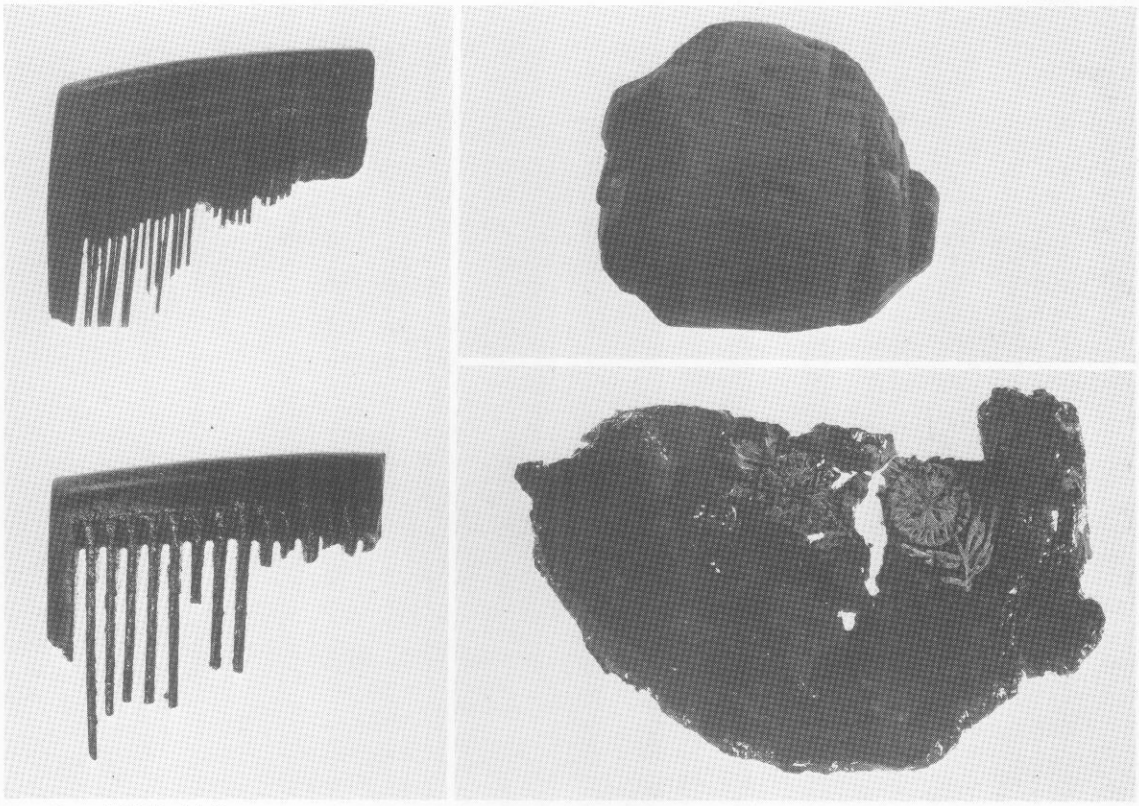
1　滑石製品・硯（$\frac{1}{4}$）



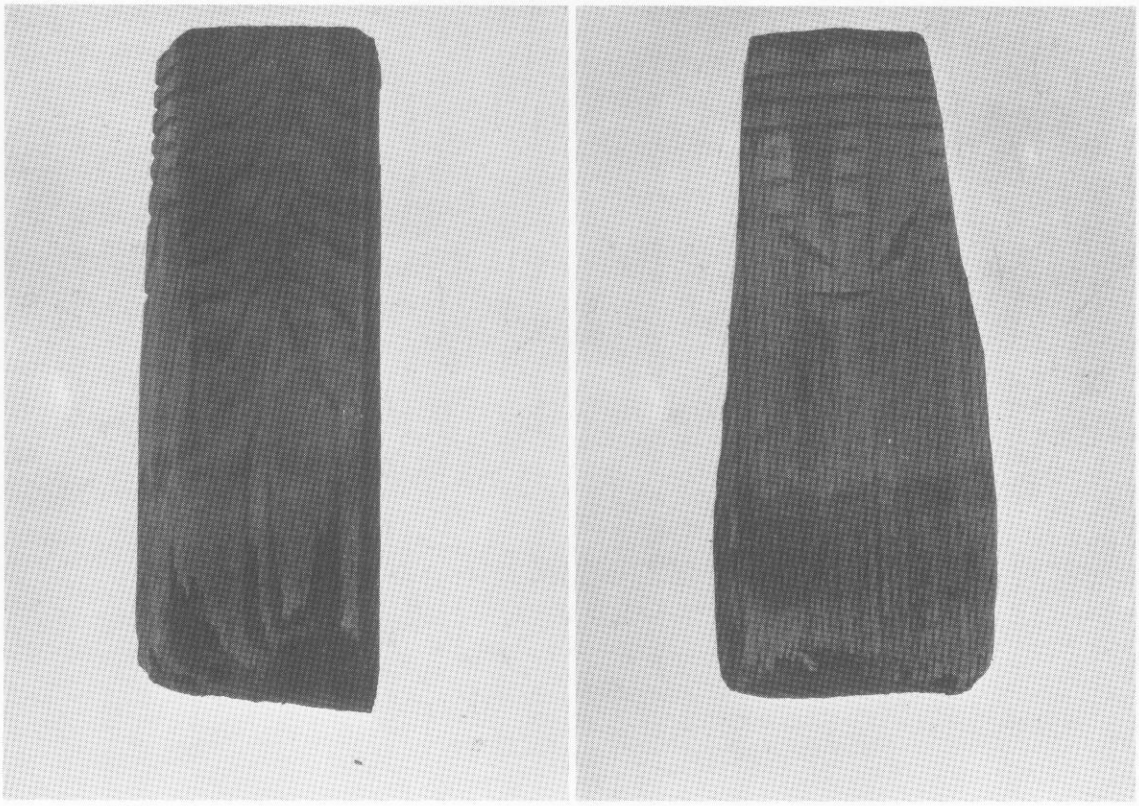
2　石鍋

1 ガラス・金属製品 (1/1)

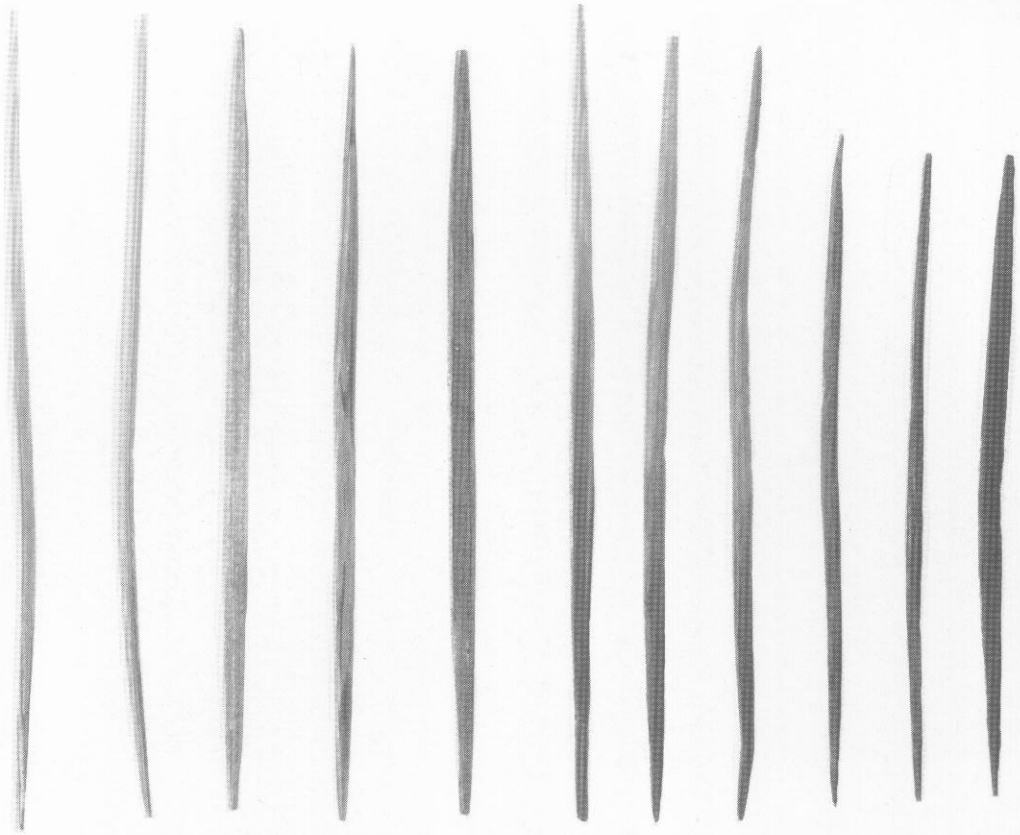
2 銅銭



1　木製品（$\frac{1}{1}$）



2　木偶（$\frac{1}{1}$）

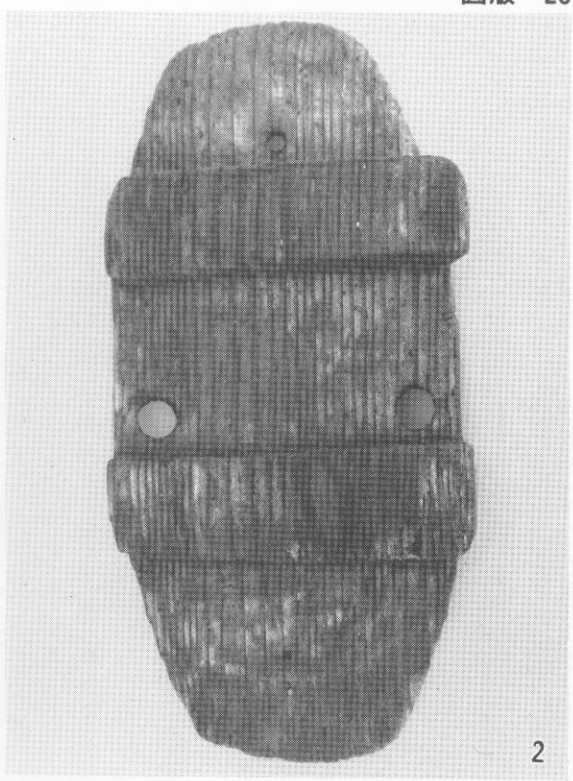


1　箸

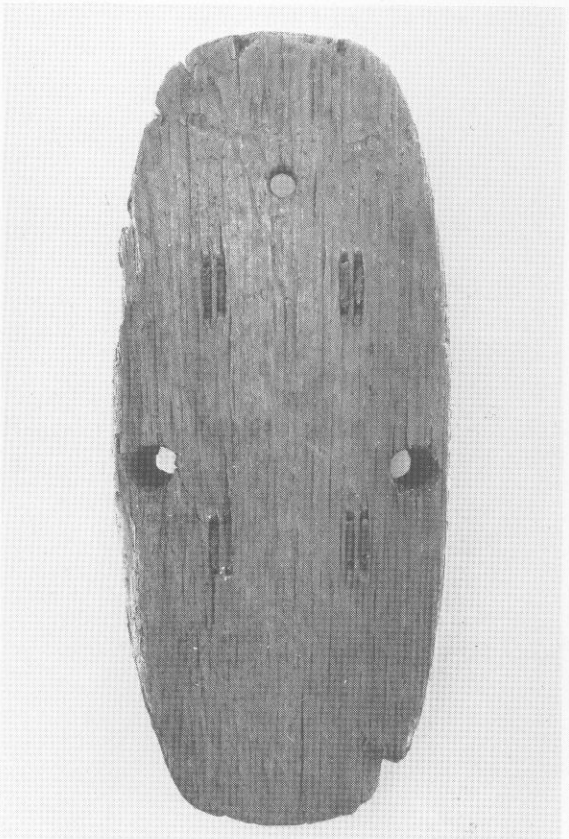


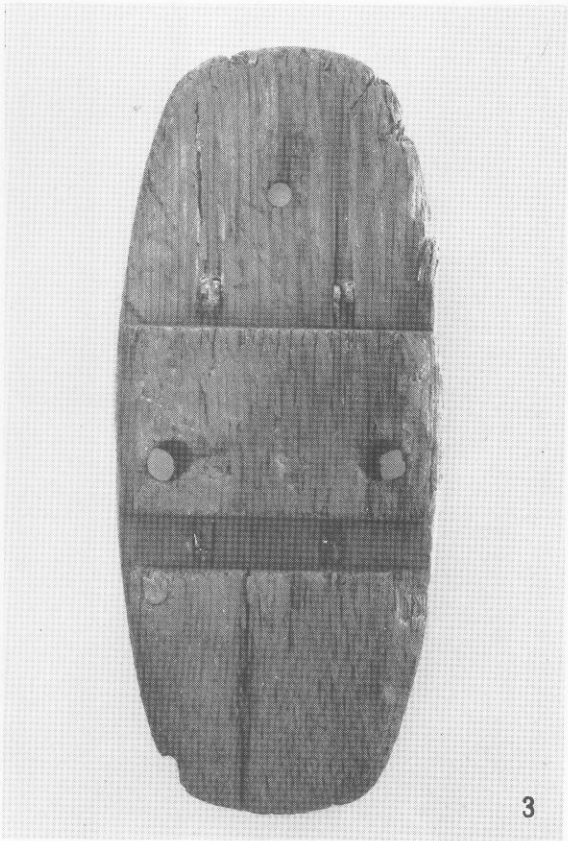
2　動・植物性遺物（ＳＫ501土坑出土）





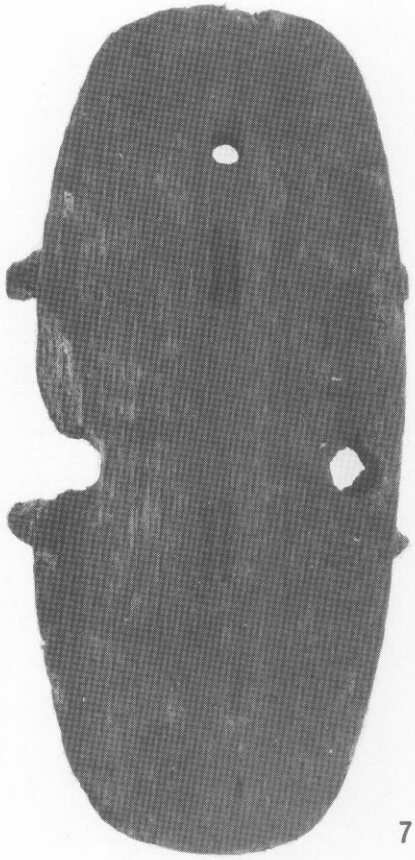
2



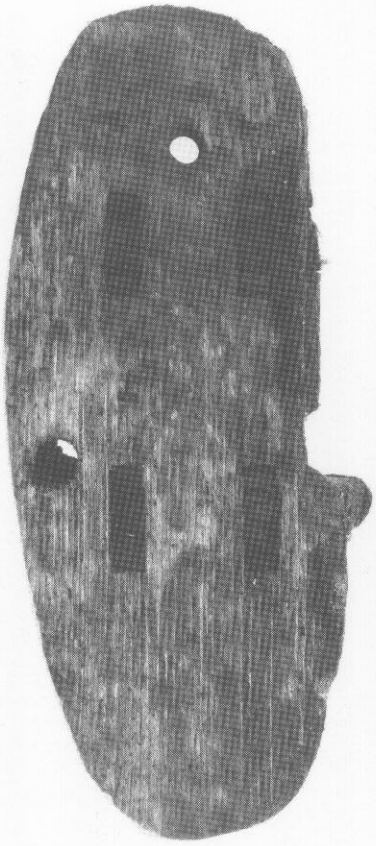


3

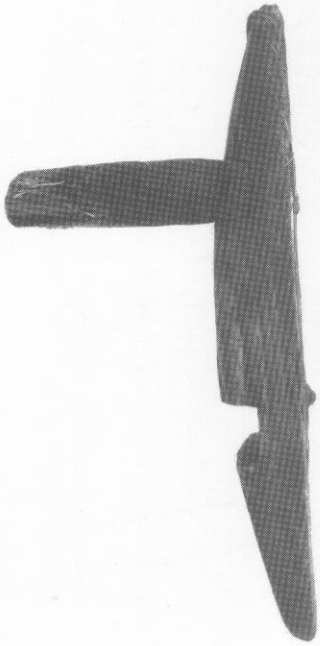
下駄 (1) (1/2)



7



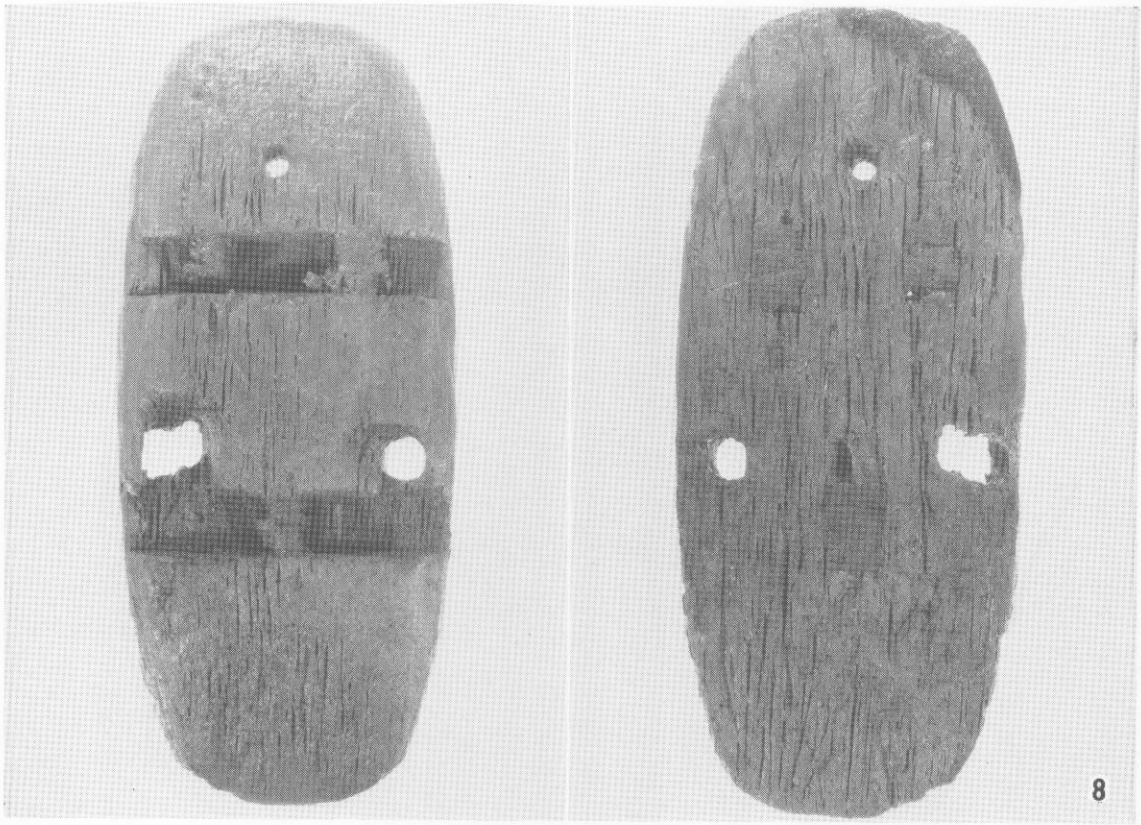
10



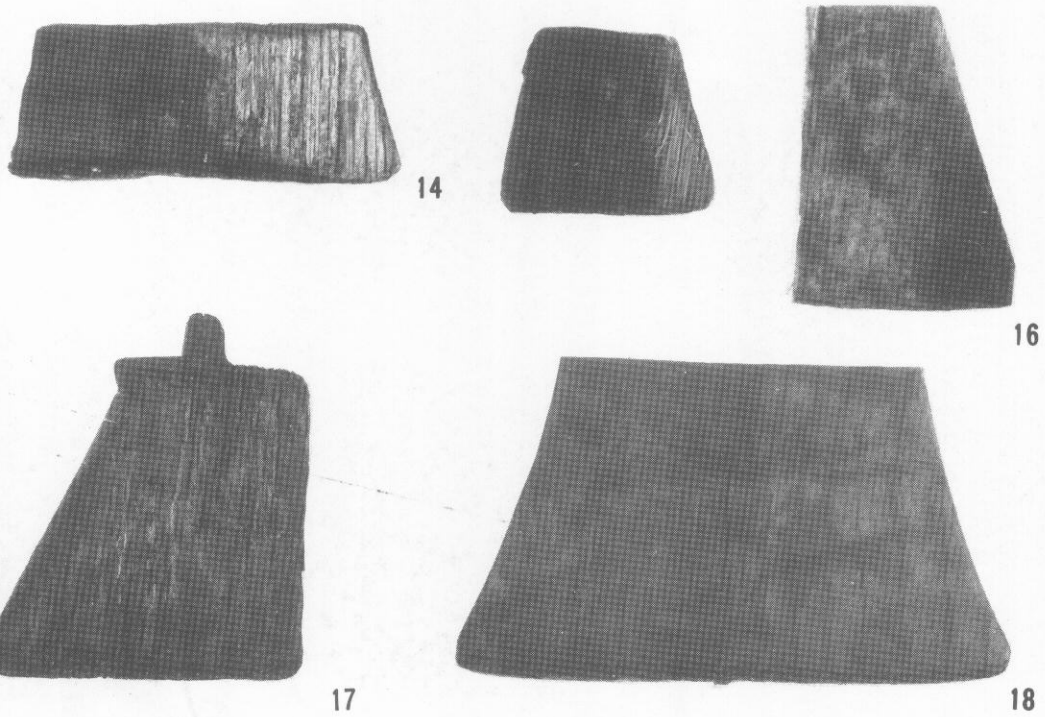


9

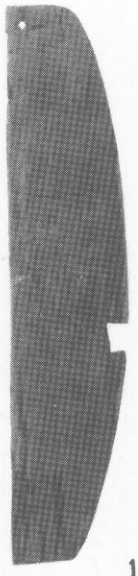
下駄　(2)（$\frac{1}{2}$）



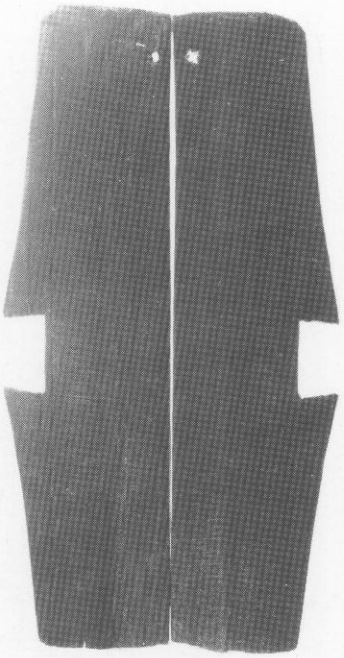
1　下駄 (3) (½)



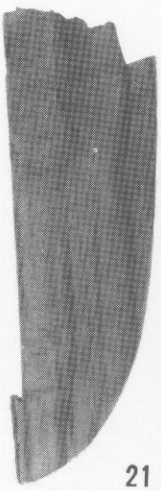
2　下駄歯 (½)



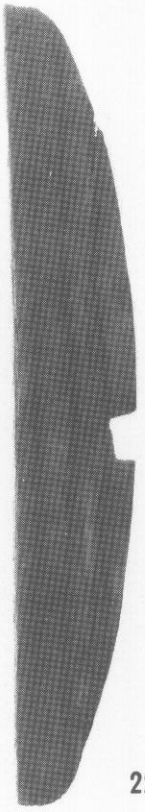
19



20



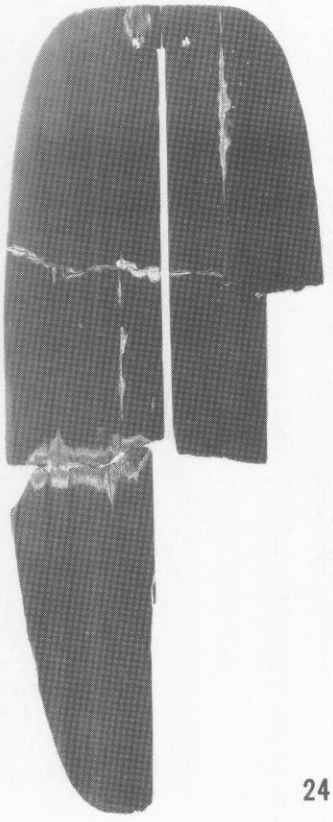
21



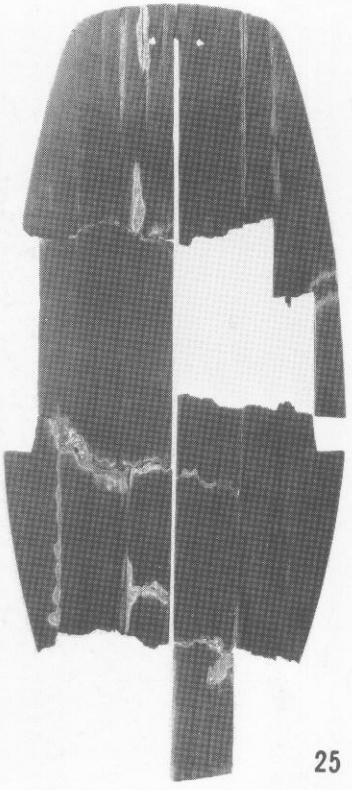
22



23



24



25

履物状木製品（$\frac{1}{2}$）



1　水城跡発掘状況



2　調査区土層

福岡南バイパス関係理蔵文化財調査報告

——第 2 集——

昭和５０年３月３１日

発 行　福 岡 県 教 育 委 員 会

福岡市中央区西中洲６街区29号

印 刷　株式会社　チューエツ

福岡市博多区東比恵２丁目９番１号